

瀬戸内町遺跡詳細分布調査報告書



2005年3月
鹿児島県大島郡 瀬戸内町教育委員会

瀬戸内町
遺跡詳細分布調査
報 告 書

瀬戸内町教育委員会

序 文

昨年度、奄美が日本復帰をはたして 50 年目の節目の年をむかえました。本町でも様々な復帰関連の行事を行いましたが、日本復帰をはたした当時と比べてみると、社会構造の急激な変化には、目をみはるものがあります。本町でも、住宅造成や公共事業の件数が増加してきています。町民の生活が飛躍的に改善されていく中で、開発事業と文化財保護の調整が必要となる事例が増加してまいりました。

そのような事情から、瀬戸内町では、平成 15 年度より独自に町内の遺跡詳細分布調査を実施してまいりました。調査の結果、瀬戸内町にも多くの埋蔵文化財が存在している事実が解りました。本町の埋もれた歴史が解明されることにより、町民全体が地域の歴史・文化に対する理解を深めていただく事を期待しております。また、開発事業と埋蔵文化財保護をめぐる事前調整を円滑に進めていくため、本書が文化財保護における基礎資料として各関係機関で活用されるよう念願いたしております。

今回の詳細分布調査報告書は、埋蔵文化財だけでなく民俗学・近代史の面でも充実しており、多方面の研究者の方に本書の活用が期待されます。近代史の面では、近代化遺産の分布図を記載しております。瀬戸内町には、近代化遺産が良好に残っていることが知られておりますが、平成 17 年度は戦後 60 周年ということもあり、文化財の分布調査に戦争遺跡も含めて調査を行う予定であります。

文末ではありますが、御指導いただいた鹿児島県教育庁文化財課の先生方、調査指導をしていただきました琉球大学法文学部教授の池田榮史先生、名瀬市教育委員会の高梨修先生、助言・協力をしていただきました関係者の皆様に対して、衷心より厚く御礼申し上げます。

平成 17 年 3 月

瀬戸内町教育委員会

教育長 徳永 敬次

報 告 書 抄 錄

ふりがな	せとうちちょういせきしようさいぶんぶちょうさほうこくしょ					
書名	瀬戸内町遺跡詳細分布調査報告書					
副書名						
卷次						
シリーズ名	瀬戸内町文化財調査報告書					
シリーズ番号	1					
編著者名	鼎 丈太郎					
編集機関	瀬戸内町教育委員会					
所在地	〒894-1592 大島郡瀬戸内町古仁屋船津23					
発行年月日	平成17(2005)年3月31日					
コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号					
種別		主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	

例　　言

- 1 本書は、瀬戸内町教育委員会が、平成15（2003）年度から実施継続している「瀬戸内町遺跡詳細分布調査」の調査成果に関する正式報告である。
- 2 当該分布調査は、瀬戸内町教育委員会が独自に実施継続しているものである。
- 3 本書で使用した地形図は、瀬戸内町所有のものを複製転用したものである。
- 4 瀬戸内町は、集落数が多く、集落規模に差があるため、各集落別に遺跡所在箇所を示している周辺地形図の縮尺は、統一されていない。
- 5 遺跡分布図は、遺跡の範囲を確認しやすいように実線で引いたが、これは表面採集調査で確認された範囲であり、実際の発掘調査などによりその範囲が変動する可能性がある。また、未調査地区も存在するため、開発事業については遺跡範囲内外にかかわらず調整が必要である。
- 6 本書の編集は、鼎丈太郎（瀬戸内町教育委員会嘱託員）が担当した。本書の執筆は、主として鼎丈太郎が担当したが、第4章第6節の既刊文献より作成した軍事施設・配備部隊一覧作成は河津梨絵（瀬戸内町教育委員会臨時職員）が、第5章第1節の遺物散布地の民俗空間の箇所は、町健次郎（瀬戸内町教育委員会）が執筆した。
- 7 本書における写真撮影は主として鼎が担当した、挿図作成は主として鼎が担当したが、第4章第6節の既刊文献より作成した軍事施設・配備部隊一覧の挿図は、河津が担当し、第5章第1節の遺物散布地の民俗空間の写真是、町が担当した。
- 8 分布調査および報告書作成に際して、池田栄史氏（琉球大学法文学部教授）、高梨修氏（名瀬市教育委員会）、池村茂氏（徳之島町文化財保護審議会委員、工房海彩代表）、前田芳之氏（瀬戸内町文化財保護審議会会长）、清さつき氏（名瀬市教育委員会嘱託員）、上田伊津夫（諸錦シバヤ芸能保存会会长）の指導、助言・協力をいたいた。
- 9 瀬戸内町内の埋蔵文化財包蔵地ならびに他の文化財の保護・保存については瀬戸内町教育委員会で対応している。諸開発事業（公共・個人）を計画する場合、事前に瀬戸内町教育委員会へ文化財の有無についての確認が必要である。
- 10 当該分布調査に係わる調査記録や採集遺物等の一切は、瀬戸内町立図書館・郷土館（瀬戸内町教育委員会）で保管されている。

本文目次

序 文

報告書抄録

例 言

本文目次

挿図目次

図版目次

表 目 次

<u>第1章 調査に至る経緯</u>	1
<u>第2章 濑戸内町の概況</u>	2
<u>第3章 調査要綱</u>	3
第1節 調査組織	3
第2節 調査方法	4
<u>第4章 調査成果</u>	5
第1節 調査概要	5
第2節 古仁屋地区	8
第3節 西方地区	32
第4節 実久地区	48
第5節 鎮西地区	72
第6節 既刊文献より作成した軍事施設・配備部隊一覧	114
<u>第5章 考 察</u>	124
第1節 遺物散布地の民俗空間	124
第2節 濑戸内町における遺跡の立地について	135
<u>第6章 総 括</u>	145
謝 辞	

挿図目次

- 第1図 潬戸内町位置図
第2図 潤戸内町の地区区分
第3図 潤戸内町遺跡分布図
第4図 古仁屋地区遺跡分布図
第5図 嘉徳アサト遺跡位置図
第6図 嘉徳集落遺跡位置図
第7図 節子集落遺跡位置図
第8図 網野子サト遺跡位置図
第9図 勝浦集落遺跡位置図
第10図 伊須集落遺跡位置図
第11図 鉄駒カイツ遺跡位置図
第12図 薩刈集落遺跡位置図
第13図 嘉鉄サト遺跡位置図
第14図 清水集落遺跡位置図
第15図 手安集落遺跡位置図
第16図 西方地区遺跡分布図
第17図 古志サト遺跡位置図
第18図 久慈イメ遺跡位置図
第19図 久慈マエダ遺跡位置図
第20図 久慈集落遺跡位置図
第21図 管鈍集落遺跡位置図
第22図 西古見城跡位置図
第23図 西古見集落遺跡位置図
第24図 実久地区遺跡分布図
第25図 実久集落遺跡位置図
第26図 芝タンマ遺跡位置図
第27図 芝集落遺跡位置図
第28図 薩川集落遺跡位置図
第29図 漢武サト遺跡位置図
第30図 阿多地イバタ遺跡位置図
第31図 須子茂集落遺跡位置図
第32図 武名チノウラ遺跡位置図
第33図 俵サト遺跡位置図
第34図 潤相ムラウチ遺跡位置図
第35図 西阿室集落遺跡位置図
第36図 鎮西地区遺跡分布図
第37図 花富ヒラタ遺跡位置図
第38図 伊子茂ナカサト遺跡位置図
第39図 於齊集落遺跡位置図
第40図 押角ムラウチ遺跡位置図
第41図 勝能サト遺跡位置図
第42図 諸数集落遺跡位置図
第43図 生間ミタ遺跡位置図
第44図 渡連ムラウチ遺跡位置図
第45図 渡連アンキャバ遺跡位置図
第46図 諸鈍トクハマ遺跡位置図
第47図 諸鈍坂跡位置図
第48図 諸鈍クリ遺跡位置図
第49図 諸鈍カネク遺跡位置図
第50図 諸鈍サト遺跡位置図
第51図 野見山オオサト遺跡位置図
第52図 秋徳集落遺跡位置図
第53図 諸河室集落遺跡位置図
第54図 池地アガンマ遺跡位置図
第55図 池地オーコーバリ遺跡位置図
第56図 与路集落遺跡位置図
第57図 潤戸内町戦跡分布図（全体図）
第58図 潤戸内町戦跡分布図（別記分）
第59図 潤戸内町遺跡分布図（縄文時代相当期）
第60図 潤戸内町遺跡分布図（弥生時代～古墳時代相当期）
第61図 潤戸内町遺跡分布図（飛鳥時代～平安時代前期相当期）
第62図 潤戸内町遺跡分布図（平安時代後期～江戸時代相当期）
第63図 潤戸内町遺跡立地模式図
第64図 潤戸内町における類須恵器完形品出土分布図

図版目次

- | | |
|----------------------------|---------------------|
| 1 潤戸内町文化財保護審議会調査風景(於斎) | 38 嘉鉄サト遺跡遠景 |
| 2 嘉徳アサト遺跡・嘉徳集落遺跡遠景 | 39 嘉鉄サト遺跡遺物散布地 |
| 3 嘉徳アサト遺跡 | 40 嘉鉄サト遺跡採集資料 |
| 4 嘉徳アサト遺跡出土品(郷土館所蔵) | 41 清水集落遺跡遠景 |
| 5 嘉徳アサト遺跡出土品(郷土館所蔵) | 42 清水集落遺跡遺物散布地 |
| 6 嘉徳アサト遺跡出土品(郷土館所蔵) | 43 清水集落遺跡採集資料 |
| 7 嘉徳アサト遺跡出土品(郷土館所蔵) | 44 手安集落遺跡遠景 |
| 8 嘉徳集落遺跡採集資料 | 45 手安集落遺跡遺物散布地(オドン) |
| 9 嘉徳集落遺跡採集資料 | 46 手安集落遺跡遺物散布地 |
| 10 嘉徳集落遺跡遠景 | 47 手安集落遺跡採集資料 |
| 11 節子集落遺跡遠景 | 48 古志サト遺跡遺物散布地(ミヤー) |
| 12 節子集落遺跡遺物散布地(ミヤー) | 49 古志集落調査風景 |
| 13 節子集落遺跡採集資料 | 50 古志サト遺跡採集資料 |
| 14 節子集落伝世品(郷土館所蔵) | 51 久慈イメ遺跡遺物散布地 |
| 15 節子集落伝世品(個人蔵) | 52 久慈イメ遺跡遺物散布地(老山家) |
| 16 節子集落伝世品(個人蔵) | 53 久慈イメ遺跡採集資料 |
| 17 綱野子サト遺跡遠景 | 54 久慈マエグ遺跡遺物散布地 |
| 18 綱野子サト遺跡遺物散布地(ミヤー) | 55 久慈マエグ遺跡採集資料 |
| 19 綱野子サト遺跡調査風景 | 56 久慈集落遺跡遠景 |
| 20 綱野子サト遺跡採集資料 | 57 久慈集落遺跡採集資料 |
| 21 勝浦集落遺跡遠景 | 58 管鈍集落遺跡遠景 |
| 22 勝浦集落遺跡遺物散布地 | 59 管鈍集落遺跡遺物散布地 |
| 23 勝浦集落遺跡遺物散布地(トネヤ) | 60 管鈍集落遺跡採集資料 |
| 24 勝浦集落遺跡採集資料 | 61 西古見城跡遠景 |
| 25 伊須集落遺跡遺物散布地(ミヤー) | 62 西古見集落遺跡遠景 |
| 26 伊須集落遺跡調査風景 | 63 西古見集落遺跡 |
| 27 伊須集落遺跡採集資料 | 64 西古見集落遺跡採集資料 |
| 28 伊須集落遺跡系集資料 | 65 西古見集落遺跡採集資料(フイゴ) |
| 29 船にて調査地へ向う(琉球大学池田教授調査指導) | 66 西古見集落遺跡採集資料(貝輪) |
| 30 嘉鉄カイツ遺跡遠景 | 67 実久集落遺跡遠景 |
| 31 嘉鉄カイツ遺跡遺物散布地 | 68 実久集落遺跡遺物散布地 |
| 32 嘉鉄カイツ遺跡採集資料(郷土館所蔵) | 69 実久集落遺跡遺物散布地(ミヤー) |
| 33 嘉鉄カイツ遺跡採集資料(出村氏寄贈資料) | 70 実久集落遺跡(実久三次郎神社) |
| 34 薩刈集落遺跡遠景 | 71 実久集落遺跡採集資料 |
| 35 薩刈集落遺跡遺物散布地 | 72 実久集落遺跡採集資料 |
| 36 薩刈集落遺跡採集資料 | 73 芝タンマ遺跡遠景 |
| 37 嘉鉄集落遠景 | 74 芝タンマ遺跡遺物散布地 |
| | 75 芝タンマ遺跡採集資料 |

- 76 芝集落遺跡遠景
77 芝集落遺跡遺物散布地（ミヤー）
78 芝集落遺跡遺物散布地（アシャケ）
79 芝集落遺跡採集資料
80 薩川集落遺跡遠景
81 薩川集落遺跡遺物散布地（ミヤー）
82 薩川集落遺跡採集資料
83 潤武サト遺跡遺物散布地（旧家武家）
84 潤武サト遺跡遺物散布地（アシャケ）
85 潤武サト遺跡採集資料
86 阿多地イバタ遺跡遠景
87 阿多地イバタ遺跡遺物散布地（ミヤー）
88 阿多地イバタ遺跡採集資料
89 須子茂海岸（請島・与路島・徳之島・須子茂郷）
90 須子茂集落遺跡遠景
91 須子茂集落遺跡遺物散布地（カミヤ跡地）
92 須子茂集落遺跡採集資料
93 須子茂集落伝世品（郷土館所蔵）
94 武名チノウラ遺跡遠景
95 武名チノウラ遺跡採集資料
96 俵サト遺跡遠景
97 俵サト遺跡遺物散布地
98 俵サト遺跡遺物散布地（ミヤー）
99 俵サト遺跡採集資料
100 潤相ムラウチ遺跡遠景
101 潤相ムラウチ遺跡遺物散布地（ミヤー）
102 潤相ムラウチ遺跡採集資料
103 西阿室集落遺跡遠景
104 西阿室集落遺物散布地（ミヤー）
105 西阿室集落遺跡採集資料
106 花富ヒラ遺跡遠景
107 花富ヒラ遺跡遺物散布地（ミヤー）
108 花富ヒラ遺跡採集資料
109 伊子茂ナカサト遺跡調査風景
110 伊子茂ナカサト遺跡遺物散布地（旧家西家）
111 伊子茂ナカサト遺跡採集資料
112 伊子茂ナカサト遺跡採集資料
113 伊子茂ナカサト遺跡採集資料
114 於齊集落遺跡遺物散布地
115 於齊集落遺跡採集資料
116 押角ムラウチ遺跡遠景
117 押角ムラウチ遺跡遺物散布地
118 押角ムラウチ遺跡採集資料
119 勝能サト遺跡遠景
120 勝能サト遺跡遺物散布地
121 勝能サト遺跡採集資料
122 諸数集落遺跡遠景
123 諸数集落遺跡採集資料
124 諸数集落遺跡採集資料
125 生間ミタ遺跡遠景
126 生間ミタ遺跡遺物散布地
127 生間ミタ遺跡採集資料
128 渡連ムラウチ遺跡遠景
129 渡連ムラウチ遺跡遺物散布地
130 渡連ムラウチ遺跡採集資料
131 渡連ムラウチ遺跡採集資料（ゴホウラ）
132 渡連アンキヤバ遺跡（郷土館所蔵）
133 渡連アンキヤバ遺跡遺物散布地（ミヤー）
134 渡連アンキヤバ遺跡露出版分
135 渡連アンキヤバ遺跡採集資料
136 渡連アンキヤバ遺跡採集資料（出村氏寄贈資料）
137 諸鈍トクハマ遺跡遠景
138 諸鈍トクハマ遺跡遺物散布地（神社御神体）
139 諸鈍トクハマ遺跡採集資料
140 諸鈍トクハマ遺跡採集資料
141 諸鈍城跡遠景
142 諸鈍城跡調査風景（ファームテ）
143 諸鈍城跡調査風景
144 諸鈍城跡調査風景
145 諸鈍クリ遺跡遠景
146 諸鈍クリ遺跡遺物散布地（大屯神社）
147 諸鈍クリ遺跡採集資料
148 諸鈍カネク遺跡遠景
149 諸鈍カネク遺跡遺物散布地（旧家林家）
150 諸鈍カネク遺跡遺物散布地（ミヤー）
151 諸鈍カネク遺跡採集資料
152 諸鈍サト遺跡遺物散布地
153 諸鈍サト遺跡採集資料
154 野見山才オサト遺跡遠景
155 野見山才オサト遺跡遺物散布地
156 野見山才オサト遺跡採集資料

- 157 秋徳集落遺跡遺物散布地
 158 秋徳集落遺跡採集資料
 159 請阿室集落遺跡遺景
 160 請阿室集落遺跡遺物散布地
 161 請阿室集落遺跡採集資料
 162 請阿室集落遺跡採集資料（ゴホウラ）
 163 琉球大学地学巡検（チャート露出地点）
 164 文化財保護審議会大山調査風景
 165 池地アガンマ遺跡遺物散布地
 166 池地集落伝世品（郷土館所蔵）
 167 池地アガンマ遺跡採集資料（ゴホウラ）
 168 池地アガンマ遺跡採集資料
 169 池地オーコーバリ遺跡遺物散布地
 170 池地オーコーバリ遺跡遺物散布地
 171 池地オーコーバリ遺跡遺物散布地
 172 与路集落遺跡達景
 173 与路集落遺跡遺物散布地
 174 与路集落遺跡採集資料
 175 与路集落遺跡採集資料
 176 与路集落遺跡採集資料（ゴホウラ）
 177 武名のミヤー
 178 武名のシマゴスガナン
 179 嘉入のトネヤ
 180 三浦のアシャゲ
 181 須子茂の神道
 182 須子茂の神山（中央の小高い山）
 183 阿多地の浜辺
 184 俵のクボツガナシ
 185 伊是名 宗家の庭の神アサギ（仲田）
 186 伊是名 宗家の庭の神アサギ（勢理客）
 187 名瀬市小湊「マー」の広場（隣接する中央
 宅地が「按司屋敷」）
 188 手安のオドン

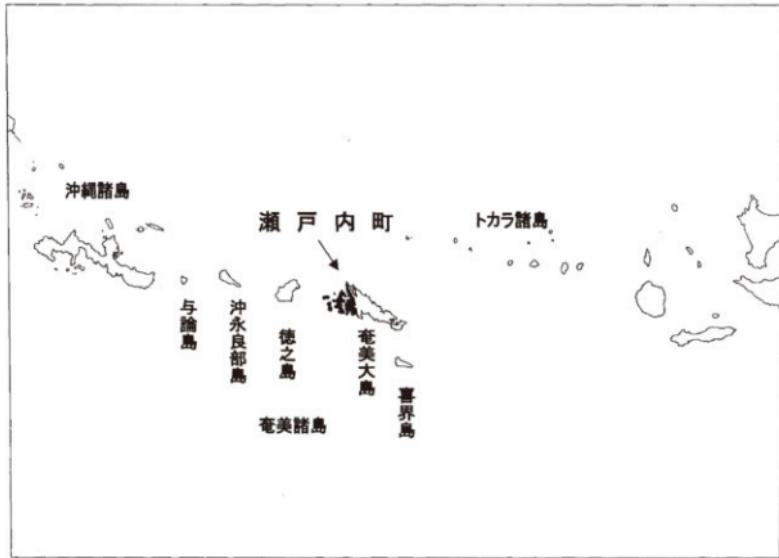
表 目 次

- 表1 確認遺跡一覧表
 表2 既刊文献より作成した軍事施設・配備部隊
 一覧表
 表3 漫戸内町遺跡立地一覧表

第1章 調査に至る経緯

近年、奄美諸島の各地で開発事業が相次いでおり、その規模も拡大してきている。その為、開発事業に伴う発掘調査も増大し、重要な遺跡が次々と発見されてきている。瀬戸内町も例外ではなく、町内各所で開発事業が行われている。しかし、瀬戸内町の埋蔵文化財は、嘉徳遺跡という重要な遺跡があるにもかかわらず、一般的には認知度は低いのが現状である。そうした状況から埋蔵文化財や文化財に影響のある開発事業も出現してきており、瀬戸内町教育委員会としても開発事業に対応し埋蔵文化財の周知徹底・保護・活用できるよう、町内の埋蔵文化財詳細資料の作成が急務となつた。

そこで、瀬戸内町教育委員会では、平成 15（2003）年度から町内の埋蔵文化財詳細分布調査を実施継続してきている。調査対象地区としては、緊急に開発事業が計画される可能性の高い、集落とその周辺部に絞り込み調査を実施した。平成 16（2004）年度までの調査の進行状況は、調査対象地区的約七割である。瀬戸内町は、面積が広大であり、加計呂麻島や請島、与路島などの離島も抱えているため、思うように調査が進まず、調査対象地区を絞り込んでいるにも関わらず、町内全域の調査は完了していない。しかし、埋蔵文化財の周知及び開発事業に対応し、埋蔵文化財を保護・活用するためには、現在発見・確認している埋蔵文化財の詳細な分布状況を報告書にまとめることが必要である。そこで平成 15（2003）年度から平成 16 年度にかけての調査で発見・確認している埋蔵文化財の詳細な分布状況をまとめ『瀬戸内町遺跡詳細分布調査報告書』が作成される事となつた。



第1図 瀬戸内町位置図

第2章 濑戸内町の概況

奄美諸島は、北緯27度～29度、東経129度～130度、南西諸島のほぼ中心に位置している島嶼地域である。亜熱帯圏に属し、喜界島・奄美大島・加計呂麻島・請島・与路島・徳之島・沖永良部島・与論島の8島の有人島と無数の無人島から構成されている。

瀬戸内町は、奄美大島の南西部と加計呂麻島・請島・与路島からなっていて、町の北側は宇検村・住用村と接している。町の面積は、239km²と広範で、その面積比は、本島側58.02%、加計呂麻島32.28%、請島5.73%、与路島3.97%となっている。いずれも300～400m程の山岳地帯が連なり、急斜面となって海岸に迫っている。地質は全城を通じて古生層であり、構成地質区分は砂岩、粘板岩、輝綠凝灰岩で、一部にレンズ状に石灰岩の地域がある。林野の占める割合は87%にもおよび、平地は著しく僅少である。ほとんどの集落が海を望む位置にあり、水深の深い良港が多い。特に薩川湾は天然の良港としてかつては軍港に利用され、現在も台風時の船舶の避難港の役割を果たしている。

15世紀中頃、奄美諸島は琉球王国の統治下に置かれ、間切制度により7間切に区分されていた。慶長14(1609)年に薩摩藩の統治下に置かれることになり、享保5(1720)年、薩摩藩は糖業政策の徹底を期すため、区域変更を行った。瀬戸内地方は、東方(旧古仁屋地区)、西方(旧西方地区)、渡連方(旧鎮西地区)、実久方(旧実久地区)に区分された。その後、明治41(1908)年の島嶼町村制施行によって、西方地区は宇検方(現在の宇検村)と合併して焼内村となり、古仁屋地区は東方村となり、加計呂麻地区は渡連方と実久方を合併して鎮西村となった。大正5(1916)年、再び区域の変更が行われ、西方地区は焼内村から分離して西方村となり、鎮西村は再度分離され鎮西村と実久村になった。東方村は昭和11(1936)年に町制を施行し、古仁屋町となった。このように瀬戸内町では区域の変更が幾度となく行われたが、昭和31(1956)年9月1日、町村合併促進法の摘要をうけて、古仁屋町・西方村・鎮西村・実久村の4ヶ町村は町村合併して現在の瀬戸内町となる。平成17(2005)年3月時点における瀬戸内町の人口は、11,278人を数える。



第2図瀬戸内町の地区区分

第3章 調査要綱

第1節 調査組織

遺跡詳細分布調査及び報告書の刊行は、瀬戸内町教育委員会が独自で実施継続しているものである。各年度における調査組織は、以下の通りである。

1 平成15(2003)年度の調査組織

調査主体	瀬戸内町教育委員会	西田俊男
調査責任	瀬戸内町教育委員会教育長	程 卓郎
調査統括	社会教育課長	碇山哲也
	社会教育課体育文化係長	
調査担当	社会教育課図書館・郷土館係長	町健次郎（集落民俗調査）
	社会教育課図書館・郷土館係嘱託職員	鼎丈太郎（詳細分布調査）

2 平成16(2004)年度の調査組織

調査主体	瀬戸内町教育委員会	西田俊男（6月退職）
調査責任	瀬戸内町教育委員会教育長	徳永敬次（7月就任）
	瀬戸内町教育委員会教育長	
調査統括	社会教育課長	程 卓郎
	社会教育課体育文化係長	碇山哲也
事務担当	社会教育課図書館・郷土館係嘱託職員	鼎丈太郎
調査指導	琉球大学文学部教授	池田榮史
	名瀬市教育委員会文化スポーツ振興課	高梨 修
	徳之島町文化財保護審議会委員	池村 茂
	瀬戸内町文化財保護審議会会长	前田芳之
調査協力	名瀬市教育委員会文化スポーツ振興課委託職員	清さつき
	諸鈍シバヤ芸能保存会会长	上田伊津夫
調査担当	社会教育課図書館・郷土館係長	町健次郎（集落民俗調査）
	社会教育課図書館・郷土館係嘱託職員	鼎丈太郎（詳細分布調査）
整理作業員		中所亜紀

第2節 調査方法

1 分布調査の実施方法

遺跡詳細分布調査は、平成15・16年度の2年間にわたって実施し、現在も継続中である。瀬戸内町は面積が広大であるため、対象地区を設定して順次調査を行うことにした。今回の調査対象地区は、緊急に開発及び破壊が行われる可能性の高い集落とその周辺の平野部に限定して調査を行った。

分布調査の実施方法は、遺跡の所在が予測できないため、調査対象地区内をくまなく地表面踏査した。特に、遺物が散布しやすい畑において表面採集を行った。踏査には、地形図、野帳、巻尺などを携帯し、現地で遺物の散布状況、遺跡の範囲などを地形図上に記入し調査を進めた。また調査の際に、民俗学の学芸員である町健次郎氏に同行していただき、民俗学的視点の提示や古老・有識者への聞き取り調査を行ってもらい、分布調査の参考にさせていただいた。

2 遺跡名称の命名方法

確認遺跡の名称は、名瀬市で採用している命名方法を参考にさせてもらい、原則として所在している土地の小字地名を優先して命名した。そうした小字地名は、複数の集落で共通しているものが多数含まれているため、小字地名のみの表記を行うと混乱をまねくと考えられるため、小字地名の前に大字地名をつけて遺跡名称とした。

表記方法は、大字地名については漢字表記を優先し、小字地名については、地元で呼称している発音と相違するものが存在することや、漢字表記が当て字であることから、カタカナ表記を行った。また、遺物の散布が広範囲にわたり小字地をまたいで他の小字地まで遺跡範囲が及ぶ場合は、大字地名を優先して小字地名を省略することにした。この場合、遺跡が集落に接するまたは含まれるなど、集落に關係する遺跡については、大字地名に集落をつけて「大字地名+集落遺跡」とした。今回の命名方法によって、従前より周知されていた遺跡についても、瀬戸内町内全体で統一を図る観点から適宜検討を加えて名称変更したものがある。たとえば、「嘉徳遺跡」は今回の命名方法により「嘉徳アサト遺跡」となり、「節子遺跡」は「節子集落遺跡」となる。

今後の調査で遺跡地点が確定し、遺跡の性格が確認できる場合や、聞き取り調査で小字地名の呼称の相違が確認された場合は、遺跡名称の変更や遺跡の分割などの可能性もある。

第4章 調査成果

第1節 調査概要

瀬戸内町教育委員会が実施している「瀬戸内町遺跡詳細分布調査」は、現在も実施継続中である。瀬戸内町は、面積が広大で、離島も抱え、山地も多い地形であるため、瀬戸内町全域を一度に調査することは不可能であると考えられる。そこで、第3章でも述べたが、第一段階として、緊急に開発事業が計画され遺跡破壊の可能性の高い集落とその周辺部の平野部を調査対象地区とした。第二段階として山地地域や小船でしか行くことのかなわない小さな砂丘が考えられる。また、瀬戸内町は、戦争遺跡が良好な状態で保存されていることも確認されており、詳細な分布調査及び計測等の調査も必要であると考えられる。瀬戸内町の遺跡詳細分布調査は、まだまだスタート地点であり、今後の調査は山積みの状態である。

さて、今回の遺跡詳細分布調査では、調査対象地区全域の表面採集調査を行った。進行状況は約7割であるが、今回の調査で確認された遺跡は、再確認遺跡も含め47遺跡である。鹿児島県で確認されている「西古見城跡」「諸鈍城跡」は、山地地域であるため、今回の調査では確認していないが、この2遺跡を含めた確認遺跡は49遺跡である。今回の調査ではじめて確認された遺跡は、27遺跡である。このことから、今後の調査で確認される遺跡も多数あると考えられ、最終的な遺跡数は、平野部だけでも50遺跡以上にのぼるのではないかと考えられる。

地図に付してある遺跡番号は、鹿児島県教育委員会及び瀬戸内町教育委員会で確認した遺跡番号である（第3図）。今回、地図に付してある遺跡番号は、新たに確認された遺跡が多いため、鹿児島県教育委員会の遺跡番号ではなく、表1の遺跡番号を付してある。次節以降は、各地区ごとの遺跡の報告であるが、遺跡の概要説明は、鹿児島県教育委員会の遺跡台帳をもとに作成した。



1 瀬戸内町文化財保護審議会調査風景（於斎）

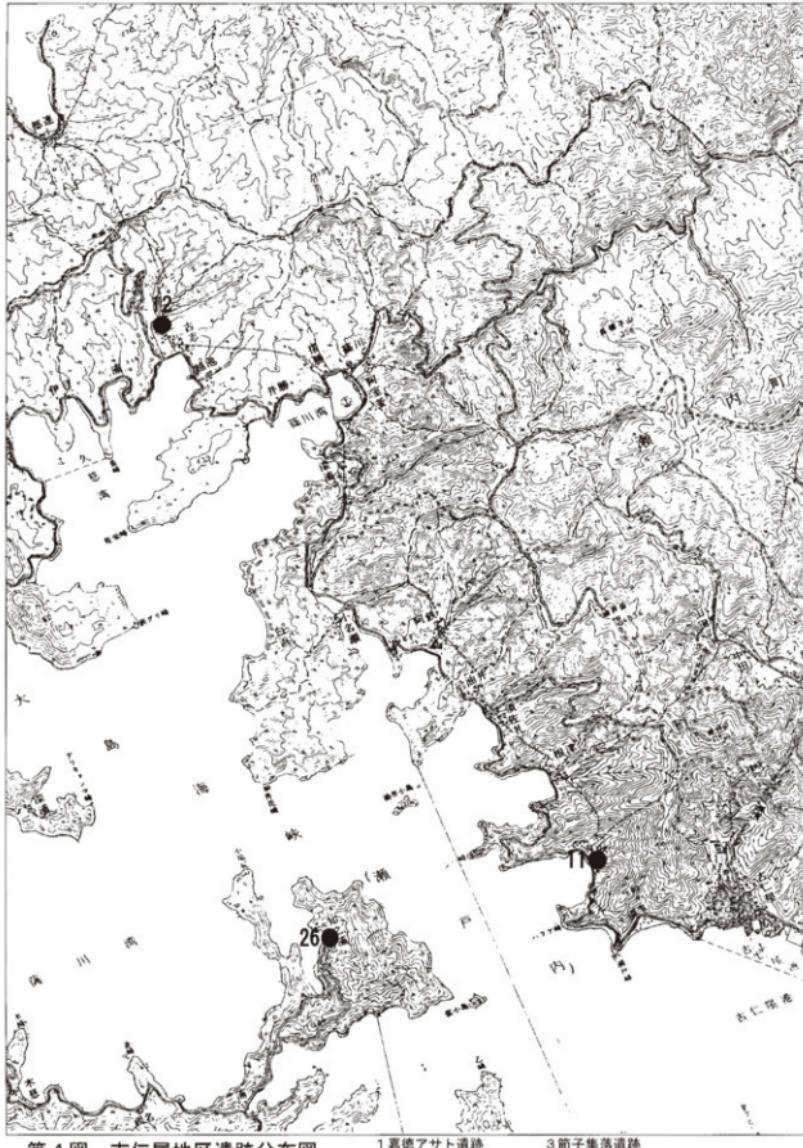
第3図 濑戸内町の遺跡分布図



番号	地区分類	集落	遺跡名稱	遺跡番号	確認者		備考
					鹿児島県 教育委員会	鹿児島市 教育委員会	
1	古仁屋	嘉徳	嘉徳アサト遺跡	87-1-0	○	○	発掘調査、『鹿考古10号』
2	古仁屋	嘉徳	嘉徳集落遺跡	87-4-0	○	○	『サモト遺跡(1)・(2)』
3	古仁屋	節子	節子集落遺跡	87-5-0	○	○	『わき小島スイツコ(節子)』
4	古仁屋	網野子	網野子アサト遺跡			○	
5	古仁屋	勝浦	勝浦集落遺跡	87-6-0	○	○	
6	古仁屋	伊須	伊須集落遺跡	87-7-0	○	○	
7	古仁屋	嘉鉄	嘉鉄カイツ遺跡	87-14-0	○	○	砂採取、『鹿考古10号』
8	古仁屋	蘇刈	蘇刈集落遺跡			○	
9	古仁屋	嘉鉄	嘉鉄アサト遺跡			○	
10	古仁屋	清水	清水集落遺跡			○	
11	古仁屋	手安	手安集落遺跡			○	
12	西方	吉志	吉志アサト遺跡			○	
13	西方	久慈	久慈アメ遺跡			○	
14	西方	久慈	久慈マエダ遺跡			○	役所跡
15	西方	久慈	久慈集落遺跡			○	
16	西方	菅純	菅純集落遺跡	87-8-0	○	○	
17	西方	西古見	西古見城跡	87-2-0	○	○	「鹿児島県の中世城郭」
18	西方	西古見	西古見集落遺跡	87-9-0	○	○	『西古見集落誌』
19	実久	実久	実久集落遺跡	87-10-0	○	○	
20	実久	芝	芝タシマ遺跡			○	
21	実久	芝	芝集落遺跡			○	
22	実久	薩川	薩川集落遺跡			○	
23	実久	瀬武	瀬武アサト遺跡			○	
24	実久	阿多地	阿多地イバタ遺跡			○	
25	実久	須子茂	須子茂集落遺跡	87-11-0	○	○	試掘調査実施
26	実久	武名	武名チノウラ遺跡			○	通称「グスコ」
27	実久	俵	俵アサト遺跡			○	
28	実久	瀬相	瀬相ムラウチ遺跡			○	
29	実久	西阿室	西阿室集落遺跡	87-12-0	○	○	
30	道西	花富	花富ヒラタ遺跡	87-20-0	○	○	
31	道西	伊予茂	伊予茂ナカサト遺跡			○	
32	道西	於齊	於齊集落遺跡	87-22-0	○	○	
33	道西	押角	押角ムラウチ遺跡			○	
34	道西	勝能	勝能アサト遺跡			○	
35	道西	諸教	諸教アサト遺跡			○	
36	道西	生間	生間ミタ遺跡			○	
37	道西	渡連	渡連ムラウチ遺跡	87-21-0	○	○	
38	道西	渡連	渡連アンキバ遺跡	87-13-0	○	○	
39	道西	諸純	諸純トクハマ遺跡	87-15-0	○	○	
40	道西	諸純	諸純城跡	87-3-0	○	○	「鹿児島県の中世城郭」
41	道西	諸純	諸純クリ遺跡	87-16-0	○	○	
42	道西	諸純	諸純カネク遺跡	87-17-0	○	○	
43	道西	諸純	諸純アサト遺跡			○	
44	道西	野見山	野見山オオサト遺跡			○	
45	道西	秋徳	秋徳集落遺跡			○	
46	道西	諸阿室	諸阿室集落遺跡			○	
47	道西	池地	池地アガンマ遺跡	87-18-0	○	○	
48	道西	池地	池地オコーバリ遺跡	87-19-0	○	○	
49	道西	与路	与路集落遺跡			○	『奄美博物館図録』

表1 確認遺跡一覧表

第2節 古仁屋地区



第4図 古仁屋地区遺跡分布図

1 真徳アサト遺跡
2 真徳集落遺跡

3 節子集落遺跡
4 綱野子サト遺跡



嘉徳集落

フリガナ 遺跡名	カトクアサト 嘉徳アサト			図面 写真	第5図 2・3・4・5・6・7		
遺跡番号 (通番)	87-1-0 (10075)		所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町嘉徳			
地形	砂丘	時代	縄文				
備考							

調査の記録

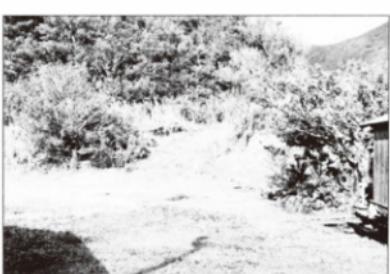
調査の種類	発掘調査 表面採集調査		調査年月日	昭和49年 平成15年度・平成16年度			
調査機関	瀬戸内町教育委員会			調査面積	約500m ²		
調査起因	開発工事		調査後の措置	埋蔵文化財の記録保存			
備考	昭和49年に発掘調査が行われている。						
報告書	書名 (副書名)	嘉徳遺跡(鹿児島考古 第10号)					
	編著者名	河口貞徳・上村俊夫・多々良友博 平島勇夫・肱岡隆夫	発行年月日	1974年			
	編集機関 (住所)						

調査結果

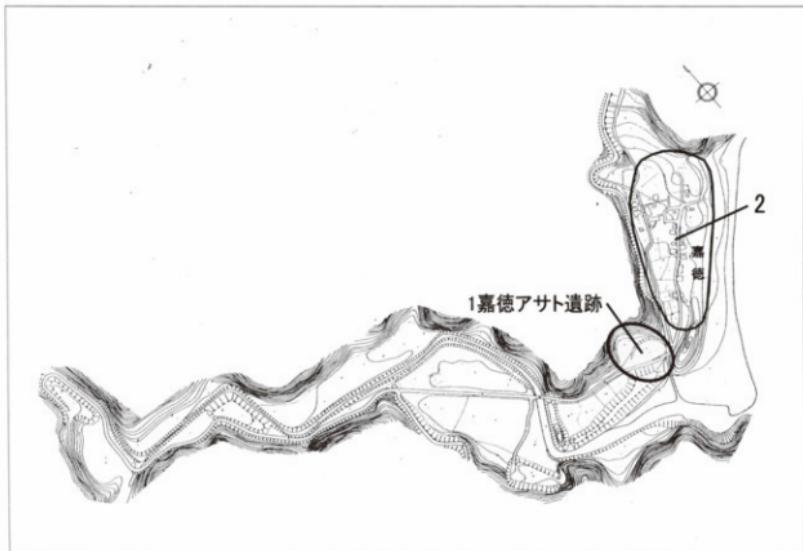
主な時代	主な遺構	主な遺物
縄文	焼土遺構・石組遺構・ピット	縄文式土器(嘉徳式土器・ 嘉徳I式土器・嘉徳II式土器・ 面縄前庭式土器など)・石器
出土量	資料の保管場所	



2 嘉徳アサト遺跡・嘉徳集落遺跡遠景



3 嘉徳アサト遺跡



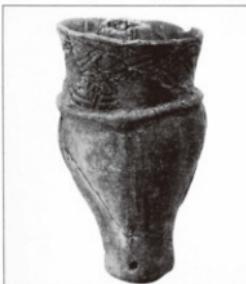
第5図 嘉德アサト遺跡位置図



4 嘉德アサト遺跡出土品(郷土館所蔵)



5 嘉德アサト遺跡出土品(郷土館所蔵)



6 嘉德アサト遺跡出土品(郷土館所蔵)



7 嘉德アサト遺跡出土品(郷土館所蔵)

嘉徳集落

フリガナ 遺跡名	カトクシュウラク 嘉徳集落			図面 写真	第6回 2・8・9・10		
遺跡番号 (通番)	87-4-0 (10080)		所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町嘉徳			
地形	砂丘	時代	古代・中世・近世・近代				
備考	『サモト遺跡(1)・(2)』						

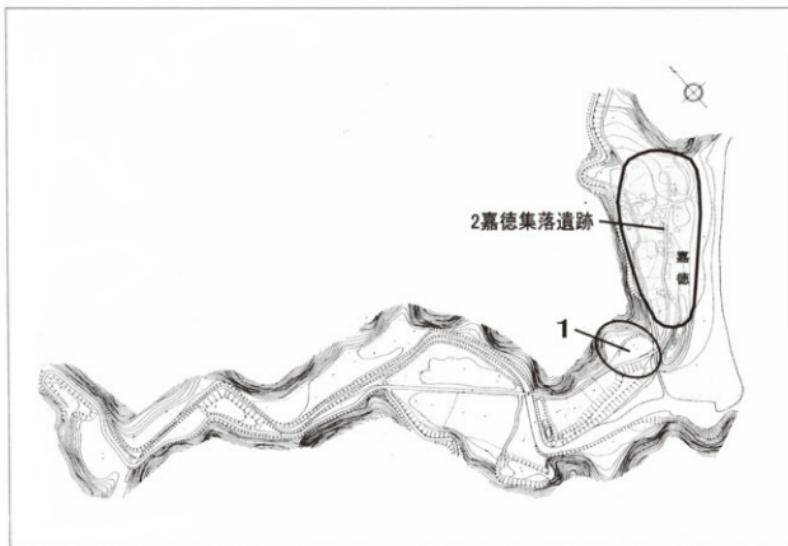
調査の記録

調査の種類	分布調査 瀬戸内町遺跡詳細分布調査	調査年月日	平成元年 平成15年度・平成16年度			
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺			
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存			
備考						
報告書	書名 (副書名) 編著者名 編集機関 (住所)	奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書II 長野真一 富田逸郎 鹿児島県教育委員会 鹿児島県鹿児島市鴨池新町10-1				

調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
古代		兼久式土器・布目压痕土器・
中世	不明	類須恵器・青磁・
近世		薩摩焼・陶磁器

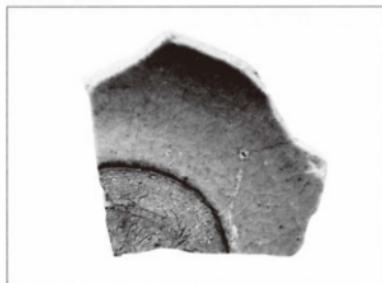
出土量	少量化	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館



第6図 嘉德集落遺跡位置図



8 嘉德集落遺跡採集資料



9 嘉德集落遺跡採集資料



10 嘉德集落遺跡遠景

節子集落

フリガナ 遺跡名	セッコシュウラク 節子集落			図面 写真	第7回 11・12・13・14・15・16
遺跡番号 (通番)	87-5-0 (10082)	所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町節子		
地形	砂丘	時代	縄文・古代・中世・近世・近代		
備考	『わきや島スイツコ(節子)』				

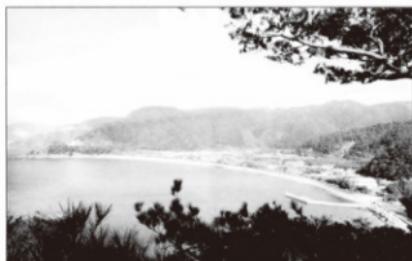
調査の記録

調査の種類	分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成元年 平成15年度・平成16年度	
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会		調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握		調査後の措置	現状保存
備考	類須恵器の出土地点は、節子集落遺跡の範囲外で、それぞれ単体で発見されている。			
報告書	書名 (副書名)	奄美地区埋蔵文化財調査報告書Ⅱ		
	編著者名	長野真一 富田逸郎	発行年月日	1990年
	編集機関 (住所)	鹿児島県教育委員会 鹿児島県鹿児島市鴨池新町10-1		

調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
縄文・古代		縄文式土器・兼久式土器・
中世・近世	不明	布目压痕土器・類須恵器・青磁・ 白磁・染付・薩摩焼・壺屋焼

出土量 少量 資料の保管場所 瀬戸内町立図書館・郷土館



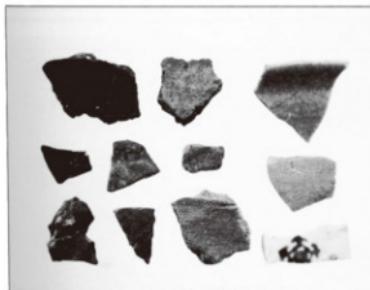
11 節子集落遺跡遠景



12 節子集落遺跡遺物散布地(ミヤー)



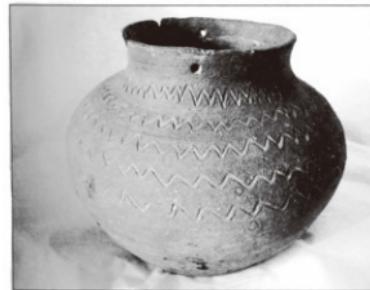
第7図 節子集落遺跡位置図



13 節子集落遺跡採集資料



14 節子集落伝世品(郷土館所蔵)



15 節子集落伝世品(個人蔵)



16 節子集落伝世品(個人蔵)

網野子集落

フ リ ガ ナ 遺 跡 名	アミノコサト 網野子サト			図面 写真	第8図 17・18・19・20
遺 跡 番 号 (通 番)		所 在 地	鹿児島県大島郡瀬戸内町網野子		
地 形	砂 丘	時 代	中世・近世・近代		
備 考					

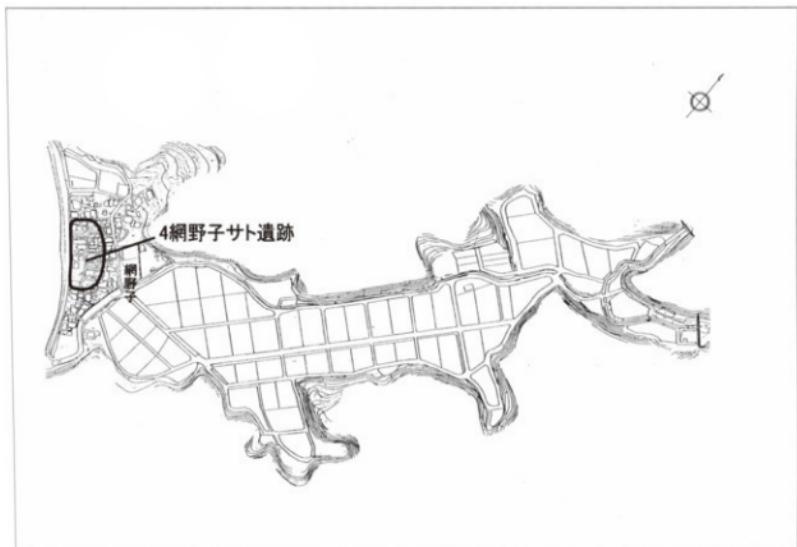
調査の記録

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査		調査年月日	平成15年度・平成16年度			
調査機関	瀬戸内町教育委員会		調査面積	集落とその周辺			
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握		調査後の措置	現状保存			
備考	遺物の散布状況は、集落のある砂丘上全体ではなく、公民館（ミヤー）周辺に集中している。						
報告書	書名 (副書名)						
	編著者名		発行年月日				
	編集機関 (住所)						

調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
中世		青磁・白磁・
近世	不明	薩摩焼・壺屋焼

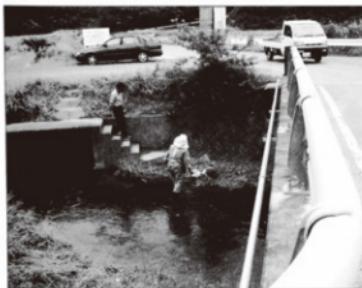
出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
-----	-----	---------	--------------



17 網野子サト遺跡遠景



18 網野子サト遺跡遺物散布地（ミヤー）



19 網野子サト遺跡調査風景



20 網野子サト遺跡採集遺物

勝浦集落

フリガナ 遺跡名	カチウラシュウラク 勝浦集落			図面 写真	第9図 21・22・23・24
遺跡番号 (通番)	87-6-0 (10084)	所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町勝浦		
地形	砂丘	時代	中世・近世・近代		
備考					

調査の記録

調査の種類	分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成元年 平成15年度・平成16年度
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存
備考	土器は小片であり、布目を有するものがほとんどである。		
報告書	書名 (副書名) 奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書Ⅱ 編著者名 長野真一 富田逸郎 編集機関 (住所) 鹿児島県教育委員会 鹿児島県鹿児島市鴨池新町10-1	発行年月日	1990年

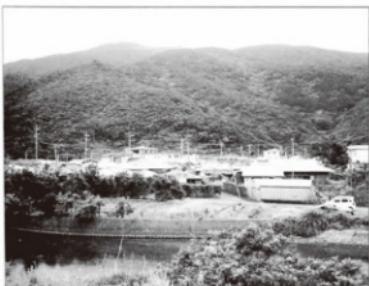
調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
中世		
近世	不明	布目压痕土器・青磁・薩摩焼

出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
-----	-----	---------	--------------



第9図 勝浦集落遺跡位置図



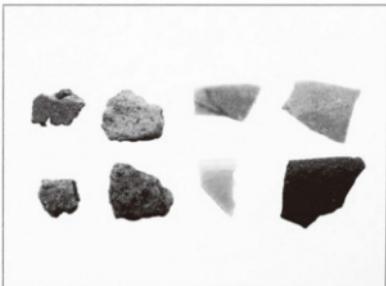
21 勝浦集落遺跡遠景



22 勝浦集落遺跡遺物散布地



23 勝浦集落遺跡遺物散布地(トネヤ)



24 勝浦集落遺跡採集資料

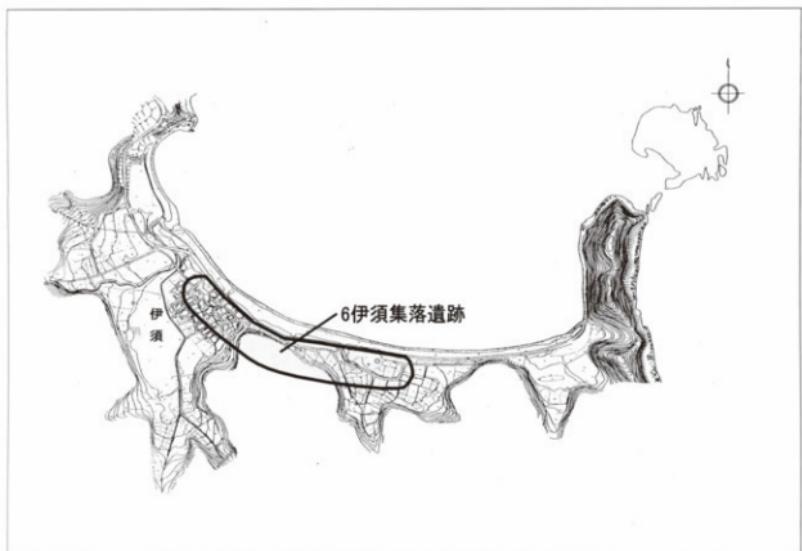
伊須集落

フリガナ 遺跡名	イスシュウラク 伊須集落			図面 写真	第10図 25・26・27・28
遺跡番号 (通番)	87-7-0 (10086)	所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町伊須		
地形	砂丘	時代	弥生・古代・中世・近世・近代		
備考					

調査の記録

調査の種類	分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成元年 平成15年度・平成16年度												
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会		調査面積	集落とその周辺											
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握		調査後の措置	現状保存											
備考	伊須集落遺跡の中央部分が海と山で分断されている。遺跡の東部と西部では、遺跡の性格が異なる可能性がある。														
報告書	<table border="1"> <tr> <td>書名 (副書名)</td> <td colspan="3">奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書II</td> </tr> <tr> <td>編著者名</td> <td>長野真一 富田逸郎</td> <td>発行年月日</td> <td>1990年</td> </tr> <tr> <td>編集機関 (住所)</td> <td colspan="3">鹿児島県教育委員会 鹿児島県鹿児島市鴨池新町10-1</td> </tr> </table>			書名 (副書名)	奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書II			編著者名	長野真一 富田逸郎	発行年月日	1990年	編集機関 (住所)	鹿児島県教育委員会 鹿児島県鹿児島市鴨池新町10-1		
書名 (副書名)	奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書II														
編著者名	長野真一 富田逸郎	発行年月日	1990年												
編集機関 (住所)	鹿児島県教育委員会 鹿児島県鹿児島市鴨池新町10-1														

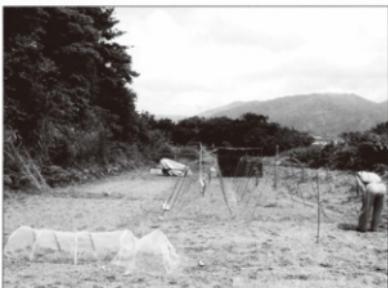
調査結果			
主な時代	主な遺構	主な遺物	
古代			弥生式土器・土師質土器・
中世	不明		青磁・青花・
近世			染付・薩摩焼
出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館



第10図 伊須集落遺跡位置図



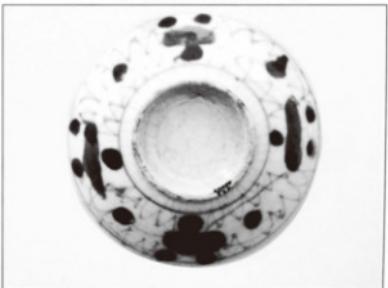
25 伊須集落遺跡遺物散布地(ミヤー)



26 伊須集落遺跡調査風景



27 伊須集落遺跡採集資料



28 伊須集落遺跡採集資料

皆津崎

フリガナ 遺跡名	カテツカイツ 嘉鉄カイツ			図面 写真	第11図 29・30・31・32・33		
遺跡番号 (通番)	87-14-0 (10100)		所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町皆津			
地形	砂丘	時代	古代・近代				
備考	「奄美における土器文化の編年について」(『鹿考古10号』) 『やどり73』						

調査の記録

調査の種類	分布調査 表面採集調査		調査年月日	昭和48年・平成元年 平成15年度・平成16年度				
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会			調査面積	砂丘全体			
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置						
備考	砂採取工事により遺跡の大部分が消滅している。							
報告書	書名 (副書名)	奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書II						
	編著者名	長野真一 富田逸郎	発行年月日	1990年				
	編集機関 (住所)	鹿児島県教育委員会 鹿児島県鹿児島市鴨池新町10-1						

調査結果					
主な時代	主な遺構		主な遺物		
古代	不明			兼久式土器・ 布目庄痕土器・ 貝類	
出土量	少 量		資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館	



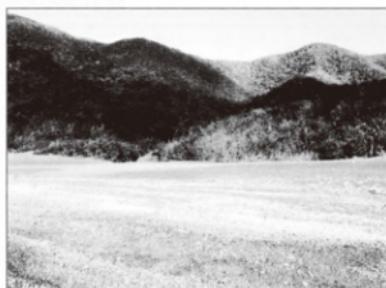
29 船にて調査地に向う(琉球大学池田教授調査指導)



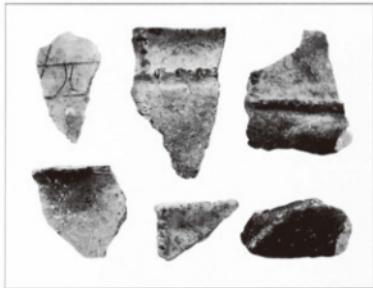
第11図 嘉鉄カイツ遺跡位置図



30 嘉鉄カイツ遺跡遠景



31 嘉鉄カイツ遺跡遺物散布地



32 嘉鉄カイツ遺跡採集資料(郷土館所蔵)



33 嘉鉄カイツ遺跡採集資料(出村氏寄贈資料)

蘇刈集落

フリガナ 遺跡名	ソカルシュウラク 蘇刈集落			図面 写真	第12図 34・35・36
遺跡番号 (通番)			所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町蘇刈	
地形	砂丘		時代	中世・近世・近代	
備考					

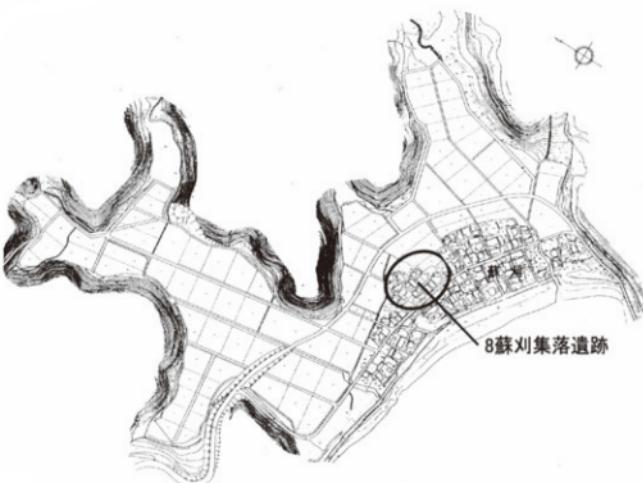
調査の記録

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査			調査年月日	平成15年度・平成16年度
調査機関	瀬戸内町教育委員会			調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握			調査後の措置	現状保存
備考	遺物の散布状況は、集落のある砂丘上全体ではなく、集落中央山側に集中している。埋め立てや基盤整備で破壊されている可能性が高い。				
報告書	書名 (副書名)				
	編著者名			発行年月日	
	編集機関 (住所)				

調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
中世		類須恵器・青磁・
近世	不明	薩摩焼・陶磁器

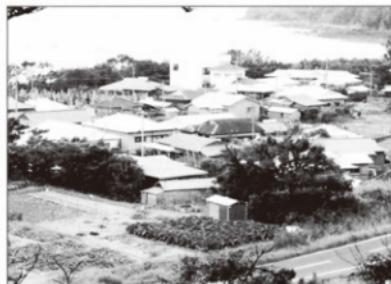
出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
-----	-----	---------	--------------



第12図 蘇刈集落遺跡位置図



34 蘇刈集落遺跡遠景



35 蘇刈集落遺跡遺物散布地



36 蘇刈集落遺跡採集資料

嘉鉄集落

フリガナ	カテツサト 嘉鉄サト		図面写真	第13図 37・38・39・40
遺跡番号 (通番)		所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町嘉鉄	
地形	平地	時代	中世・近世・近代	
備考				

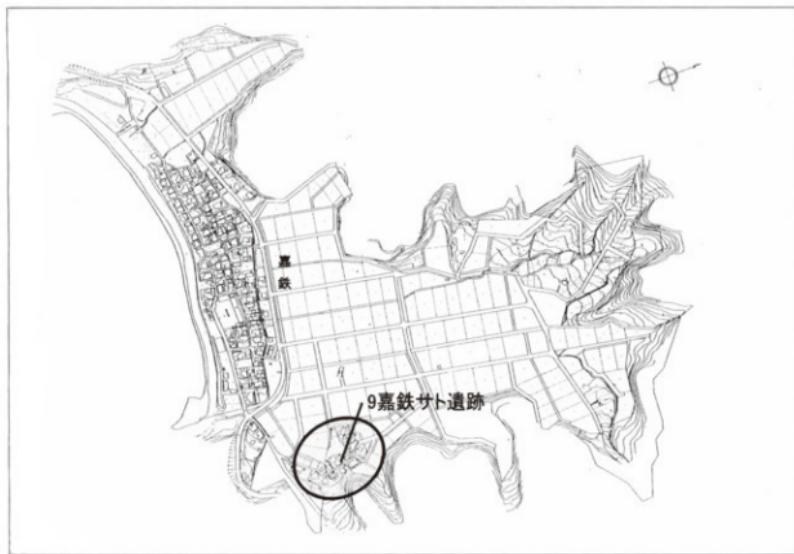
調査の記録

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査		調査年月日	平成15年度・平成16年度
調査機関	瀬戸内町教育委員会		調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握		調査後の措置	現状保存
備考	遺物の散布状況は、集落のある砂丘ではなく、集落東側の山裾に集中している。			
報告書	書名 (副書名)			
	編著者名		発行年月日	
	編集機関 (住所)			

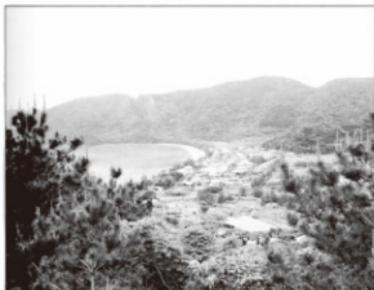
調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
中世		類須恵器・青磁・
近世	不明	青花・赤絵・染付・ 薩摩焼・壺屋焼

出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
-----	-----	---------	--------------



第13図 嘉鉄サト遺跡位置図



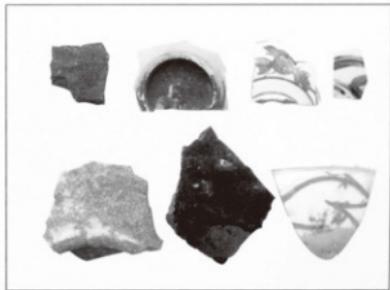
37 嘉鉄集落遠景



38 嘉鉄サト遺跡遠景



39 嘉鉄サト遺跡遺物散布地



40 嘉鉄サト遺跡採集資料

清水集落

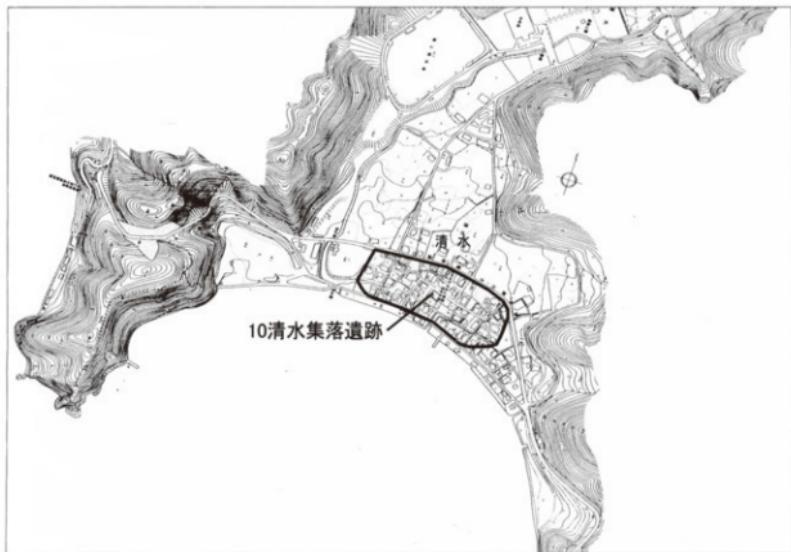
ブリガナ 遺跡名	セイスイシュウラク 清水集落			図面写真	第14図 41・42・43
遺跡番号 (通番)		所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町清水		
地形	砂丘	時代	中世・近世・近代		
備考					

調査の記録

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査		調査年月日	平成15年度・平成16年度			
調査機関	瀬戸内町教育委員会			調査面積	集落とその周辺		
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握		調査後の措置	現状保存			
備考							
報告書	書名 (副書名)						
	編著者名		発行年月日				
	編集機関 (住所)						

調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物	
中世		類須恵器・青磁・	
近世	不明	褐釉陶器・染付・ 壺屋焼	
出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館



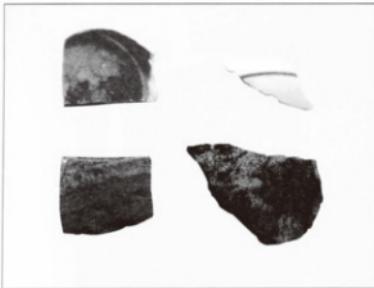
第14図 清水集落遺跡位置図



41 清水集落遺跡遠景



42 清水集落遺跡遺物散布地



43 清水集落遺跡採集資料

手安集落

フリガナ 遺跡名	テアンシュウラク 手安集落			図面 写真	第15図 44・45・46・47		
遺跡番号 (通番)			所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町手安			
地形	平地	時代	中世・近世・近代				
備考							

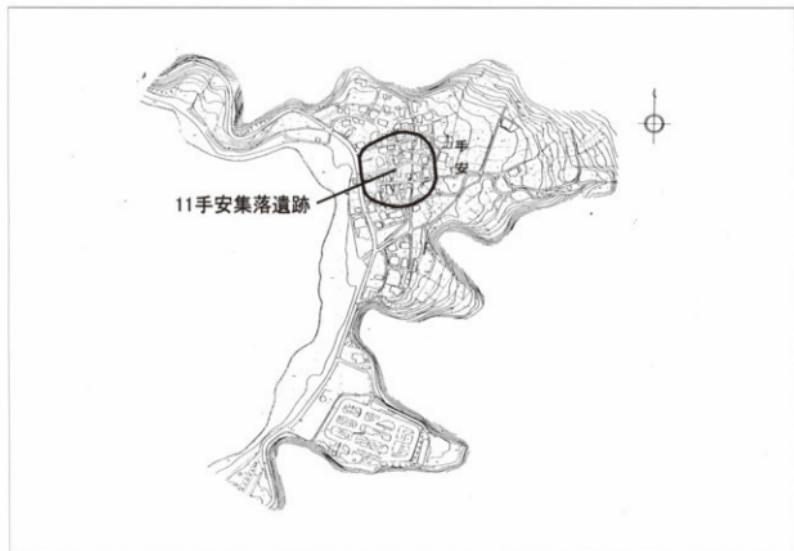
調査の記録

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査			調査年月日	平成15年度・平成16年度
調査機関	瀬戸内町教育委員会			調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握			調査後の措置	現状保存
備考					
報告書	書名 (副書名)				
	編著者名			発行年月日	
	編集機関 (住所)				

調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
中世 近世	不明	土器・類須恵器

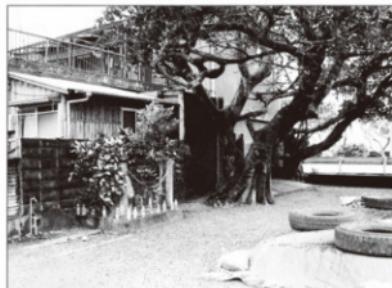
出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
-----	-----	---------	--------------



第15図 手安集落遺跡位置図



44 手安集落遺跡遠景



45 手安集落遺跡遺物散布地(オドン)

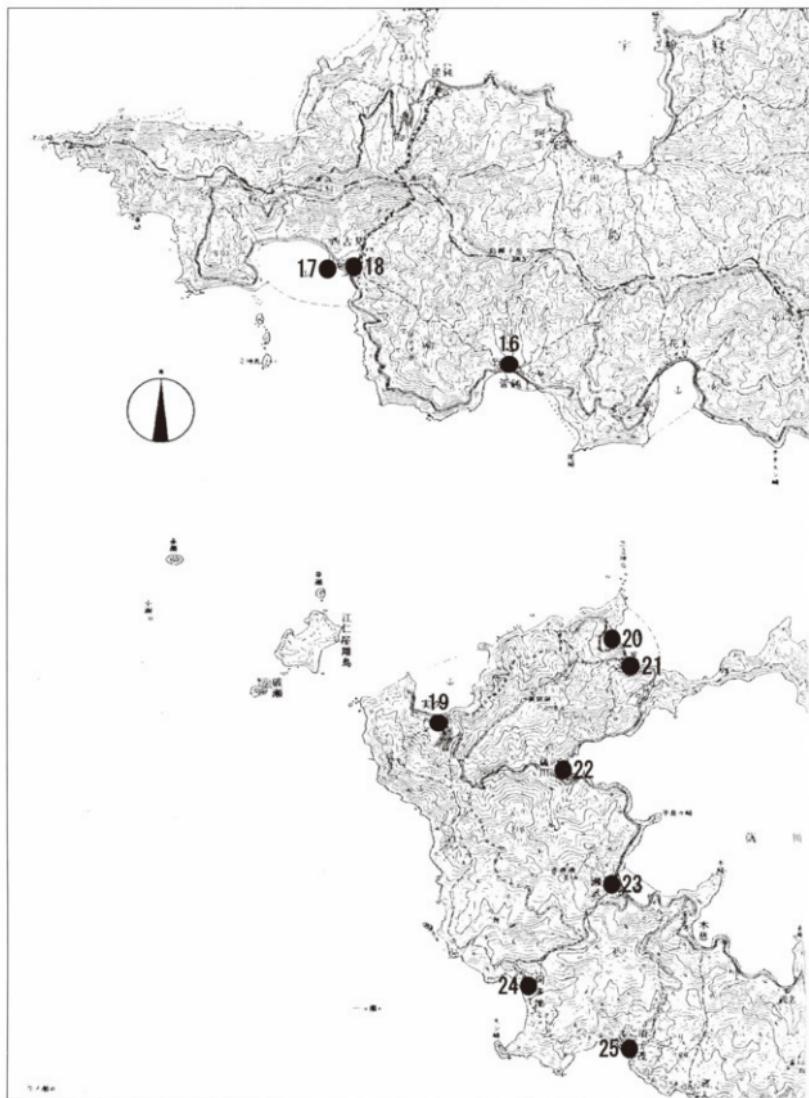


46 手安集落遺跡遺物散布地

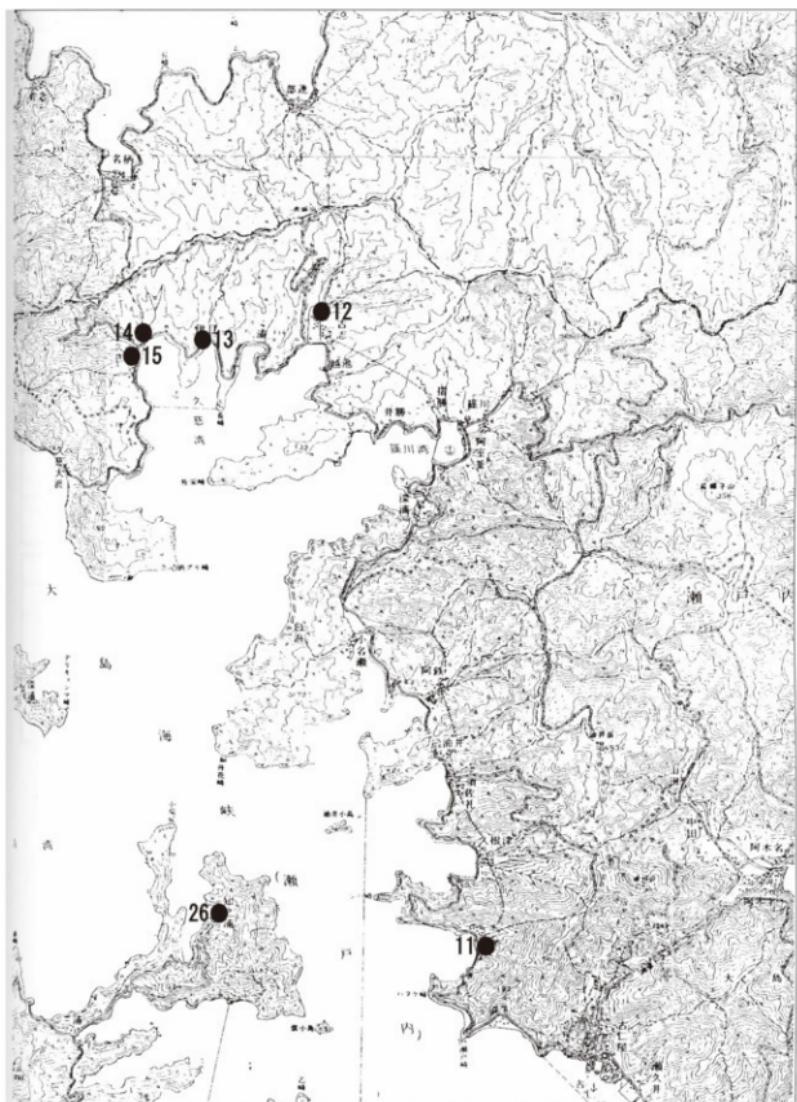


47 手安集落遺跡採集資料

第3節 西方地区



第16図 西方地区遺跡分布図



12古志サト道路
13久慈イメ道路

14久慈マエダ跡
15久慈集落遺跡

16管純集落道路
17西古見城跡

18西古見集落道路

古志集落

フ リ ガ ナ 遺 跡 名	コシサト 古志サト			図面 写真	第17図 48・49・50
遺 跡 番 号 (通 番)			所 在 地	鹿児島県大島郡瀬戸内町古志	
地 形	平 地		時 代	中世・近世・近代	
備 考					

調査の記録

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査			調査年月日	平成15年度・平成16年度
調査機関	瀬戸内町教育委員会			調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握			調査後の措置	現状保存
備考	遺物の散布状況は、集落のある平地全体ではなく、ミヤー周辺に集中している。				
報告書	書名 (副書名)				
	編著者名			発行年月日	
	編集機関 (住 所)				

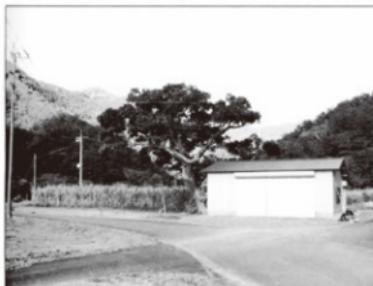
調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
中世		類須恵器・青磁・
近世	不明	白磁・染付・薩摩焼

出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
-----	-----	---------	--------------



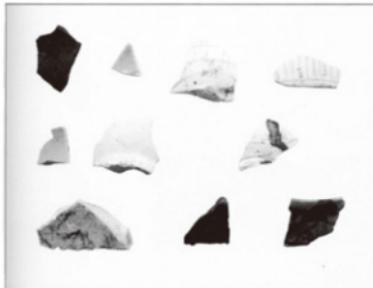
第17図 古志サト遺跡位置図



48 古志サト遺跡遺物散布地(ミヤー)



49 古志集落調査風景



50 古志サト遺跡採集資料

伊目集落

フリガナ 遺跡名	クシイメ 久慈イメ			図面 写真	第18図 51・52・53
遺跡番号 (通番)		所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町伊目		
地形	丘陵	時代	近世・近代		
備考					

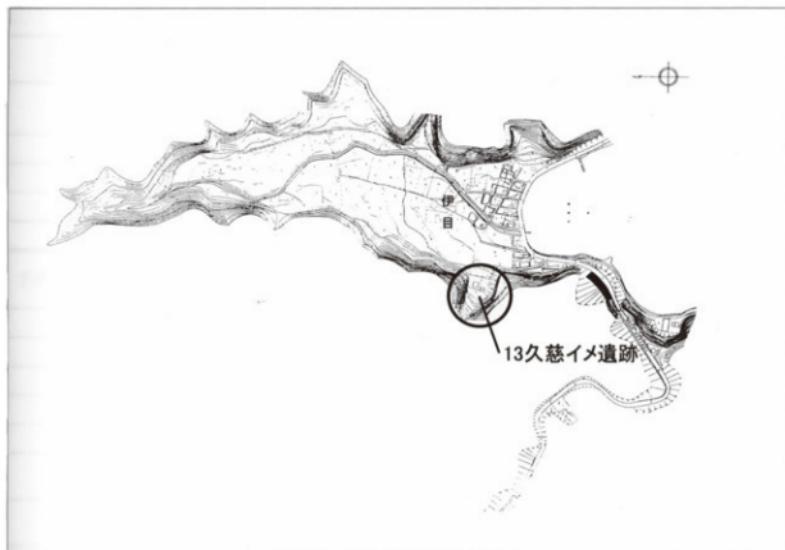
調査の記録

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成15年度・平成16年度
調査機関	瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存
備考	遺物の散布状況は、集落の形成されている平地ではなく。老山家のある丘陵に集中する。		
報告書	書名 (副書名)		
	編著者名		発行年月日
	編集機関 (住所)		

調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
近世	不明	染付・壺屋焼・陶器

出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
-----	-----	---------	--------------



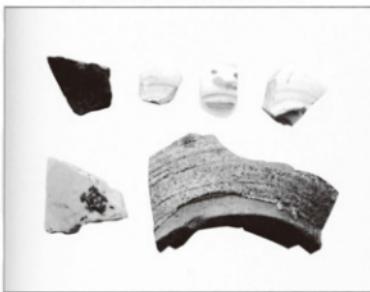
第18図 久慈イメ遺跡位置図



51 久慈イメ遺跡遺物散布地



52 久慈イメ遺跡遺物散布地(老山家)



53 久慈イメ遺跡採集資料

久慈集落

フリガナ 遺跡名	クジマエダ 久慈マエダ			図面 写真	第19図 54・55
遺跡番号 (通番)		所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町久慈		
地形	平地	時代	中世・近世・近代		
備考	小字名「前田」				

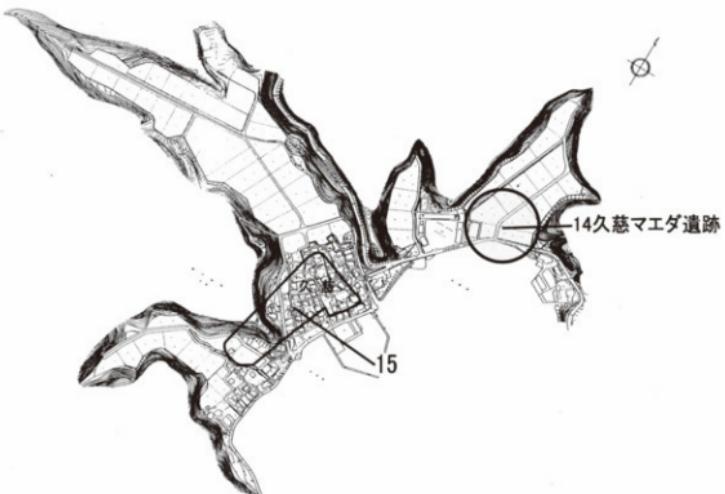
調査の記録

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査		調査年月日	平成15年度・平成16年度	
調査機関	瀬戸内町教育委員会			調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握			調査後の措置	現状保存
備考	役所跡。 工事で消滅している可能性が高い。				
報告書	書名 (副書名)				
	編著者名			発行年月日	
	編集機関 (住所)				

調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
中世	不明	須恵器

出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
-----	-----	---------	--------------



第19図 久慈マエダ遺跡位置図



54 久慈マエダ遺跡遺物散布地



55 久慈マエダ遺跡採集資料

久慈集落

フリガナ 遺跡名	クジシユウラク 久慈集落		図面写真	第20図 56・57
遺跡番号 (通番)			所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町久慈
地形	平地	時代	中世・近世・近代	
備考				

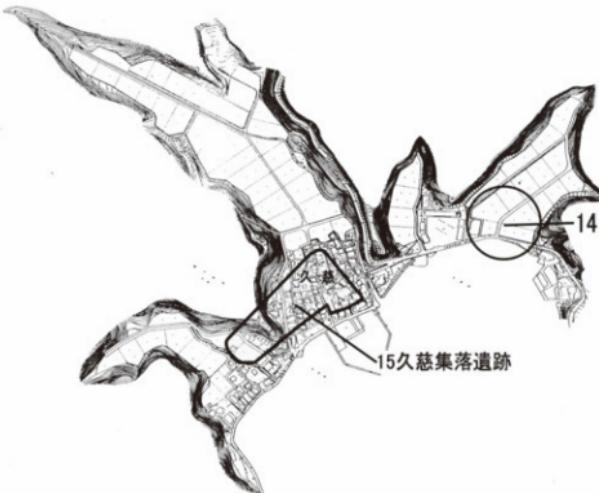
調査の記録

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査		調査年月日	平成15年度・平成16年度
調査機関	瀬戸内町教育委員会		調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握		調査後の措置	現状保存
備考				
報告書	書名 (副書名)			
	編著者名			発行年月日
	編集機関 (住所)			

調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
中世		類須恵器・青磁・
近世	不明	布目压痕土器・壺屋焼

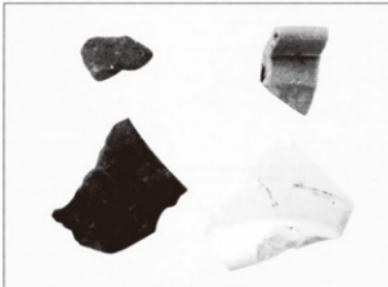
出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
-----	-----	---------	--------------



第20図 久慈集落遺跡位置図



56 久慈集落遺跡遠景



57 久慈集落遺跡採集資料

管鈍集落

フリガナ 遺跡名	クダトンシュウラク 管鈍集落			図面 写真	第21図 58・59・60
遺跡番号 (通番)	87-8-0 (10088)		所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町管鈍	
地形	砂丘		時代	古代・中世・近世・近代	
備考					

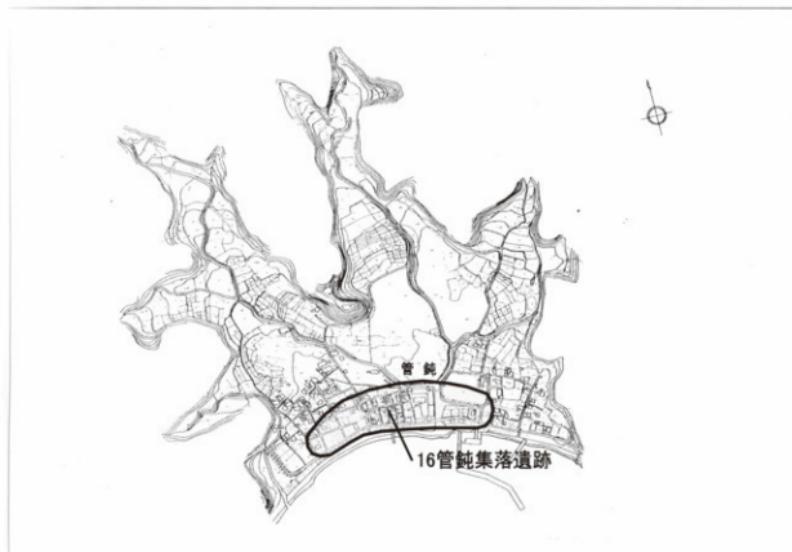
調査の記録

調査の種類	分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成元年 平成15年度・平成16年度	
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺	
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存	
備考				
報告書	書名 (副書名)	奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書II		
	編著者名	長野真一 富田逸郎	発行年月日	1990年
	編集機関 (住所)	鹿児島県教育委員会 鹿児島県鹿児島市鴨池新町10-1		

調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
古代		兼久式土器・布目压痕土器・
中世	不明	青磁・白磁・
近世		染付・壺屋焼

出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
-----	-----	---------	--------------



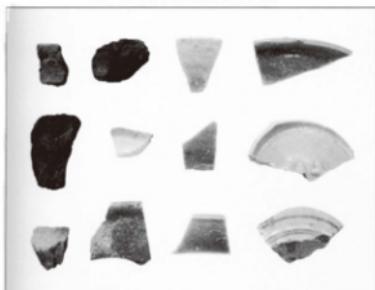
第21図 管鈍集落遺跡位置図



58 管鈍集落遺跡遠景



59 管鈍集落遺跡遺物散布地



60 管鈍集落遺跡採集資料

西古見集落

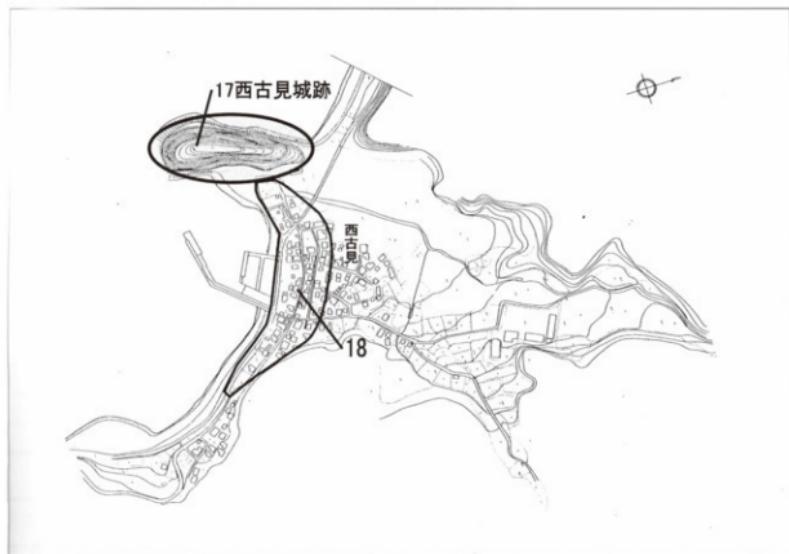
フリガナ 遺跡名	ニシコミグスクアト 西古見城跡			図面 写真	第22図 61
遺跡番号 (通番)	87-2-0 (10076)	所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町西古見字兼久		
地形	丘陵	時代	中世		
備考	別称「海城」				

調査の記録

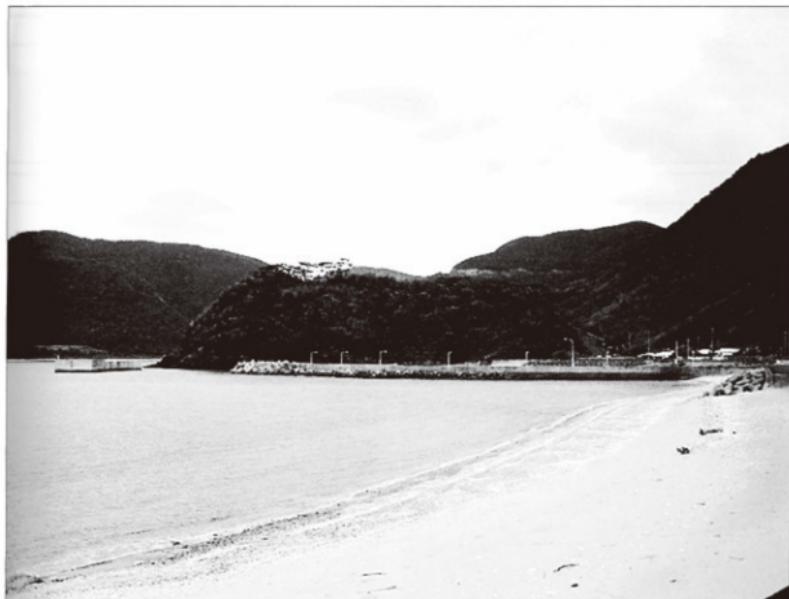
調査の種類	分布調査 表面採集調査	調査年月日	昭和62年 平成15年度・平成16年度	
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺	
調査起因	埋蔵文化財包藏地の把握	調査後の措置	現状保存	
備考	「海城」で記載			
	現況：自然公園、残存度：消滅、地名：兼久			
報告書	書名 (副書名)	鹿児島県の中世城館跡		
	編著者名	吉永正史・五味克夫 三木靖	発行年月日	1987年
	編集機関 (住所)	鹿児島県教育委員会 鹿児島県鹿児島市鴨池新町10-1		

調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
中世	不明	不明
出土量		資料の保管場所



第22図 西古見城跡位置図



61 西古見城跡遠景

西古見集落

フリガナ 遺跡名	ニシコミシュウラク 西古見集落			図面 写真	第23図 62・63・64・65・66
遺跡番号 (通番)	87-9-0 (10090)	所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町西古見		
地形	砂丘	時代	弥生・古代・中世・近世・近代		
備考	『西古見集落誌』「西古見出土の土器（破片）について」里山勇廣				

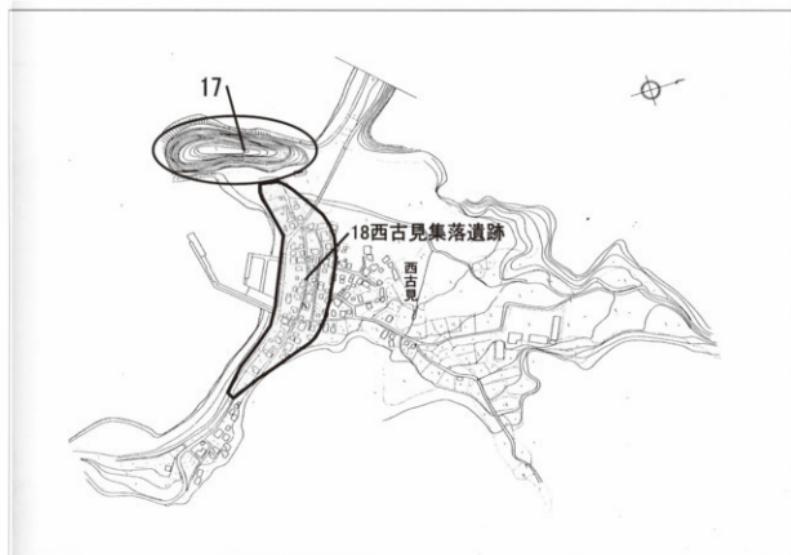
調査の記録

調査の種類	分布調査 表面採集調査	調査年月日	昭和60年・平成元年 平成15年度・平成16年度	
調査機関	名瀬市奄美歴史民俗資料館・ 鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺	
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存	
備考				
報告書	書名 (副書名)	奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書II		
	編著者名	長野真一 富田逸郎	発行年月日	1990年
	編集機関 (住所)	鹿児島県教育委員会 鹿児島県鹿児島市鴨池新町10-1		

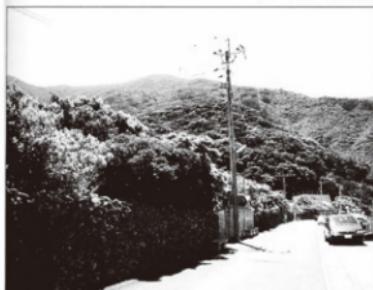
調査結果			
主な時代	主な遺構	主な遺物	
古代		弥生式土器・スセン當式土器・ 兼久式土器・青磁・壺屋焼・ ゴホウラ製腕輪・鉄滓	
中世	不明		
近世			
出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館



62 西古見集落遺跡遠景



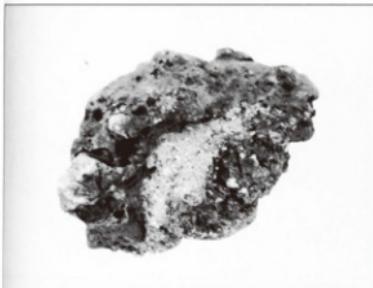
第23図 西古見集落遺跡位置図



63 西古見集落遺跡



64 西古見集落遺跡採集資料

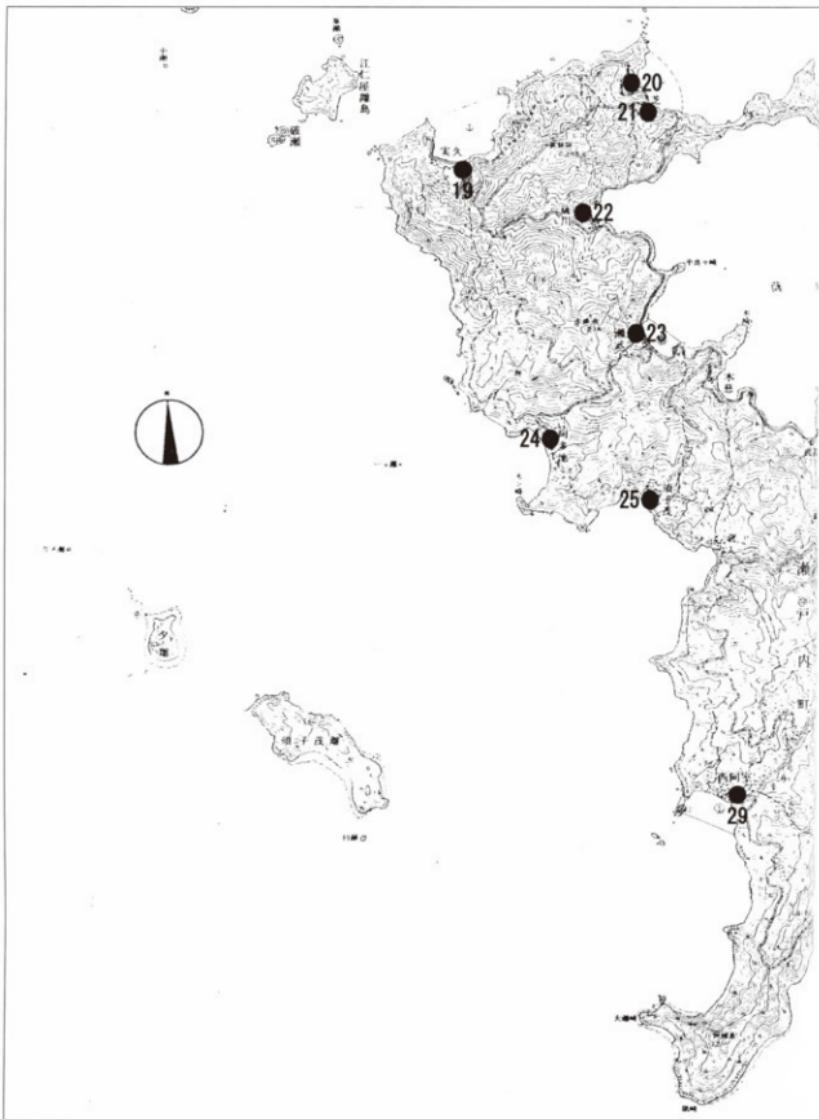


65 西古見集落遺跡採集資料(フイゴ)



66 西古見集落遺跡採集資料(貝輪)

第4節 実久地区



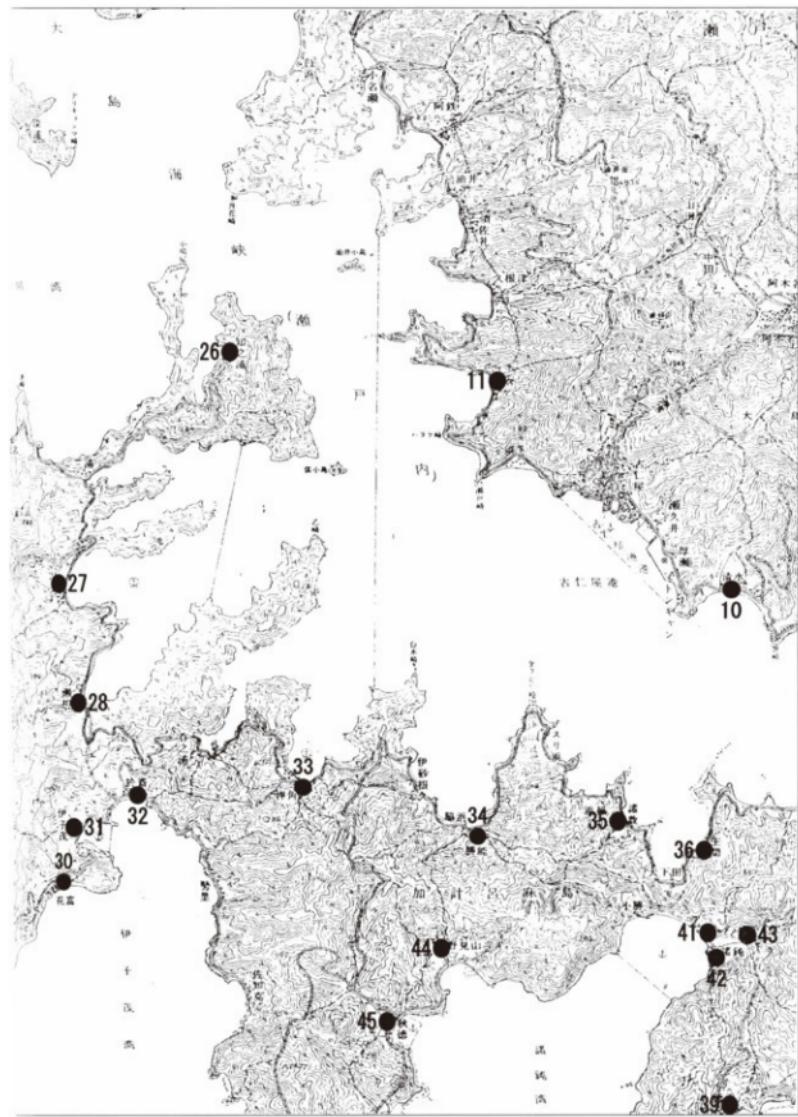
第24図 実久地区遺跡分布図

19実久集落遺跡

20芝タンマ遺跡

21芝集落遺跡

22藤川集落遺跡



実久集落

フリガナ 遺跡名	サネクシュウラク 実久集落		図面 写真	第25図 67・68・69・70・71・72
遺跡番号 (通番)	87-10-0 (10092)		所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町実久
地形	砂丘	時代	中世・近世・近代	
備考				

調査の記録

調査の種類	分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成元年 平成15年度・平成16年度
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存
備考			
報告書	書名 (副書名) 編著者名 編集機関 (住所)	奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書II 長野真一 福田逸郎 鹿児島県教育委員会 鹿児島県鹿児島市鴨池新町10-1	発行年月日 1990年

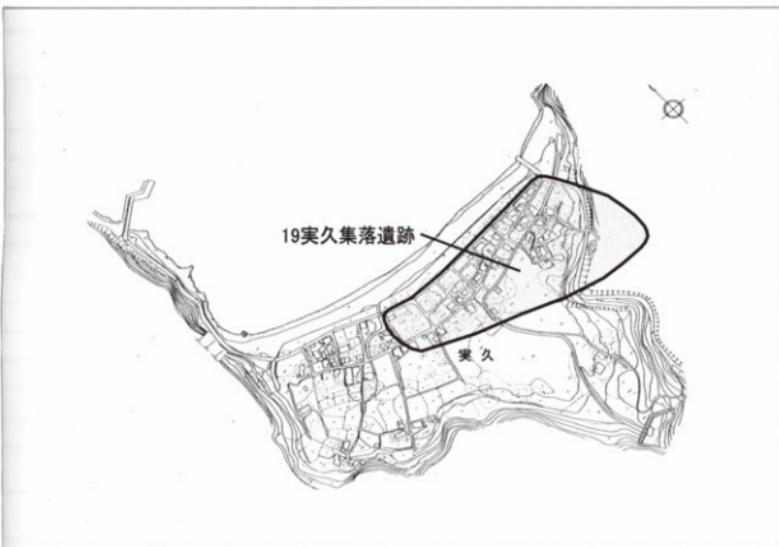
調査結果		
主な時代	主な遺構	主な遺物
中世		土器・青磁
近世	不明	染付・陶器
出土量	少 量	資料の保管場所 瀬戸内町立図書館・郷土館



67 実久集落遺跡遠景



68 実久集落遺跡遺物散布地



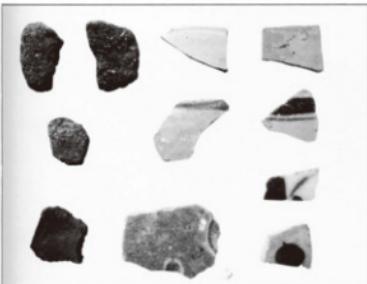
第25図 実久集落遺跡位置図



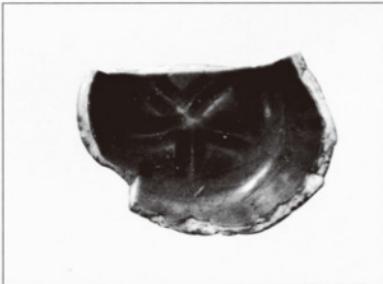
69 実久集落遺跡遺物散布地(ミヤー)



70 実久集落遺跡(実久三次郎神社)



71 実久集落遺跡採集資料



72 実久集落遺跡採集資料

芝集落

フリガナ 遺跡名	シバタシマ 芝タンマ	図面 写真	第26図 73・74・75
遺跡番号 (通番)		所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町芝
地形	砂丘	時代	中世・近世・近代
備考	小字名「タンマ」		

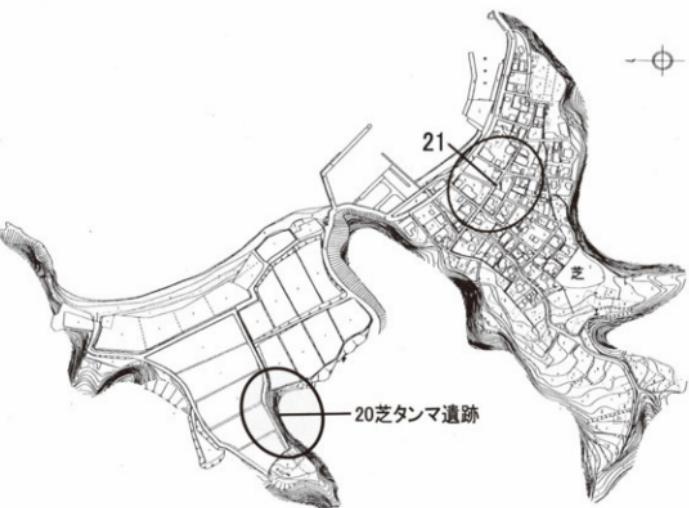
調査の記録

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成15年度・平成16年度
調査機関	瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存
備考	農地整備事業により消滅している可能性がある。		
報告書	書名 (副書名)		
	編著者名		発行年月日
	編集機関 (住所)		

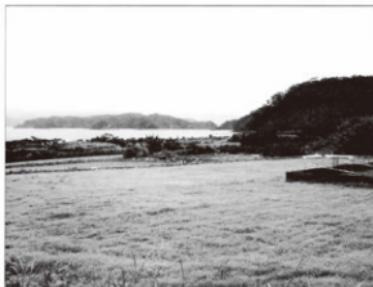
調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
中世		
近世	不明	土器・類須恵器・染付

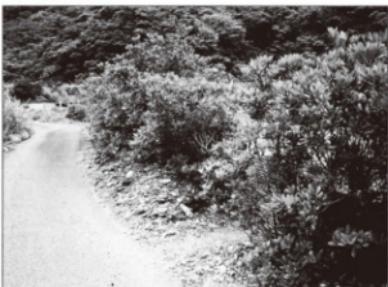
出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
-----	-----	---------	--------------



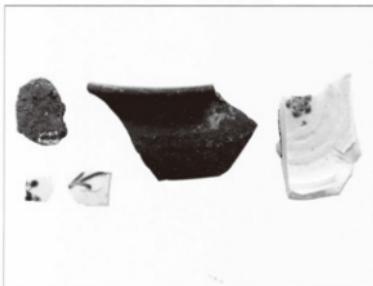
第26図 芝タンマ遺跡位置図



73 芝タンマ遺跡遠景



74 芝タンマ遺跡遺物散布地



75 芝タンマ遺跡採集資料

芝集落

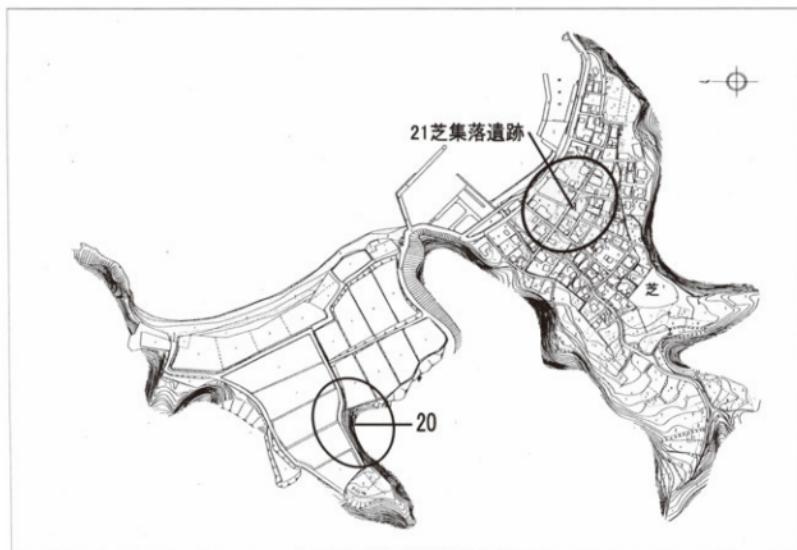
フリガナ 遺跡名	シバシュウラク 芝集落			図面 写真	第27図 76・77・78・79
遺跡番号 (通番)			所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町芝	
地形	砂丘		時代	中世・近世・近代	
備考					

調査の記録

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査			調査年月日	平成15年度・平成16年度
調査機関	瀬戸内町教育委員会			調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握			調査後の措置	現状保存
備考	遺物の散布状況は、集落の中心（ミヤー付近）に集中している。				
報告書	書名 (副書名)				
	編著者名			発行年月日	
	編集機関 (住所)				

調査結果		
主な時代	主な遺構	主な遺物
中世		類須恵器・青磁・
近世	不明	褐釉陶器・染付

出土量	少量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
-----	----	---------	--------------



第27図 芝集落遺跡位置図



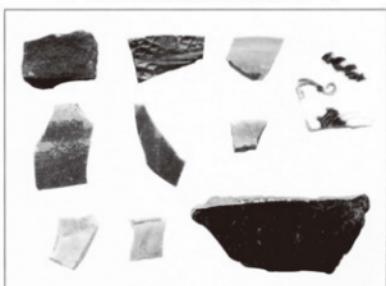
76 芝集落遺跡遠景



77 芝集落遺跡遺物散布地(ミヤー)



78 芝集落遺跡遺物散布地(アシャゲ)



79 芝集落遺跡採集資料

薩川集落

フリガナ 遺跡名	サツカワシユウラク 薩川集落			図面写真	第28図 80・81・82
遺跡番号 (通番)		所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町薩川		
地形	平地	時代	古代・中世・近世・近代		
備考					

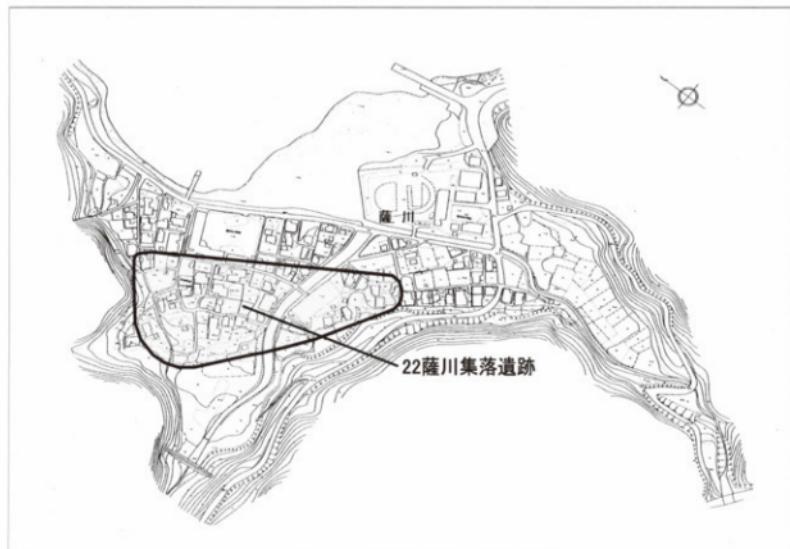
調査の記録

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成15年度・平成16年度
調査機関	瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存
備考	遺物の散布地は広大だが、特に集中して散布しているのは、学校・ミャー付近である。		
報告書	書名 (副書名)		
	編著者名		発行年月日
	編集機関 (住所)		

調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
古代		土器・類須恵器・
中世	不明	青磁・染付・薩摩焼
近世		

出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
-----	-----	---------	--------------



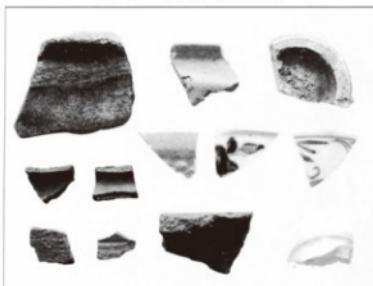
第28図 薩川集落遺跡位置図



80 薩川集落遺跡遠景



81 薩川集落遺跡遺物散布地(ミヤー)



82 薩川集落遺跡採集資料

瀬武集落

フリガナ 遺跡名	セダケサト 瀬武サト			図面 写真	第29図 83・84・85
遺跡番号 (通番)			所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町瀬武	
地形	平地		時代	中世・近世・近代	
備考					

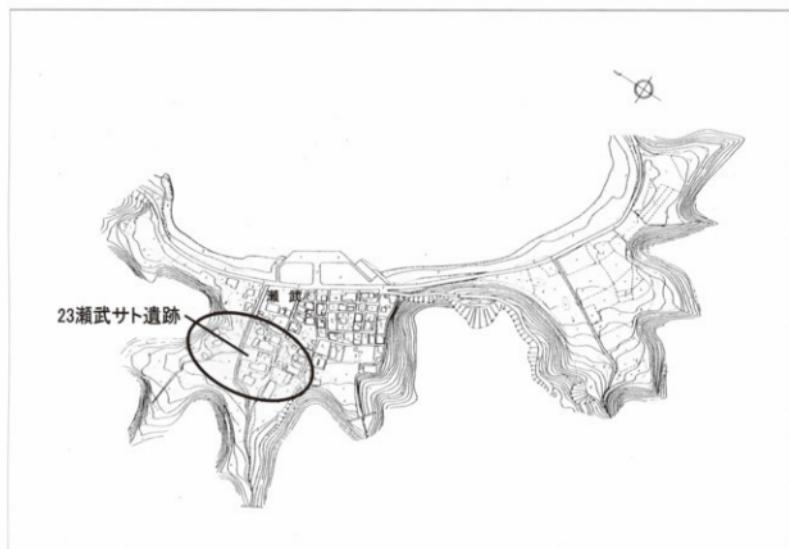
調査の記録

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査			調査年月日	平成15年度・平成16年度
調査機関	瀬戸内町教育委員会			調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握			調査後の措置	現状保存
備考	遺物の散布状況は、集落の山手側（武家・稻留家）に集中している。				
報告書	書名 (副書名)				
	編著者名			発行年月日	
	編集機関 (住所)				

調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
中世		類須恵器・青磁・白磁・
近世	不明	染付・印判手・ 薩摩焼・壺屋焼

出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
-----	-----	---------	--------------



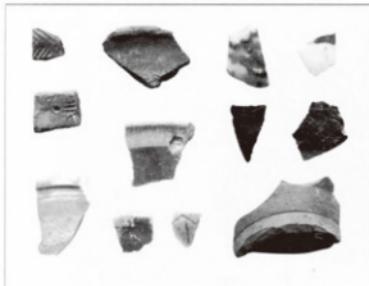
第29図 瀬武サト遺跡位置図



83 瀬武サト遺跡遺物散布地(旧家武家)



84 瀬武サト遺跡遺物散布地(アシャケ)



85 瀬武サト遺跡採集資料

阿多地集落

フリガナ 遺跡名	アダチイバタ 阿多地イバタ			図面 写真	第30図 86・87・88
遺跡番号 (通番)		所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町阿多地		
地形	砂丘	時代	古代・中世・近世・近代		
備考					

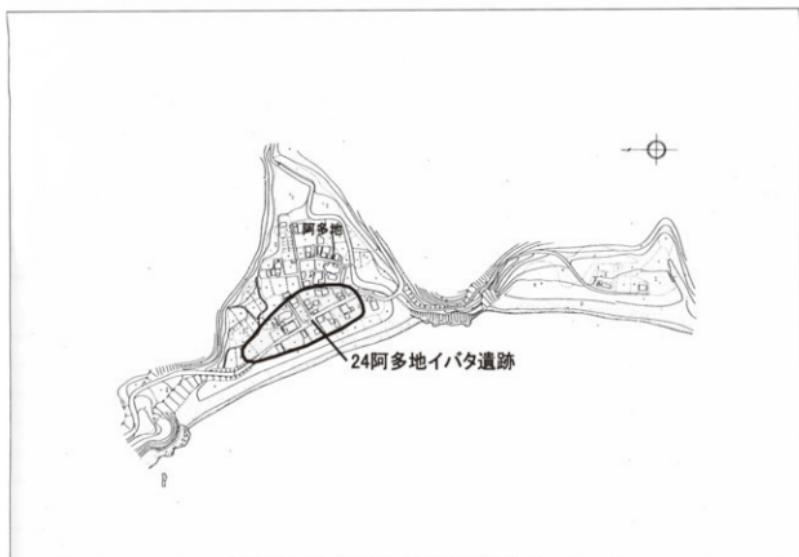
調査の記録

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査		調査年月日	平成15年度・平成16年度	
調査機関	瀬戸内町教育委員会			調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握		調査後の措置	現状保存	
備考					
報告書	書名 (副書名)				
	編著者名			発行年月日	
	編集機関 (住所)				

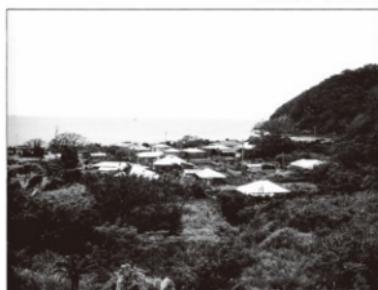
調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
古代		兼久式土器・滑石混入土器・
中世	不明	類須恵器・青磁・
近世		褐釉陶器・染付・薩摩焼

出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
-----	-----	---------	--------------



第30図 阿多地イバタ遺跡位置図



86 阿多地イバタ遺跡遠景



87 阿多地イバタ遺跡遺物散布地(ミヤー)



88 阿多地イバタ遺跡採集資料

須子茂集落

フリガナ 遺跡名	スコモシュウラク 須子茂集落			図面写真	第31図 89・90・91・92・93
遺跡番号 (通番)	87-111-0 (10094)		所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町須子茂	
地形	砂丘		時代	弥生・古代・中世・近世・近代	
備考					

調査の記録

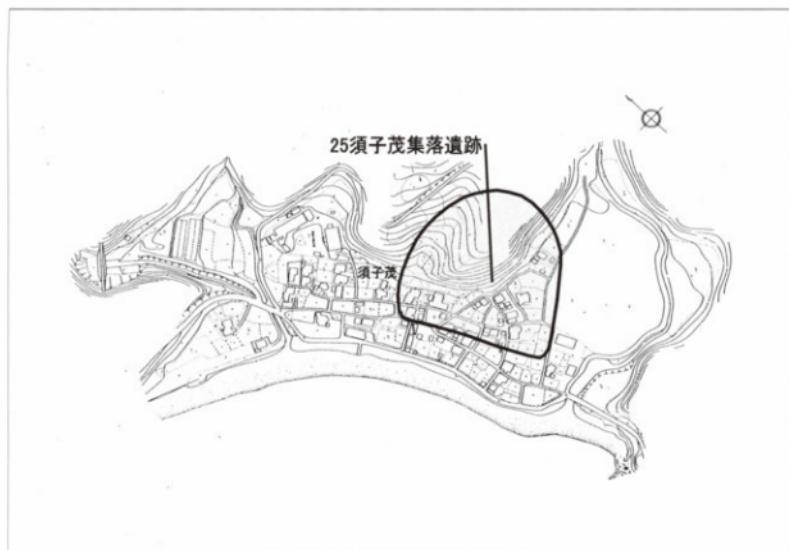
調査の種類	分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成元年 平成15年度・平成16年度	
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺	
調査起因	埋蔵文化財包藏地の把握	調査後の措置	現状保存	
備考	平成16年に試掘調査実施。			
報告書	書名 (副書名)	奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書II		
	編著者名	長野真一 富田逸郎	発行年月日	1990年
	編集機関 (住所)	鹿児島県教育委員会 鹿児島県鹿児島市鴨池新町10-1		

調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
弥生・古代 中世・近世	不明	弥生式土器・スセン當式土器・ 兼久式土器・青磁・類須恵器・ 陶器・ガラス玉・ゴホウラ貝殻
出土量	少 量	資料の保管場所



89 須子茂海岸(請島・与路島・徳之島・須子茂島)



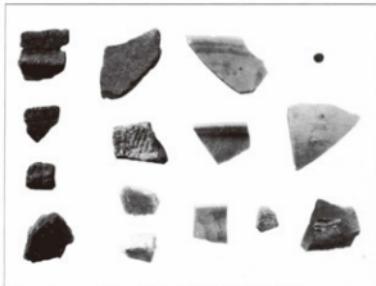
第31図 須子茂集落遺跡位置図



90 須子茂集落遺跡遠景



91 須子茂集落遺跡遺物散布地(カミヤ跡地)



92 須子茂集落遺跡採集資料



93 須子茂集落伝世品(郷土館所蔵)

知之浦集落

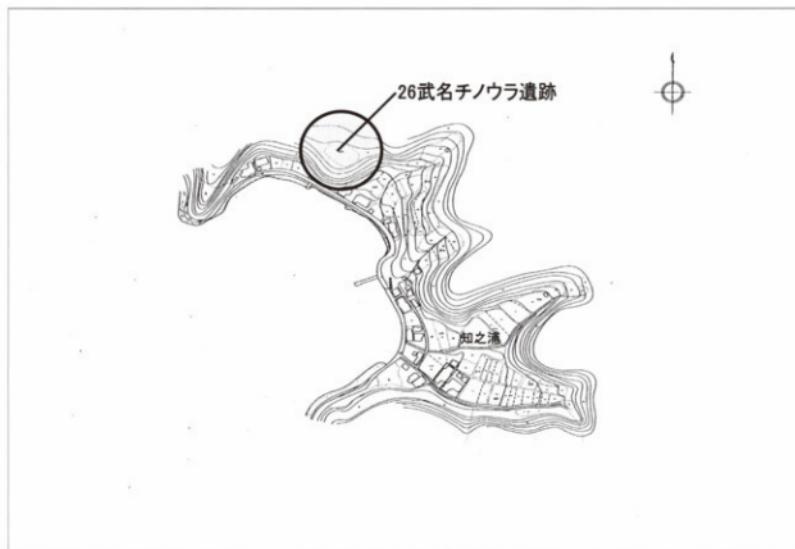
フリガナ 遺跡名	タケナチノウラ 武名チノウラ			図面 写真	第32図 94・95
遺跡番号 (通番)		所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町知之浦		
地形	丘陵	時代	中世		
備考					

調査の記録

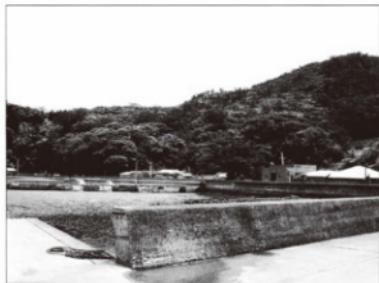
調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査		調査年月日	平成15年度・平成16年度	
調査機関	瀬戸内町教育委員会			調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握			調査後の措置	現状保存
備考	遺物の散布地は、集落の奥の丘陵である。通称は「グスコ」である。				
報告書	書名 (副書名)				
	編著者名		発行年月日		
	編集機関 (住所)				

調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
中世	不明	青磁
出土量	少量	資料の保管場所 瀬戸内町立図書館・郷土館



第32図 武名チノウラ遺跡位置図



94 武名チノウラ遺跡遠景



95 武名チノウラ遺跡採集資料

俵集落

フリガナ 遺跡名	ヒヨウサト 俵サト		図面 写真	第33図 96・97・98・99
遺跡番号 (通番)			所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町俵
地形	平地	時代	中世・近世・近代	
備考				

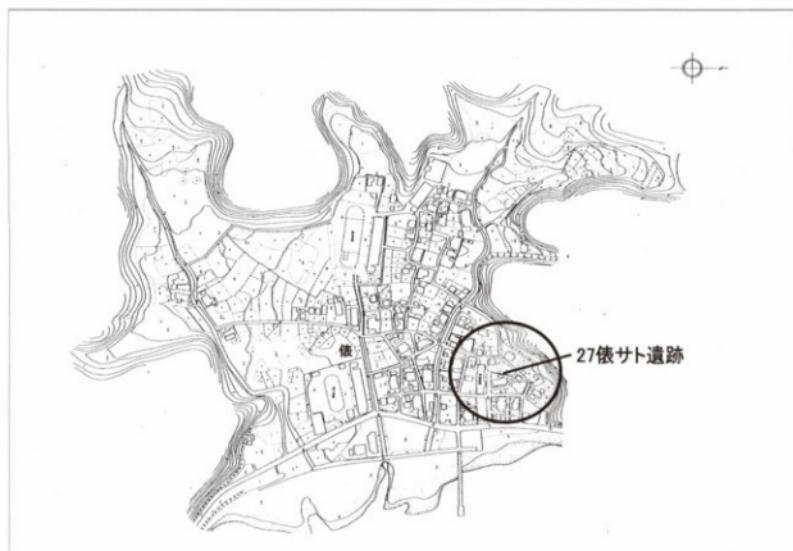
調査の記録

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査		調査年月日	平成15年度・平成16年度
調査機関	瀬戸内町教育委員会		調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握		調査後の措置	現状保存
備考				
報告書	書名 (副書名)			
	編著者名			発行年月日
	編集機関 (住所)			

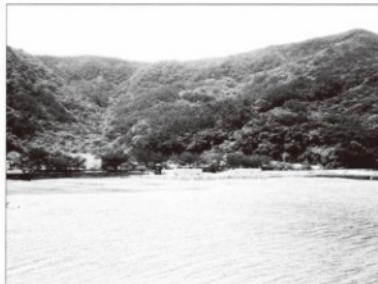
調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
中世		白磁・褐釉陶器
近世	不明	染付・薩摩焼

出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
-----	-----	---------	--------------



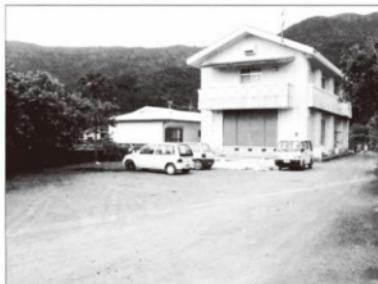
第33図 傑サト遺跡位置図



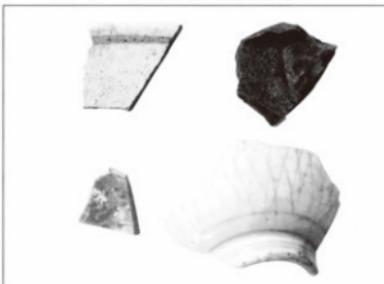
96 傑サト遺跡遠景



97 傑サト遺跡遺物散布地



98 傑サト遺跡遺物散布地(ミヤー)



99 傑サト遺跡採集資料

瀬相集落

フリガナ 遺跡名	セソウムラウチ 瀬相ムラウチ			図面 写真	第34図 100・101・102
遺跡番号 (通番)		所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町瀬相		
地形	平地	時代	中世・近世・近代		
備考					

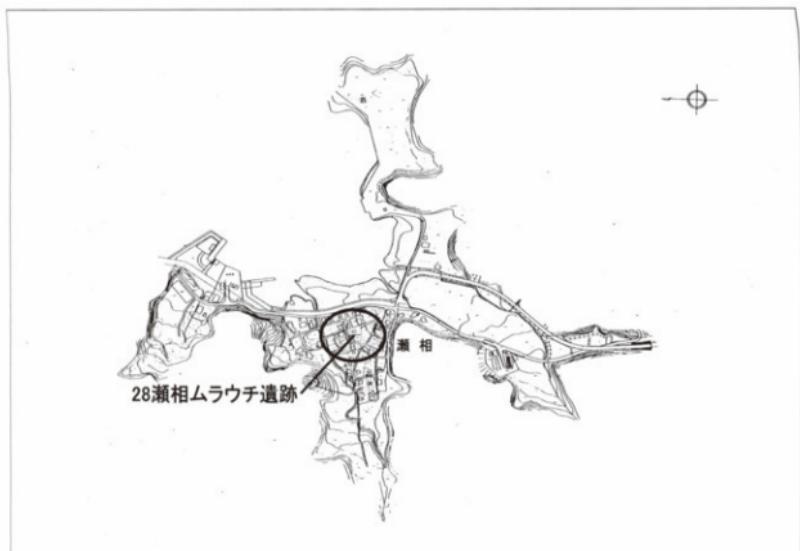
調査の記録

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査		調査年月日	平成15年度・平成16年度	
調査機関	瀬戸内町教育委員会			調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包藏地の把握		調査後の措置	現状保存	
備考	遺物の散布状況は、集落全体ではなく、集落の中心（ミヤー）に集中している。				
報告書	書名 (副書名)				
	編著者名		発行年月日		
	編集機関 (住所)				

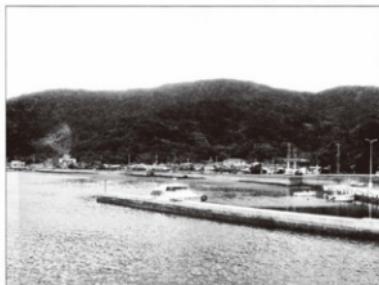
調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
中世		
近世	不明	青磁・染付・薩摩焼

出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
-----	-----	---------	--------------



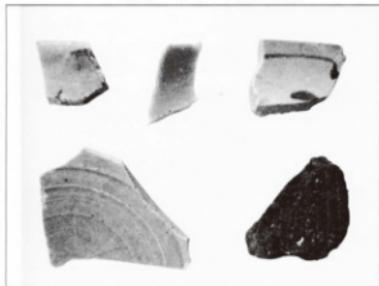
第34図 瀬相ムラウチ遺跡位置図



100 瀬相ムラウチ遺跡遠景



101 瀬相ムラウチ遺跡遺物散布地(ミヤー)



102 瀬相ムラウチ遺跡採集資料

西阿室集落

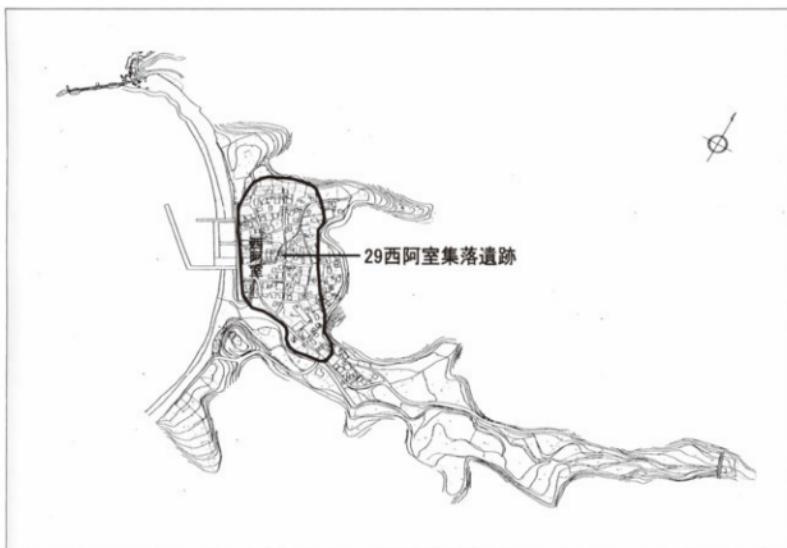
フリガナ 遺跡名	ニシアムロシュウラタ 西阿室集落			図面 写真	第35図 103・104・105
遺跡番号 (通番)	87-12-0 (10096)	所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町西阿室		
地形	平地	時代	中世・近世・近代		
備考	平成11年分布調査、旧名「金久原・見取原」を含む				

調査の記録

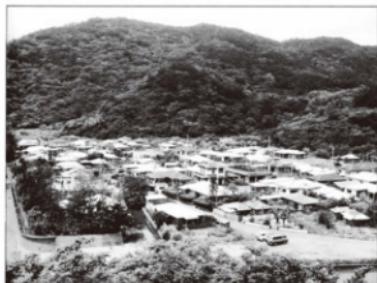
調査の種類	分布調査 農政分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成元年・平成11年 平成15年度・平成16年度
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存
備考			
報告書	書名 (副書名) 編著者名 編集機関 (住所)	奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書Ⅱ 長野真一 富田逸郎	発行年月日 1990年

調査結果

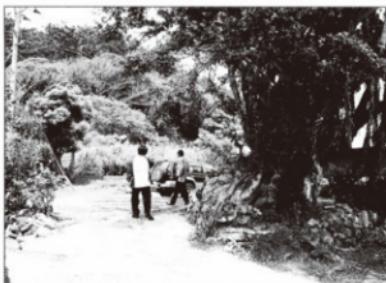
主な時代	主な遺構	主な遺物
中世		土器・類須恵器・
近世	不明	青磁・白磁・褐釉陶器・ 染付・薩摩焼
出土量	少 量	資料の保管場所 瀬戸内町立図書館・郷土館



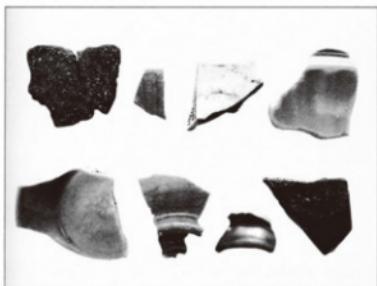
第35図 西阿室集落遺跡位置図



103 西阿室集落遺跡遠景

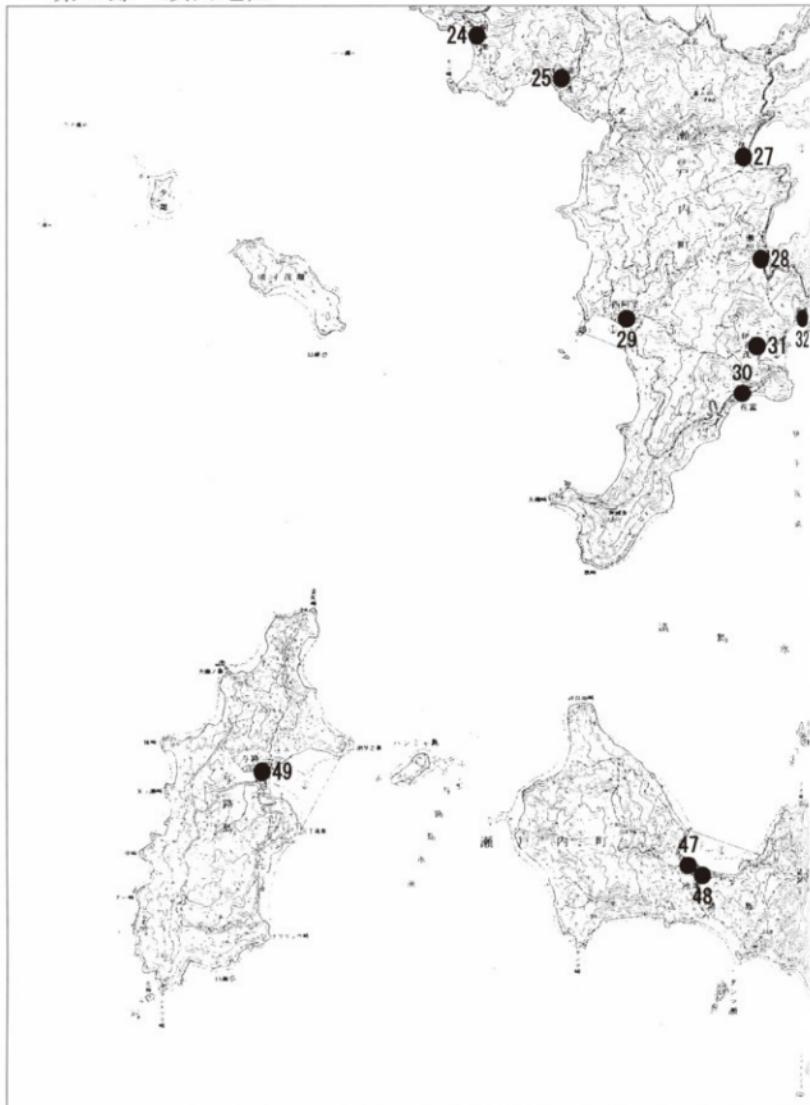


104 西阿室集落遺物散布地(ミヤー)



105 西阿室集落遺跡採集資料

第5節 鎮西地区

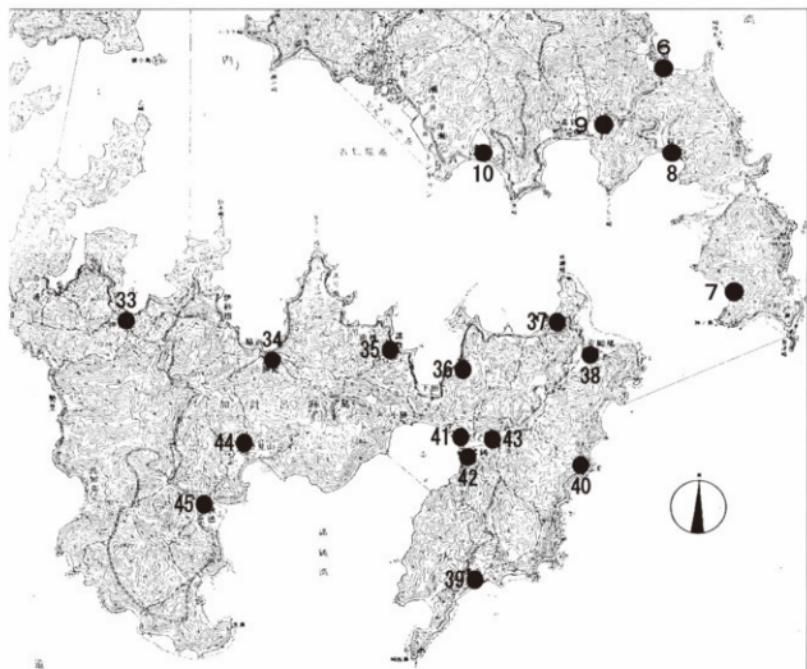


第36図 鎮西地区遺跡分布図

30花富ヒラタ遺跡
31伊子茂ナカサト遺跡
32於齊集落遺跡

33押角ムラウチ遺跡
34勝能サト遺跡
35諸数集落遺跡

36生間ミタ遺跡
37渡連ムラウチ遺跡
38渡連アンキヤバ遺跡



39諸鈍トクハマ遺跡

40諸鈍城跡

41諸鈍クリ遺跡

42諸鈍カネコ遺跡

43諸鈍サト遺跡

44野見山オオサト遺跡

45秋徳集落遺跡

46諸阿室集落遺跡

47池地アガンマ遺跡

48池地オーコーバリ遺跡

49与路集落遺跡

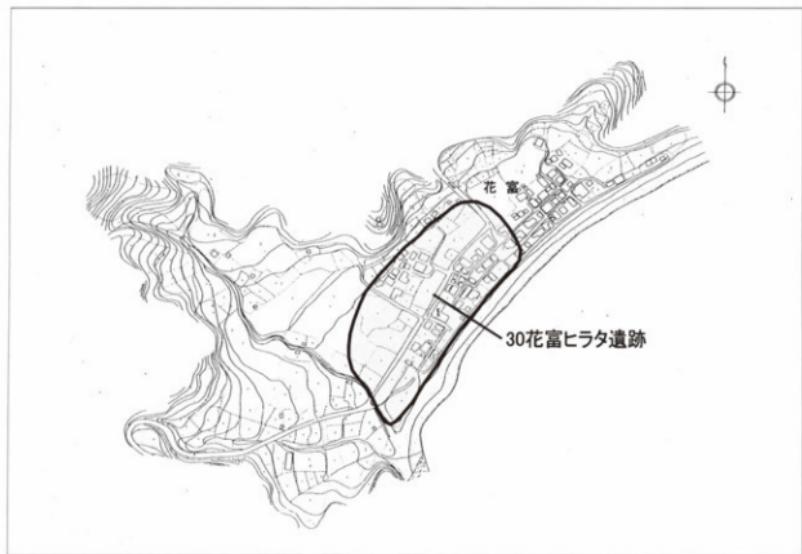
花富集落

フリガナ 遺跡名	ケドミヒラタ 花富ヒラタ			図面 写真	第37図 106・107・108
遺跡番号 (通番)	87-20-0 (11384)	所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町花富平田		
地形	砂丘	時代	縄文・中世・近世・近代		
備考	平成11年農政分布調査 小字名「ヒラタ」				

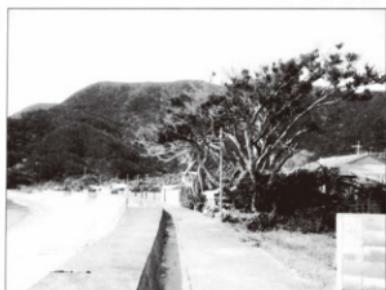
調査の記録

調査の種類	農政分布調査 表面採集調査		調査年月日	平成11年度 平成15年度・平成16年度					
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会		調査面積	集落とその周辺					
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握		調査後の措置	現状保存					
備考									
報告書									
報告書	書名 (副書名)								
	編著者名			発行年月日					
	編集機関 (住所)								

調査結果		
主な時代	主な遺構	主な遺物
縄文 中世 近世	不明	土器・青磁・染付
出土量	少 量	資料の保管場所 瀬戸内町立図書館・郷土館



第37図 花富ヒラタ遺跡位置図



106 花富ヒラタ遺跡遠景



107 花富ヒラタ遺跡遺物散布地(ミヤー)



108 花富ヒラタ遺跡採集資料

伊子茂集落

フリガナ 遺跡名	イコモナカサト 伊子茂ナカサト			図面 写真	第38回 109・110・111・112・113
遺跡番号 (通番)		所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町伊子茂		
地形	平地	時代	縄文・近世・近代		
備考					

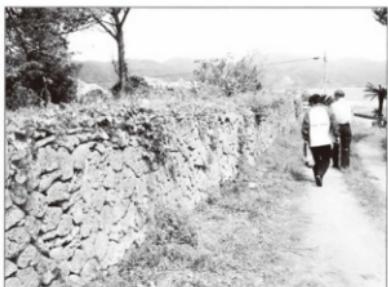
調査の記録

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査			調査年月日	平成15年度・平成16年度
調査機関	瀬戸内町教育委員会			調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握			調査後の措置	現状保存
備考					
報告書	書名 (副書名)				
	編著者名		発行年月日		
	編集機関 (住所)				

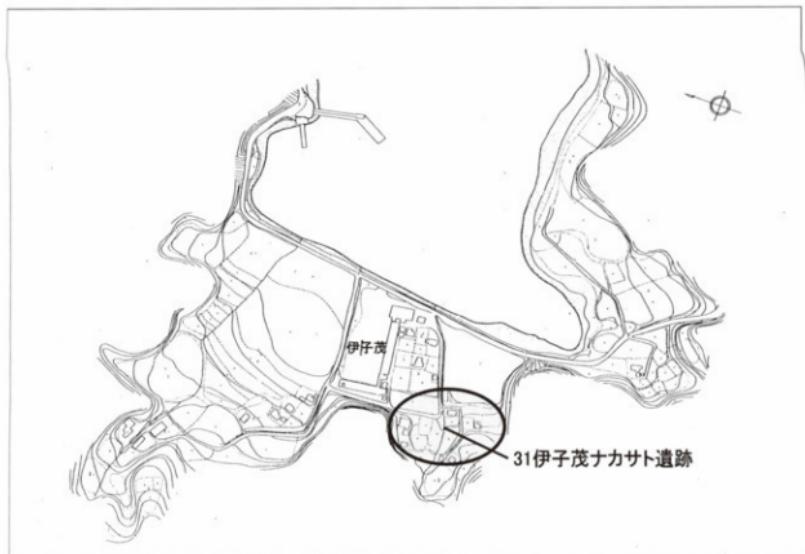
調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
縄文		
近世	不明	石器・染付

出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
-----	-----	---------	--------------



109 伊子茂ナカサト遺跡調査風景



第38図 伊子茂ナカサト遺跡位置図



110 伊子茂ナカサト遺跡遺跡遺物散布地(旧家西家)



111 伊子茂ナカサト遺跡採集資料



112 伊子茂ナカサト遺跡採集資料



113 伊子茂ナカサト遺跡採集資料

於斎集落

フリガナ 遺跡名	オサイシユウラク 於斎集落			図面 写真	第39図 114・115
遺跡番号 (通番)	87-22-0 (11386)	所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町於斎		
地形	砂丘	時代	中世・近世・近代		
備考	平成11年農政分布調査				

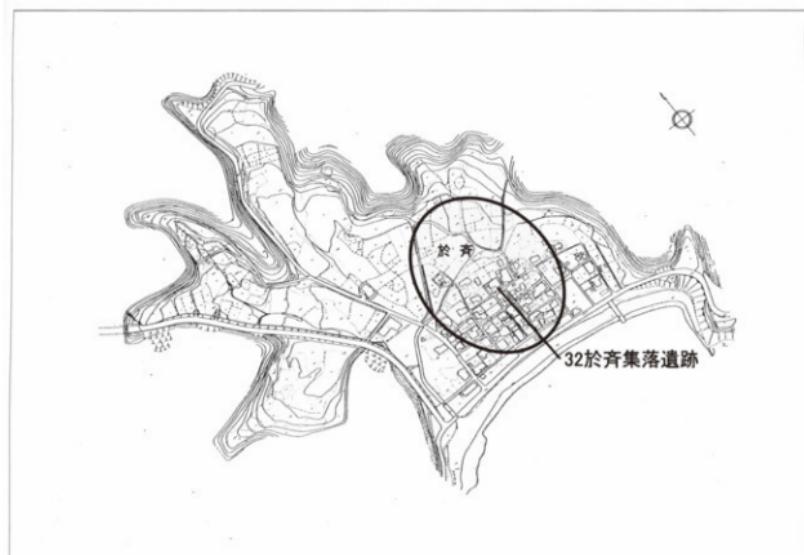
調査の記録

調査の種類	農政分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成11年度 平成15年度・平成16年度
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存
備考			
報告書	書名 (副書名)		
	編著者名		発行年月日
	編集機関 (住所)		

調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
中世		
近世	不明	類須恵器・染付

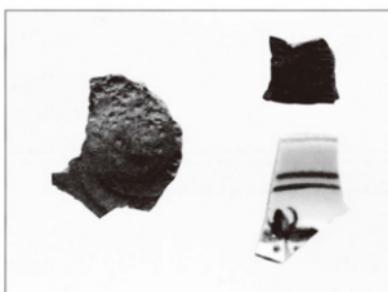
出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
-----	-----	---------	--------------



第39図 於齊集落遺跡位置図



114 於齊集落遺跡遺物散布地



115 於齊集落遺跡採集資料

押角集落

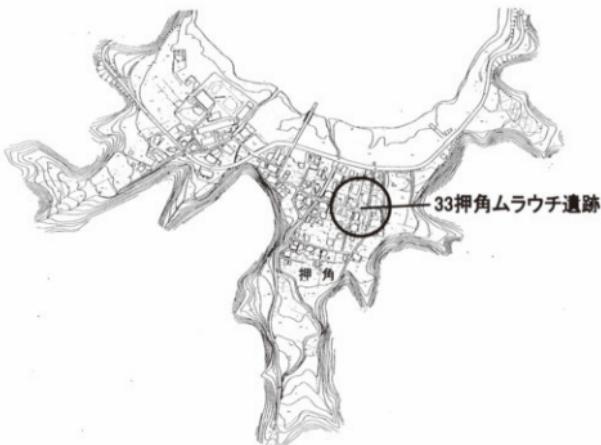
フリガナ 遺跡名	オシカタムラウチ 押角ムラウチ			図面 写真	第40図 116・117・118
遺跡番号 (通番)		所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町押角		
地形	平地	時代	中世・近世・近代		
備考					

調査の記録

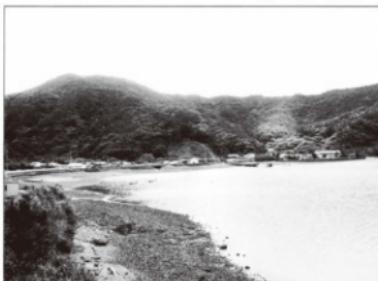
調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査			調査年月日	平成15年度・平成16年度
調査機関	瀬戸内町教育委員会			調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握			調査後の措置	現状保存
備考	遺物の散布状況は、集落全体ではなく、ミヤ一周辺に集中している。				
報告書	書名 (副書名)				
	編著者名			発行年月日	
	編集機関 (住所)				

調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物	
中世			
近世	不明	青磁・染付・陶器	
出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館



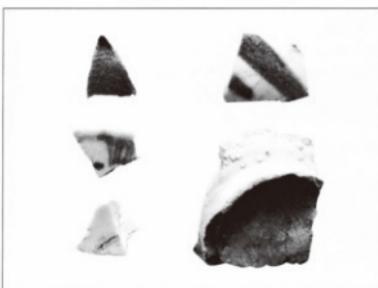
第40図 押角ムラウチ遺跡位置図



116 押角ムラウチ遺跡遠景



117 押角ムラウチ遺跡遺物散布地



118 押角ムラウチ遺跡採集資料

勝能集落

フ リ ガ ナ 遺 跡 名	カチユキサト 勝能サト			図面 写真	第41図 119・120・121
遺 跡 番 号 (通 番)		所 在 地	鹿児島県大島郡瀬戸内町勝能		
地 形	平 地	時 代	中世・近世・近代		
備 考					

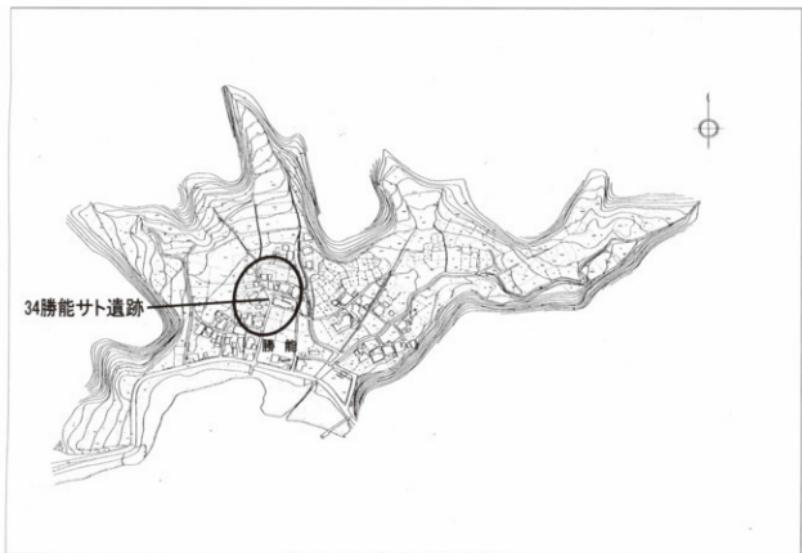
調査の記録

調 査 の 種 類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査		調 査 年 月 日	平成15年度・平成16年度	
調 査 機 関	瀬戸内町教育委員会			調 査 面 積	集落とその周辺
調 査 起 因	埋蔵文化財包蔵地の把握			調 査 後 の 措 置	現状保存
備 考	遺物の散布状況は、集落全体ではなく、なのはな園の周辺に集中している。				
報 告 書	書名 (副書名)				
	編著者名		発 行 年 月 日		
	編集機関 (住 所)				

調 査 結 果

主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物
中 世		土器・類須恵器
近 世	不 明	青磁・陶器

出 土 量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
-------	-----	---------	--------------



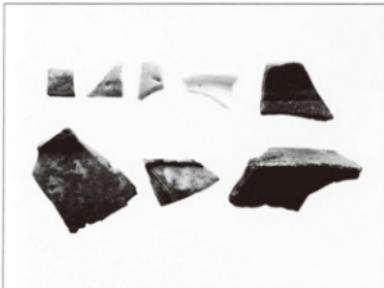
第41図 勝能サト遺跡位置図



119 勝能サト遺跡遠景



120 勝能サト遺跡遺物散布地



121 勝能サト遺跡採集資料

諸数集落

フリガナ 遺跡名	ショカズシュウラク 諸数集落			図面 写真	第42図 122・123・124
遺跡番号 (通番)		所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町諸数		
地形	平地	時代	中世・近世・近代		
備考					

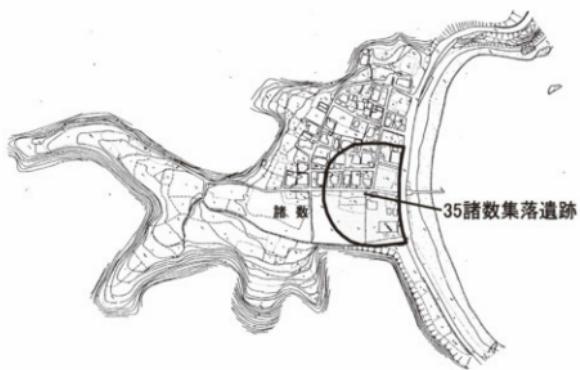
調査の記録

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査		調査年月日	平成15年度・平成16年度	
調査機関	瀬戸内町教育委員会		調査面積	集落とその周辺	
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握		調査後の措置	現状保存	
備考	遺物の散布状況は、集落全体ではなく、公民館（ミヤー）周辺に集中している。				
報告書	書名 (副書名)				
	編著者名		発行年月日		
	編集機関 (住所)				

調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
中世		類須恵器・青磁
近世	不明	青花・陶器

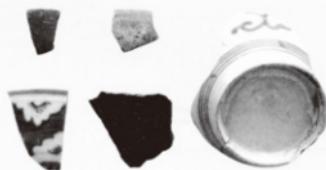
出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
-----	-----	---------	--------------



第42図 諸數集落遺跡位置図



122 諸數集落遺跡遠景



123 諸數集落遺跡採集資料



124 諸數集落遺跡採集資料

生間集落

フリガナ 遺跡名	イケンマミタ 生間ミタ			図面 写真	第43図 125・126・127
遺跡番号 (通番)		所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町生間		
地形	平地	時代	中世・近世・近代		
備考					

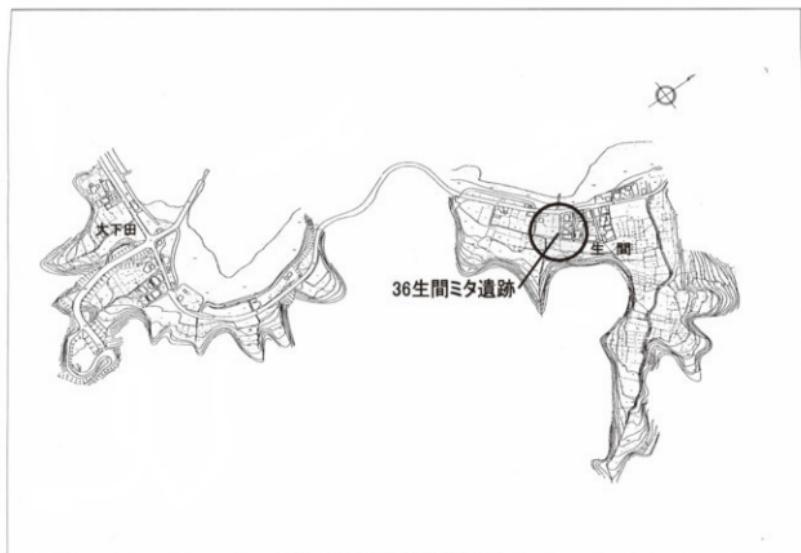
調査の記録

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査		調査年月日	平成15年度・平成16年度			
調査機関	瀬戸内町教育委員会			調査面積	集落とその周辺		
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握		調査後の措置	現状保存			
備考	遺物の散布状況は、集落全体ではない。						
報告書	書名 (副書名)						
	編著者名		発行年月日				
	編集機関 (住所)						

調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
中世		
近世	不明	類須恵器・青磁・陶器

出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
-----	-----	---------	--------------



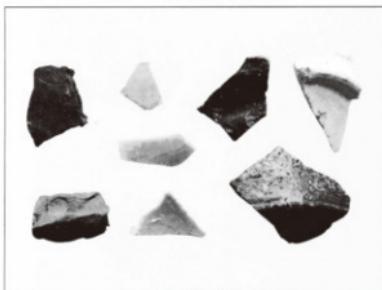
第43図 生間ミタ遺跡位置図



125 生間ミタ遺跡遠景



126 生間ミタ遺跡遺物散布地



127 生間ミタ遺跡採集資料

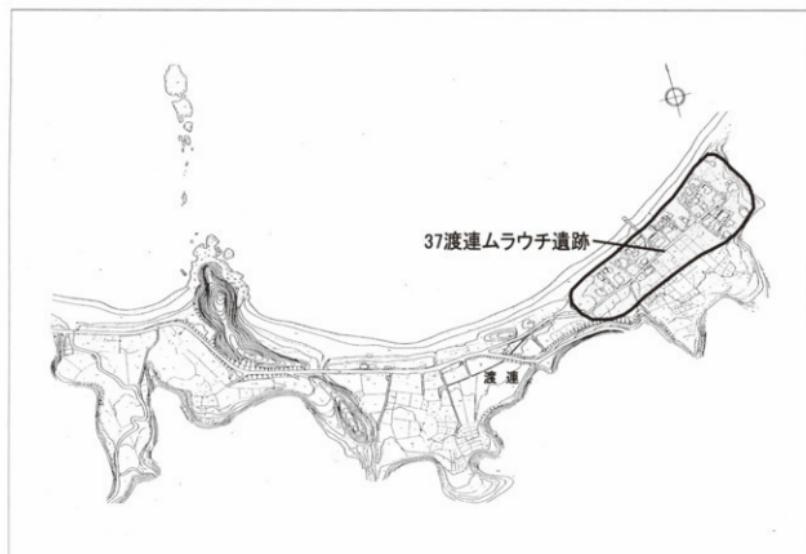
渡連集落

フ リ ガ ナ 遺 跡 名	ドレンムラウチ 渡連ムラウチ			図面 写真	第44図 128・129・130・131		
遺 跡 番 号 (通 番)	8 7 - 2 1 - 0 (1 1 3 8 5)		所 在 地	鹿児島県大島郡瀬戸内町渡連			
地 形	砂 丘	時 代	古代・中世・近世・近代				
備 考	平成 11 年農政分布調査						

調査の記録

調 査 の 種 類	農政分布調査 表面採集調査	調 査 年 月 日	平成 11 年度 平成15年度・平成16年度
調 査 機 関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会	調 査 面 積	集落とその周辺
調 査 起 因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調 査 後 の 措 置	現状保存
備 考	加工途中と考えられるゴホウラが4点採集できた。ゴホウラの集積遺構が存在する可能性がある。		
報 告 書	書名 (副書名)		
	編著者名		発 行 年 月 日
	編集機関 (住 所)		

調 査 結 果		
主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物
中 世		類須恵器・青磁・
近 世	不 明	染付・陶器・ ゴホウラ貝殻
出 土 量	少 量	資料の保管場所
		瀬戸内町立図書館・郷土館



第44図 渡連ムラウチ遺跡位置図



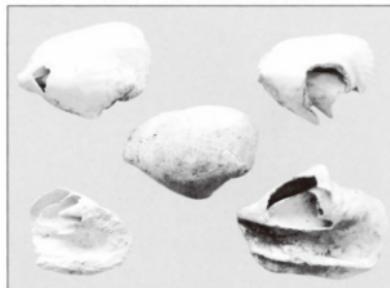
128 渡連ムラウチ遺跡遠景



129 渡連ムラウチ遺跡遺物散布地



130 渡連ムラウチ遺跡採集資料



131 渡連ムラウチ遺跡採集資料(ゴホウラ)

安脚場集落

フリガナ 遺跡名	ドレンアンキヤバ 渡連アンキヤバ			図面 写真	第45図 132・133・134・135・136
遺跡番号 (通番)	87-13-0 (10098)		所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町安脚場	
地形	砂丘		時代	縄文・中世・近世・近代	
備考	平成11年農政分布調査「仲田原」を含む				

調査の記録

調査の種類	分布調査 表面採集調査	農政分布調査	調査年月日	平成元年・平成11年度 平成15年度・平成16年度
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会		調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握		調査後の措置	現状保存
備考				
報告書	書名 (副書名)	奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書II		
	編著者名	長野真一 富田逸郎	発行年月日	1990年
	編集機関 (住所)	鹿児島県教育委員会 鹿児島県鹿児島市鴨池新町10-1		

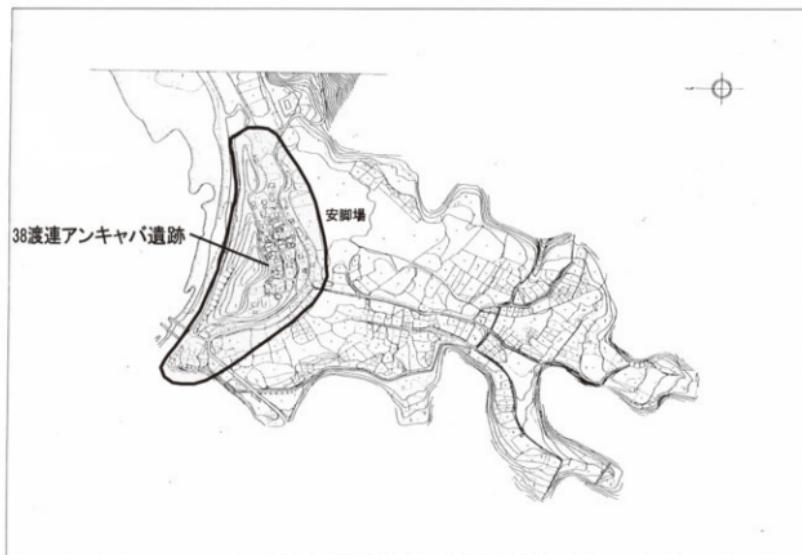
調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
縄文		石器・条痕文土器・面繩前庭式土器・
中世	不明	嘉徳式土器・兼久式土器・類須恵器・
近世		青磁・フイゴ・染付・陶器

出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館



132 渡連アンキヤバ遺跡（郷土館所蔵）



第45図 渡連アンキヤバ遺跡位置図



133 渡連アンキヤバ遺跡遺物散布地(ミヤー)



134 渡連アンキヤバ遺跡露出部分



135 渡連アンキヤバ遺跡採集資料



136 渡連アンキヤバ遺跡採集資料(出村氏寄贈資料)

徳浜集落

フリガナ 遺跡名	ショドントクハマ 諸鈍トクハマ			図面 写真	第46回 137・138・139・140
遺跡番号 (通番)	87-15-0 (11379)	所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町徳浜原		
地形	砂丘	時代	中世・近世・近代		
備考	平成11年農政分布調査 小字名「徳浜原」				

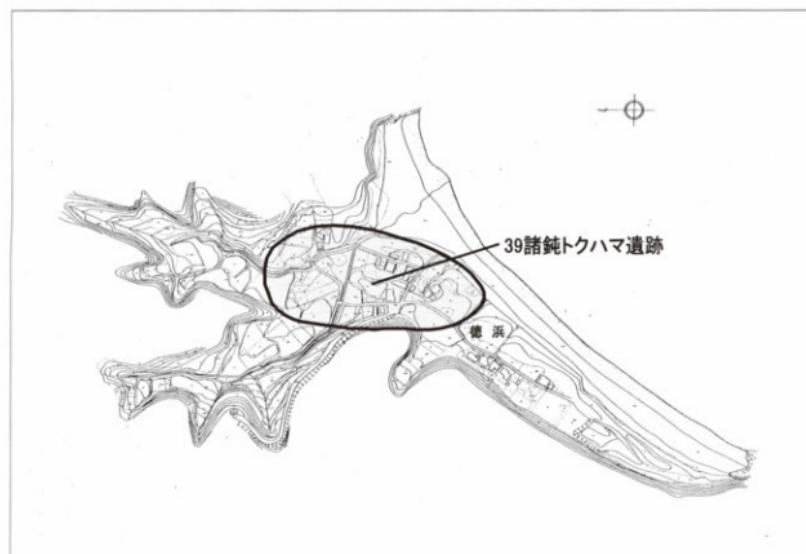
調査の記録

調査の種類	農政分布調査 表面採集調査		調査年月日	平成11年度 平成15年度・平成16年度
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会		調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握		調査後の措置	現状保存
備考	加工途中と考えられるヤコウガイが採集できた。			
報告書	書名 (副書名)			
	編著者名			発行年月日
	編集機関 (住所)			

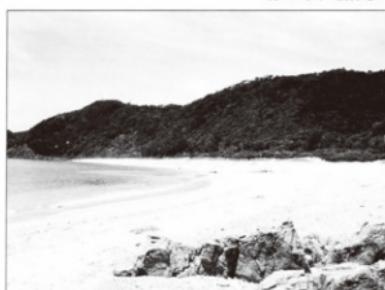
調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
中世		
近世	不明	陶器・ヤコウガイ貝殻

出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
-----	-----	---------	--------------



第46図 諸純トクハマ遺跡位置図



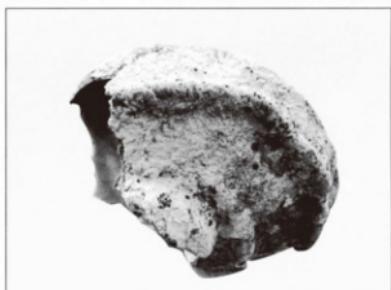
137 諸純トクハマ遺跡遠景



138 諸純トクハマ遺跡遺物散布地(神社御神体)



139 諸純トクハマ遺跡採集資料



140 諸純トクハマ遺跡採集資料

諸鈍集落

フリガナ 遺跡名	ショドングスクアット 諸鈍城跡			図面写真	第47図 141・142・143・144
遺跡番号 (通番)	87-2-0 (10076)	所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町諸鈍		
地形	山頂	時代	中世		
備考	別称「フワームテ」				

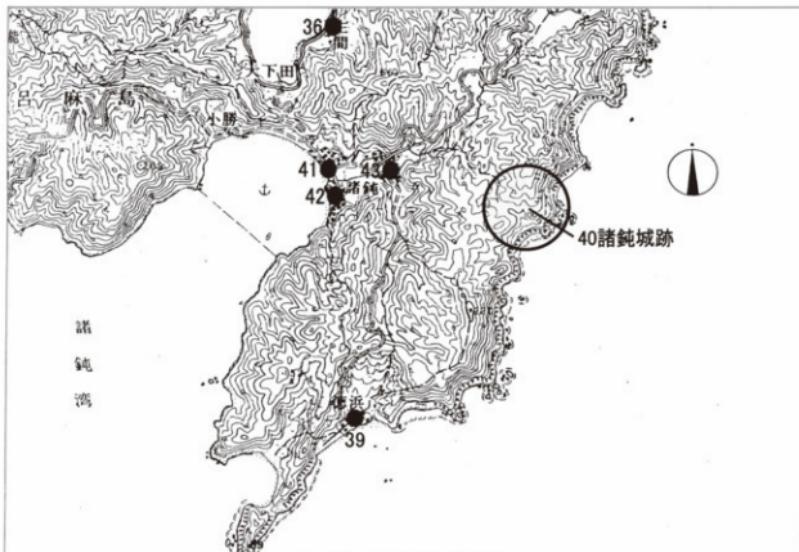
調査の記録

調査の種類	分布調査 表面採集調査	調査年月日	昭和62年 平成15年度・平成16年度
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存
備考	現況：山林、残存度：消滅、地名：フワームテ 平成16年度に諸鈍城跡の調査を行った際には、城跡の正確な位置は確認できなかった。		
報告書	書名 (副書名) 編著者名 吉永正史・五味克夫 三木靖 編集機関 (住所) 鹿児島県教育委員会 鹿児島県鹿児島市鴨池新町10-1	鹿児島県の中世城館跡	発行年月日 1987年

調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
中世	不明	不明

出土量		資料の保管場所	
-----	--	---------	--



第47図 諸鈍城跡位置図



141 諸鈍城跡遠景



142 諸鈍城跡調査風景(ファームテ)



143 諸鈍城跡調査風景



144 諸鈍城跡調査風景

諸鈍集落

フリガナ 遺跡名	ショドンクリ 諸鈍クリ			図面 写真	第48図 145・146・147
遺跡番号 (通番)	87-16-0 (11380)	所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町諸鈍		
地形	砂丘	時代	中世・近世・近代		
備考	平成11年農政分布調査 小字名「練原」				

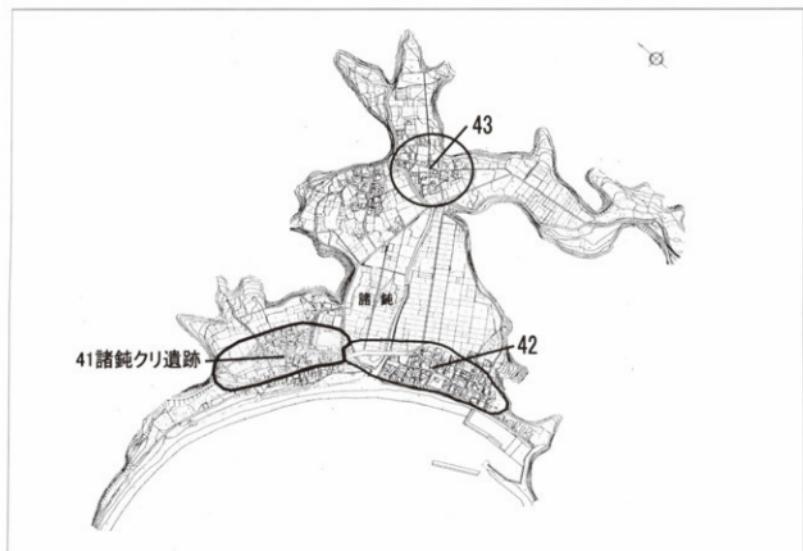
調査の記録

調査の種類	農政分布調査 表面採集調査		調査年月日	平成11年度 平成15年度・平成16年度	
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会			調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握			調査後の措置	現状保存
備考					
報告書	書名 (副書名)				
	編著者名			発行年月日	
	編集機関 (住所)				

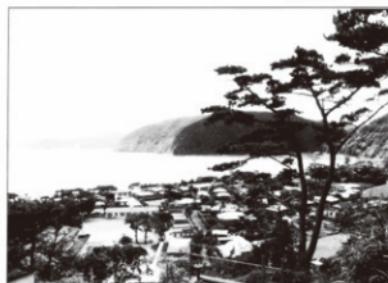
調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
中世 近世	不明	土器・陶器

出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
-----	-----	---------	--------------



第48図 諸鈍クリ遺跡位置図



145 諸鈍クリ遺跡遠景



146 諸鈍クリ遺跡遺物散布地(大屯神社)



147 諸鈍クリ遺跡採集資料

諸鈍集落

フリガナ 遺跡名	ショドンカネク 諸鈍カネク			図面 写真	第49図 148・149・150・151
遺跡番号 (通番)	87-17-0 (11381)	所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町諸鈍		
地形	砂丘	時代	中世・近世・近代		
備考	平成11年農政分布調査 小字名「金久原」				

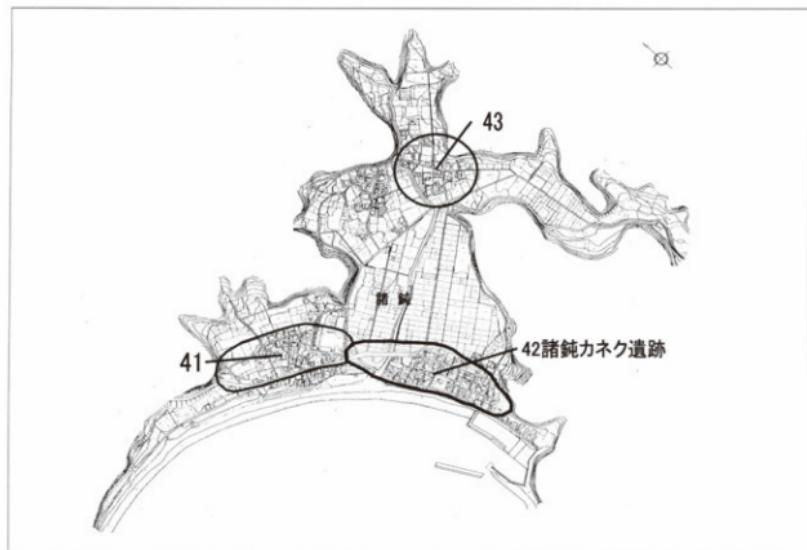
調査の記録

調査の種類	農政分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成11年度 平成15年度・平成16年度
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存
備考			
報告書	書名 (副書名)		
	編著者名		発行年月日
	編集機関 (住所)		

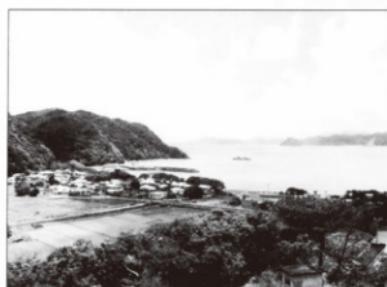
調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
中世		土器・類須恵器
近世	不明	青磁・陶器

出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
-----	-----	---------	--------------



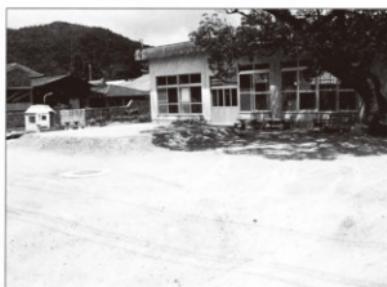
第49図 諸鈍力ネク遺跡位置図



148 諸鈍力ネク遺跡遠景



149 諸鈍力ネク遺跡遺物散布地(旧家林家)



150 諸鈍力ネク遺跡遺物散布地(ミヤー)



151 諸鈍力ネク遺跡採集資料

諸鈍集落

フリガナ 遺跡名	ショドンサト 諸鈍サト		図面 写真	第50図 152・153
遺跡番号 (通番)		所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町諸鈍	
地形	平地	時代	中世・近世・近代	
備考	小字名「里原」			

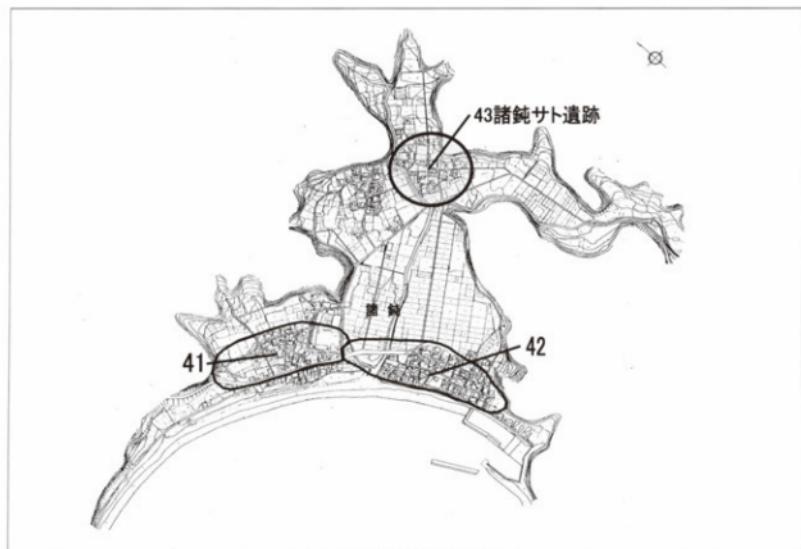
調査の記録

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査		調査年月日	平成15年度・平成16年度
調査機関	瀬戸内町教育委員会		調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握		調査後の措置	現状保存
備考				
報告書	書名 (副書名)			
	編著者名		発行年月日	
	編集機関 (住所)			

調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
中世		土器・類須恵器
近世	不明	青磁・染付・陶器 寛永通宝

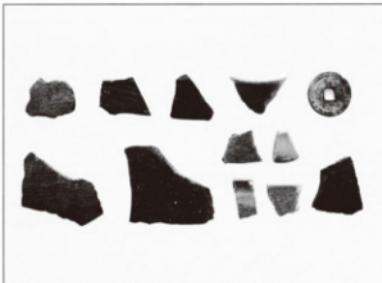
出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
-----	-----	---------	--------------



第50図 諸純サト遺跡位置図



152 諸純サト遺跡遺物散布地



153 諸純サト遺跡採集資料

野見山集落

フリガナ 遺跡名	ノミヤマオオサト 野見山オオサト			図面 写真	第51図 154・155・156
遺跡番号 (通番)		所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町野見山		
地形	平地	時代	中世・近世・近代		
備考					

調査の記録

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査		調査年月日	平成15年度・平成16年度	
調査機関	瀬戸内町教育委員会			調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握			調査後の措置	現状保存
備考	遺物の散布状況は、集落全体ではなく、公民館周辺に集中している。				
報告書	書名 (副書名)				
	編著者名			発行年月日	
	編集機関 (住所)				

調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
中世		滑石混入土器・類須恵器
近世	不明	青磁・染付・陶器
出土量	少 量	資料の保管場所 瀬戸内町立図書館・郷土館



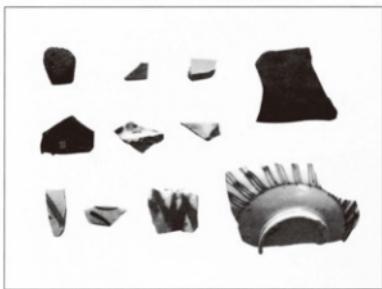
第51図 野見山オガサト遺跡位置図



154 野見山オガサト遺跡遠景



155 野見山オガサト遺跡遺物散布地



156 野見山オガサト遺跡採集資料

秋徳集落

フリガナ 遺跡名	アキトクシュウラク 秋徳集落		図面 写真	第52図 157・158
遺跡番号 (通番)			所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町秋徳
地形	砂丘	時代	中世・近世・近代	
備考				

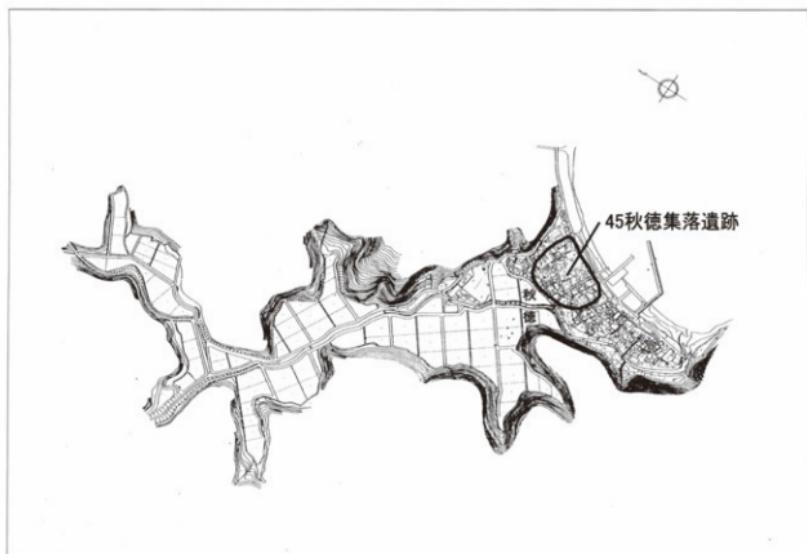
調査の記録

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成15年度・平成16年度
調査機関	瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存
備考	遺物の散布状況は、集落のある砂丘全体ではなく、公民館周辺に集中している。		
	骨製品が採集できた。		
報告書	書名 (副書名)		
	編著者名		発行年月日
	編集機関 (住所)		

調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
中世 近世	不明	青磁・陶器・骨製品

出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
-----	-----	---------	--------------



第52図 秋徳集落遺跡位置図



157 秋徳集落遺跡遺物散布地



158 秋徳集落遺跡採集資料

請阿室集落

フリガナ 遺跡名	ウケアムロシュウラク 請阿室集落			図面 写真	第53図 159・160・161・162
遺跡番号 (通番)		所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町請阿室		
地形	砂丘	時代	古代・中世・近世・近代		
備考					

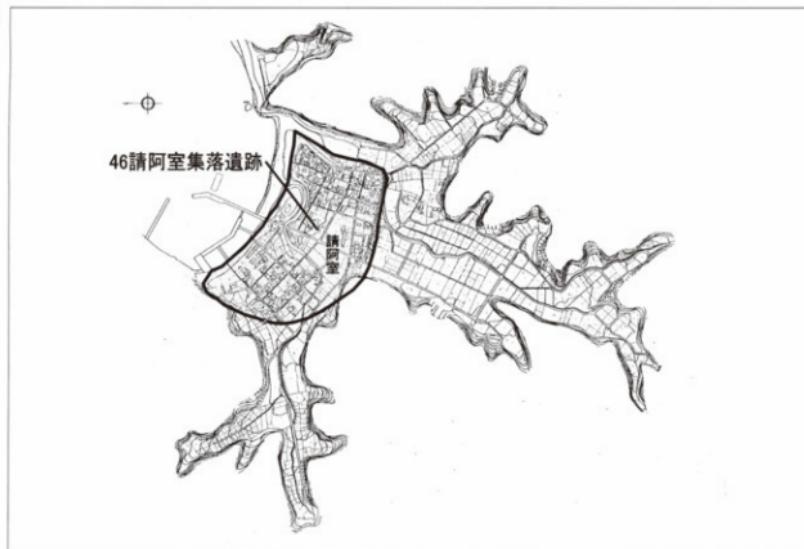
調査の記録

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成15年度・平成16年度	
調査機関	瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺	
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存	
備考	加工途中と考えられるゴホウラが採集できた。			
報告書	書名 (副書名)			
	編著者名		発行年月日	
	編集機関 (住所)			

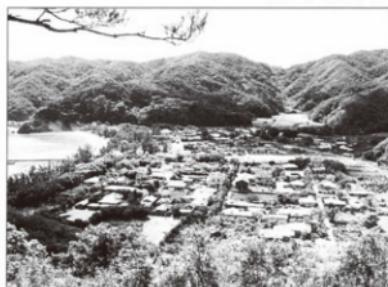
調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
古代		兼久式土器・類須恵器・
中世	不明	青磁・染付・
近世		陶器・ゴホウラ貝殻

出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
-----	-----	---------	--------------



第53図 請阿室集落遺跡位置図



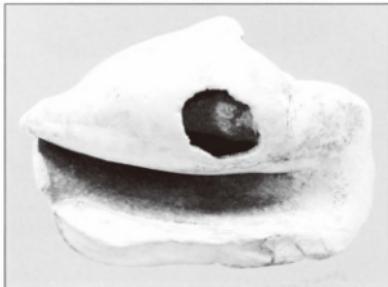
159 請阿室集落遺跡遠景



160 請阿室集落遺跡遺物散布地



161 請阿室集落遺跡採集資料



162 請阿室集落遺跡採集資料(ゴホウラ)

池地集落

フリガナ 遺跡名	イケジアガンマ 池地アガンマ			図面 写真	第54回 163・164・165・ 166・167・168
遺跡番号 (通番)	87-18-0 (11382)	所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町池地		
地形	砂丘	時代	古代・中世・近世・近代		
備考	平成11年農政分布調査 小字名「アカンマ」				

調査の記録

調査の種類	農政分布調査 表面採集調査	調査年月日	平成11年度 平成15年度・平成16年度
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会	調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握	調査後の措置	現状保存
備考	加工途中と考えられるゴホウラが採集できた。		
報告書	書名 (副書名)		
	編著者名	発行年月日	
	編集機関 (住所)		

調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
中世		土器・布目压痕土器
近世	不明	類須恵器・青磁・白磁・染付・陶器・ゴホウラ貝殻

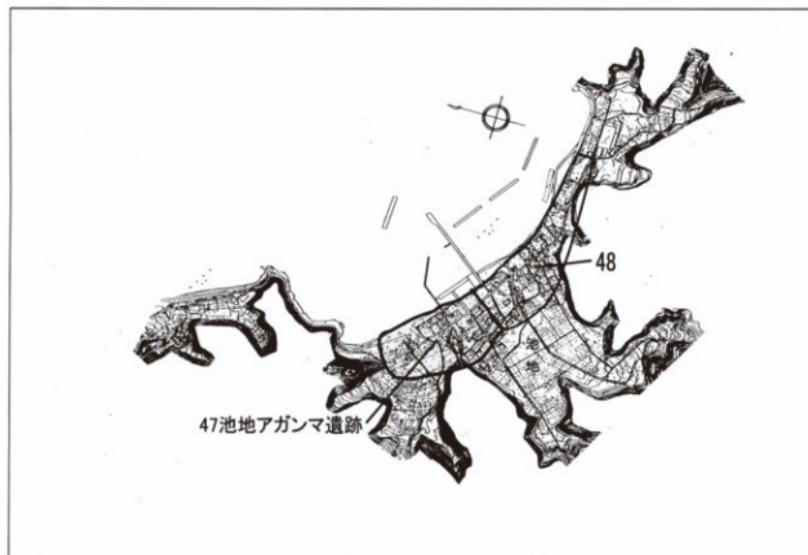
出土量 少量 資料の保管場所 瀬戸内町立図書館・郷土館



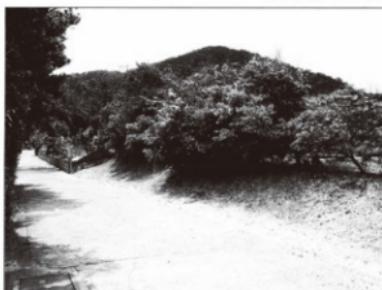
163 琉球大学地学巡検(チャート露出地点)



164 文化財保護審議会大山調査風景



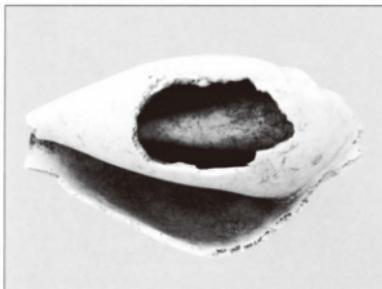
第54図 池地アガンマ遺跡位置図



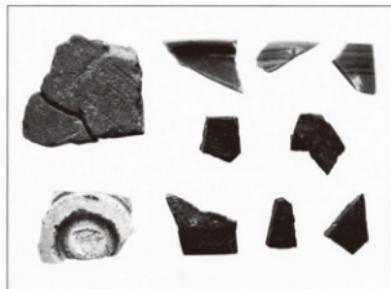
165 池地アガンマ遺跡遺物散布地



166 池地集落伝世品(郷土館所蔵)



167 池地アガンマ遺跡採集資料(ゴホウラ)



168 池地アガンマ遺跡採集資料

池地集落

フリガナ 遺跡名	イケジオーコーバリ 池地オーコーバリ			図面 写真	第55図 169・170・171
遺跡番号 (通番)	87-19-0 (11383)	所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町池地		
地形	砂丘	時代	中世・近世・近代		
備考	平成11年農政分布調査 小字名「オコバリ」				

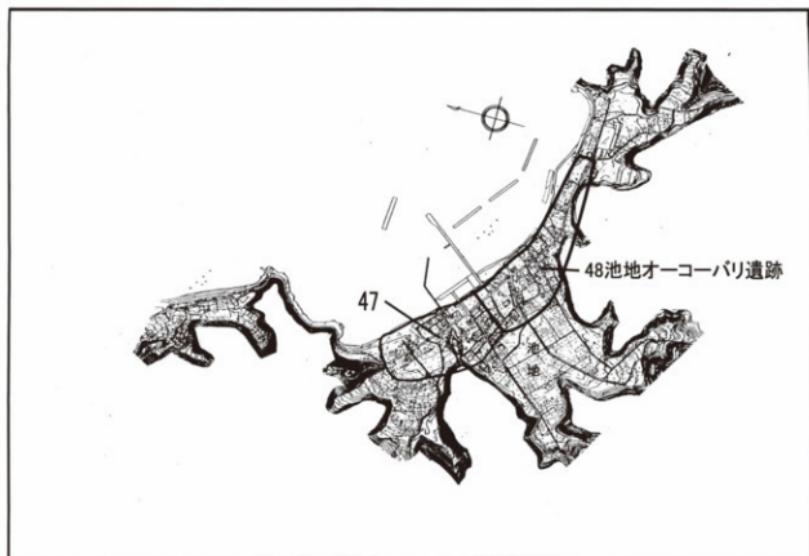
調査の記録

調査の種類	農政分布調査 表面採集調査		調査年月日	平成11年度 平成15年度・平成16年度				
調査機関	鹿児島県教育委員会・瀬戸内町教育委員会			調査面積	集落とその周辺			
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握			調査後の措置	現状保存			
備考								
報告書								
報告書	書名 (副書名)							
	編著者名			発行年月日				
	編集機関 (住所)							

調査結果

主な時代	主な遺構	主な遺物
中世		
近世	不明	土器・染付・陶器

出土量	少 量	資料の保管場所	瀬戸内町立図書館・郷土館
-----	-----	---------	--------------



第55図 池地オーコーバリ遺跡位置図



169 池地オーコーバリ遺跡遺物散布地



170 池地オーコーバリ遺跡遺物散布地



171 池地オーコーバリ遺跡採集資料

与路集落

フリガナ 遺跡名	ヨロシュウラク 与路集落			図面 写真	第55回 172・173・174・175・176
遺跡番号 (通番)		所在地	鹿児島県大島郡瀬戸内町与路		
地形	砂丘	時代	古代・中世・近世・近代		
備考	『奄美博物館展示図録』 『与路島誌ふるさとの今昔』				

調査の記録

調査の種類	瀬戸内町遺跡詳細分布調査 表面採集調査			調査年月日	平成15年度・平成16年度
調査機関	瀬戸内町教育委員会			調査面積	集落とその周辺
調査起因	埋蔵文化財包蔵地の把握			調査後の措置	現状保存
備考	加工途中と考えられるゴホウラが採集できた。				
報告書	書名 (副書名)				
	編著者名			発行年月日	
	編集機関 (住所)				

調査結果

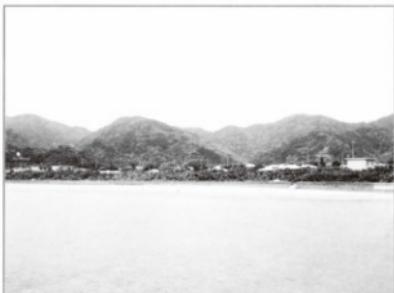
主な時代	主な遺構	主な遺物
中世		スセン當式土器・兼久式土器・
近世	不明	類須恵器・青磁・白磁・掲袖陶器・ 青花・薩摩焼・壺屋焼・ゴホウラ貝殻

出土量

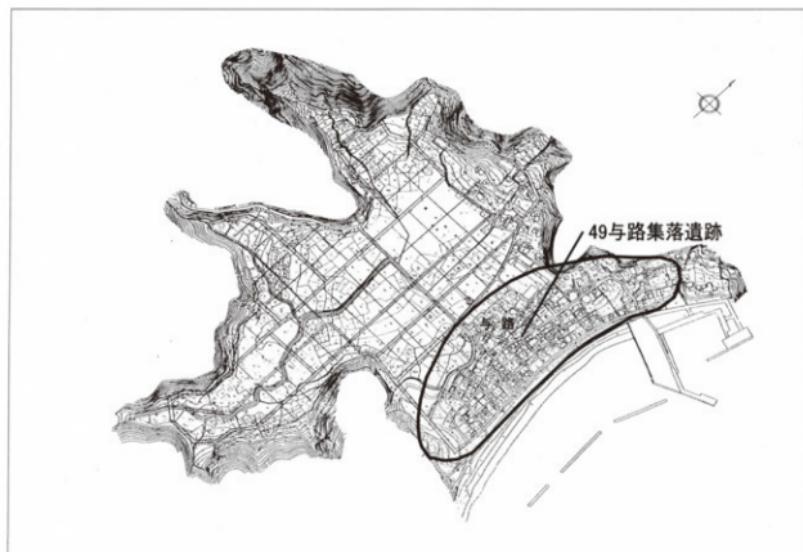
少 量

資料の保管場所

瀬戸内町立図書館・郷土館



172 与路集落遺跡遠景



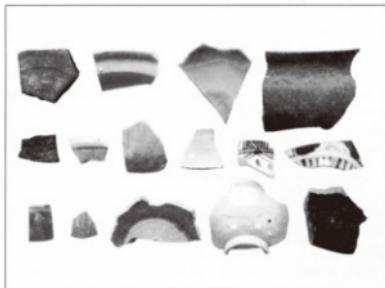
第56図 与路集落遺跡位置図



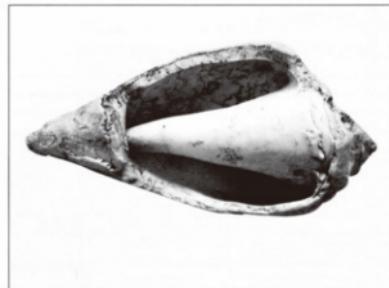
173 与路集落遺跡遺物散布地



174 与路集落遺跡採集資料



175 与路集落遺跡採集資料



176 与路集落遺跡採集資料(ゴホウラ)

第6節 既刊文献より作成した軍事施設・配備部隊一覧

表2 既刊文献より作成した軍事施設・配備部隊一覧表

古仁屋地区

所在集落	所在地詳細	部隊	施設	備考	文献初出年	典拠
阿木名		曉部隊(陸軍)		糧秣倉庫管理ほか	昭和20年度	①
阿木名		防衛隊(現地召集)		各部隊に配属・陣地構築ほか	昭和20年度	①
阿木名		海軍防備隊				⑩
阿木名		海軍航空隊基地阿木名派遣隊				⑩
阿木名		第2740部隊(40部隊)				⑩
阿木名		独立混成第22連隊第3大隊	田村隊			⑩
阿木名			隠蔽壕		昭和19年度	①
阿木名	海岸線一帯		対戦車壕陣地		昭和19年度	①⑩
阿木名			糧秣倉庫	海軍部隊非常用	昭和19年度	①
阿木名	海岸・山腹		迎撃陣地	将兵約100名	昭和20年度	①
阿木名	後方山頂		複郭陣地	陸・海・空最後の砦として構築	昭和20年度	①
阿木名			機銃陣地			⑩
阿木名			砲台			⑩
阿木名	集落から1時間ほどの中山中		無線基地			⑪
阿丹花崎			見張所	海軍所属	昭和19年度	①⑩⑭
阿丹花崎			機銃陣地			⑩
阿鉄		海上挺進基地第11大隊の一部		隊長石川芳春陸軍少尉以下47名	昭和20年3月15日配備	①②⑤⑪
阿鉄		海上挺進基地第29大隊の一部		球第15066部隊・隊長卓野義雄陸軍中尉	昭和20年3月15日配備	①②⑤⑪
阿鉄		海上挺進第29戦隊		球第19768部隊・隊長山本久徳陸軍大尉・隊員88名・戦隊41名・整備隊47名)昭和20年10月26日に広島県宇品にて編成、昭和20年1月18日に宇宙により沖縄に向け出航、天候悪化により奄美大島へ寄航。沖縄への航行不能となつたため3月15日阿鉄に基地をおく、出撃待機のまま終戦。(典拠:⑨)	昭和20年3月15日配備	①②⑤⑪⑫
阿鉄		海上挺進第29戦隊第2中隊		中隊長重田正陸軍中尉以下41名・マルレ特攻艇40隻	昭和20年3月15日配備	①②⑤⑪
網野子	海岸一帯		迎撃散兵壕		昭和19年度	①
伊須		防衛隊(現地召集)		監視・連絡・陣地構築	昭和20年度	①
伊須			迎撃陣地	米軍の上陸への備え	昭和20年度	①
伊須	伊須湾奥、阿木名川上流		複郭陣地	須手配備の第951海軍基地航空隊古仁屋派遣隊が構築	昭和20年6月	⑤
伊須			カノン砲陣地			⑩
伊須			散兵壕			⑩
ウラソコ		軍用棧橋		皆津崎砲台陣地との連絡用	大正10年度	①
ウラソコ	海岸・山腹一帯		迎撃陣地	米軍上陸への備え	昭和20年度	①
皆津崎		奄美大島要塞重砲兵連隊第2大隊		隊長岩本陸軍少佐	大正10年度	①
皆津崎		奄美大島要塞重砲兵連隊第2大隊第6中隊		中隊長丸子正一陸軍中尉	昭和16年10月ごろ配備	①②
皆津崎		奄美大島要塞重砲兵連隊第4中隊		中隊長桑久保邦男陸軍大尉・野砲4門・昭和17年9月24日の奄美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備	昭和17年9月配備	①②⑤
皆津崎		海軍防備隊派遣隊		兵員約20名	昭和20年度	①
皆津崎		ウラソコ海軍電波探知機隊		約60名		⑩
皆津崎		要塞野砲隊		八木隊		⑩
皆津崎			皆津崎第1砲台	24cm榴弾砲4門	大正10年11月着工	①②⑤⑦
皆津崎			皆津崎第2砲台	15cmカノン砲4門・観測所・弾薬庫・繫船場・監守衛舎など(典拠:⑦・ただし「皆津崎砲台」の装置として)	大正10年11月着工	①②⑤⑦
皆津崎			弾薬庫	弾薬庫2箇所	大正10年度	①⑩
皆津崎			掩蓋式観測所	典拠:①では「監視所」、正式名称「掩蓋式観測所」(雅崎達男氏より億永茂二氏宛書簡による)	大正10年度	①
皆津崎			軍道		大正10年度	①⑩
皆津崎			兵舎		大正10年度	①⑩
皆津崎			砲台監守衛舎	木造1棟、陸軍曹長勤務	大正10年度	①
皆津崎			カノン砲陣地			⑩

若葉崎		官舎		(1)
若葉崎		機械陣地	約15名	(1)
若葉崎		探照灯		(1)
勝浦	山腹・山頂付近	迎撃陣地		昭和19年度 (1)
勝浦	海岸線一帯	対戦車塹		昭和19年度 (1)
勝浦	海岸線	散兵塹		(1)
高萩	海岸・山腹一帯	迎撃陣地	米軍上陸への備え	昭和20年度 (1)
高萩	鳥の峰山	陸軍対空監視隊	兵員約10名	昭和20年度 (1)
高萩		迎撃陣地		昭和20年度 (1)
高萩		散兵塹		昭和20年度 (1)
久慈津		海軍航空隊秘密基地	瑞雲水上爆撃機待機繫留	昭和19年度 (1)(2)(3)
久慈津		兵舎	搭乗待兵宿泊用	昭和19年度 (1)(3)
小名瀬		特攻艇繫留基地	阿蘇挺進第29戦隊所属艦約30隻	昭和20年度 (1)(3)
古仁屋		陸軍築城部奄美大島支部		大正5年10月開庁 (1)(5)
古仁屋	現古仁屋高校敷地	奄美大島要塞司令部	要塞司令官井上二一陸軍大佐	大正12年4月開庁 (1)(2)(4)(5) 昭和19年5月廃止 (1)(3)(4)
古仁屋		奄美大島要塞重砲兵連隊	西部第2740部隊、連隊長宮内隈輔陸軍大佐、2個大隊6個中隊の甲編成、現役兵と予備兵の混合部隊、総員約1400名(典撰之)・昭和19年5月15日に「重砲兵第6連隊」に改称	昭和16年9月編成 (2)(4)(5)(10) (4)
古仁屋		奄美大島要塞憲兵古仁屋分遣隊	隊長中條好憲兵少尉(典撰之)・志賀憲兵上等兵(典撰之)	昭和16年9月編成 (1)(2)(4)
古仁屋		軍令憲兵奄美派遣隊	要塞司令部内駐屯	昭和16年度 (1)
古仁屋		憲兵隊(勤令・軍令)		(1)
古仁屋	瀬久井	奄美大島要塞歩兵第19部隊	春田隊・約350名	昭和16年度 (1)(3)
古仁屋	瀬久井	奄美大島要塞歩兵第28中隊	西部第19部隊・中隊長東陸軍中尉(典撰之)・中隊長春田陸軍中尉以下120名(典撰之)	昭和16年9月編成 (1)(2)(4)
古仁屋		奄美大島要塞歩兵第119部隊	春田隊(約120名)	昭和16年度 (1)
古仁屋	大湊	奄美大島要塞無線通信隊		昭和16年度 (1)
古仁屋		奄美大島要塞通信隊		昭和16年5月 (4)
古仁屋		陸軍無線通信隊		(3)
古仁屋		陸軍無線有線通信隊		(1)
古仁屋		第32軍航空情報隊	隊長江頭千年陸軍少尉	昭和18年度 (1)
古仁屋		陸軍船舶部隊気象班	隊長谷口勝久陸軍中尉(曉部隊)	昭和18年度 (1)(3)
古仁屋		兵器廠船工兵第26連隊第3中隊1小隊(曉部隊)	球第16744部隊・隊長藤田直也陸軍少尉	昭和19年10月ごろ (1)(2)(3)
古仁屋		船舶忠勇隊(牧難隊)		昭和19年度 (1)(3)
古仁屋		大本營陸軍部特務隊第2特務班	隊長石井直行陸軍中尉	昭和19年度 (1)
古仁屋	キャンマ山	特設警備第222中隊	球第7077部隊・中隊長久保井米堂陸軍中尉・126名	昭和19年度 (1)(2)(3)
古仁屋		特設水上勤務第102中隊	球第8885部隊・中隊長田中良男陸軍中尉・736名	昭和19年度 (1)(3)
古仁屋		独立混成第22連隊第7中隊	球第7154部隊・隊長大石洋陸軍中尉	昭和19年10月ごろ (1)(2)
古仁屋		陸上勤務第71中隊	隊長閑仁太朗陸軍中尉	昭和19年度 (1)
古仁屋		重砲兵第6連隊	「奄美大島要塞重砲兵連隊」を改称・球2740部隊・連隊長宮内隈輔陸軍大佐(昭和19年7月より末松五郎陸軍中佐)・昭和19年3月に沖縄に第32軍(球軍)創設、奄美大島要塞各部隊もその下に編入される	昭和19年5月15日改称 (2)(5)
古仁屋		沖縄憲兵古仁屋分遣隊	10名	昭和20年8月 (2)(3)
古仁屋		船舶気象隊古仁屋班	谷口勝久陸軍中尉	昭和20年8月 (2)(5)
古仁屋		船舶通信独立第2大隊第2中隊第3小隊	小隊長嘉納大信陸軍少尉	昭和20年8月 (2)(3)
古仁屋		陸軍要塞電波警戒隊		(3)
古仁屋			軍用橋樋(大湊地先)	軍用物資・船舶繫留 大正12年度 (1)(3)
古仁屋			司令部専用船・鶴丸	砲台監視連絡船(鉄鋼船) 大正12年度 (1)
古仁屋	瀬久井		兵舎5棟(パラック)	医務室・衛生所・練兵場 昭和16年度 (1)
古仁屋	現古仁屋中学校		奄美大島陸軍病院	球第2782部隊・病院長永田一男軍医少佐 昭和16年9月編成 (2)(4)(3)
古仁屋			船舶砲兵团司令部の出張所	隊長花里博陸軍少尉 昭和19年度 (1)
古仁屋			第32軍野戦貨物廠古仁屋出張所	20名 昭和20年8月 (1)(2)(5)(3)
古仁屋			第32軍野戦兵器廠古仁屋出張所	20名 昭和20年8月 (1)(2)(5)(3)
古仁屋			第7野戦船舶廠古仁屋出張所	村田義一陸軍少尉・20名 昭和20年8月 (1)(5)(3)

古仁屋		第7船舶輸送司令部沖縄支部古仁屋出張所	筑瀬灘陸軍少尉・30名	昭和20年8月	②⑪
古仁屋		機銃砲台	海軍所属	昭和20年	⑩⑭
古仁屋 (高知山)	高射砲小隊		小隊長船間満蔵陸軍少尉	昭和16年10月ごろ配備	②④
古仁屋 (高知山)	重砲兵第6連隊本部		隊長末松五郎陸軍中佐・高知山を背に部隊本部、西側1kmに部隊無線班、東側500mに軍無線基地(典拠⑯)	昭和19年高地山へ移動	②⑩⑪
古仁屋 (高知山)	重砲兵第6連隊第3中隊		浜田光復大尉・38式野砲2門・重砲兵第6連隊の最終配備	昭和19年	②⑩
古仁屋 (高知山)	特設防衛通信隊		晴号班10名・有線班10名・無線班20名	昭和20年3月29日配属	⑯
古仁屋 (高知山)	独立混成第22連隊第7中隊		大石隊・220名(内現地召集兵約40名)		⑯
古仁屋 (高知山)		高射砲台	10cm高射砲2門(典拠②)迎撃陣地・監視所・軍道(典拠⑯)	昭和16年9月設置・昭和17年9月撤去	①②④⑤⑯
古仁屋 (高知山)		複郭陣地		昭和19年	②
古仁屋 (高知山)		機銃砲			⑯
古仁屋 (高知山)		機銃陣地			⑯
古仁屋 (高知山)		洞窟陣地			⑯
古仁屋 (高知山)		野砲陣地			⑯
清水	海岸・山腹一帯	迎撃陣地	米軍上陸への備え	昭和20年度	①
節子	陸軍球第2740部隊		捕見隊長以下約30名	昭和19年度	①⑩
節子	海岸・山腹一帯	迎撃陣地		昭和19年度	①
蘇刈	蘇刈部落裏側の山地	複郭陣地		昭和19年度	②
蘇刈	海岸・山腹一帯	迎撃陣地	米軍上陸への備え	昭和20年度	①
手安	南大島自動車学校裏山麓	陸軍彈薬庫	3基・附属建物数棟	昭和7年構築(典拠、現地案内板)	①②⑩
手安		衛兵所	瀬久井歩兵19部隊より派遣	昭和5年度	①⑩
手安		弾薬庫監視員官舎	要塞司令部より陸軍曹長駐在	昭和5年度	①
手安		工廠			⑩
手安		兵舎			⑩
手安 (須手)	第951海軍基地航空隊古仁屋派遣隊		隊長石川正海海軍航空大尉	昭和18年3月配置	①②⑤⑯
手安 (須手)	沖縄海軍航空隊古仁屋派遣隊			昭和19年4月設置	⑯
手安 (須手)	海軍大島防備隊分遣隊		漁相の海軍防備隊本部より派遣		⑯
手安 (須手)		海軍航空隊古仁屋基地		昭和15年建設	①⑨⑩⑪
手安 (須手)	下間崎ほか	対空機銃陣地	3ヶ所(典拠⑩)	昭和18年度	①⑩
手安 (須手)		防空壕	昭和19年の兵舎焼失後は兵舎として使用	昭和18年度	①
手安 (須手)		揚陸用滑走路	水上機引揚用	昭和18年度	①
手安 (須手)	伊須湧奥、同木名川上流	複郭陣地	第951海軍基地航空隊古仁屋派遣隊が移駐	昭和20年6月ごろ	⑤
手安 (須手)		水上偵察機			⑩
手安 (須手)		探照灯			⑩
油井	学校・集会場	防衛隊(現地召集)	60名	昭和18年度	①⑩
油井			隊長大石陸軍中尉・典拠⑯では「時部隊」	昭和18年度	①⑩
油井	油井岳2740部隊			昭和18年度	①⑩
油井		海軍爆撃機待機基地		昭和18年度	①⑩
油井	油井岳	高射砲台	兵舎・軍道・将兵駐屯	昭和18年度	①
木ノホシ		カノン砲台陣地	陸軍所属	昭和19年	②⑩
木ノホシ		迎撃陣地	敵の上陸への備え	昭和20年度	①
木ノホシ		散兵壕	敵の上陸への備え	昭和20年度	①
木ノホシ		機銃陣地			⑩

西方地区

所在集落	所在地詳細	部隊	施設	備考	文献初出年	典拠
久慈	久慈濱	軍港	明治初めごろから軍港扱い		①	
久慈	海岸(現存)	海軍給水タンク	煉瓦造り	明治44年度	①	
久慈		海軍燃料補給所	兵員約10名	明治44年度	①	
久慈		第44震洋隊	マル四特攻隊・隊長三木十郎海軍中尉・隊員180名・震洋艇約50隻	昭和20年3月配備	①②⑪	

備考	陸軍部隊一時駐屯	西古見の兵舎完成までの約1ヶ月間、約200名が民家や集会場に仮宿	昭和19年度	①②
菅純	海岸・山腹一帯	迎撃陣地	昭和20年度	①
志天	海岸・山腹一帯	迎撃陣地	昭和19年度	①
志天		特別攻撃隊海軍魚雷艇	約150名	②
吉志			約50名	②
吉志	山頂	高射砲台	陸軍所属・将校約45名	昭和19年度
吉志	山中	兵舎		②
番川	小学校	陸軍黒木隊	約1個小隊駐屯・小学校に宿泊	昭和17年度
番川		輸送艦船停泊地	陸・海軍共用	昭和17年度
番川		船舶避難港		②
西古見	奄美大島要塞重砲兵連隊第1大隊	大隊長前田一水陸軍少佐	昭和16年9月配備	①②(5)⑧
西古見	奄美大島要塞重砲兵連隊第1大隊第1中隊	中隊長原田種文陸軍中尉	昭和16年9月配備	①⑤⑧
西古見	奄美大島要塞重砲兵連隊第2中隊	中隊長喜友名朝光陸軍大尉・昭和17年9月25日の奄美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備	昭和17年9月配備	①②(5)
西古見	重砲兵第6連隊第2中隊	中隊長森木松次郎大尉・重砲兵第6連隊最終配備	昭和19年	②
西古見	浦底	陸軍・海軍駐屯	一般住民立ち入り禁止	①
西古見	奄美大島要塞重砲兵連隊派遣隊第4中隊1小隊	小川隊		②
西古見	要塞野砲隊迫撃砲隊	野砲		②
西古見	池堂	陸軍独立守備隊基地(陸軍要塞)	砲台は戦後破壊、弾薬庫・兵器庫は現在	大正8年着工・大正11年完成
西古見	西古見の西北にある高地	西古見第1砲台	28cm榴弾砲4門・弾薬庫・繁船櫓・堅守衛舎	大正10年9月着工
西古見	第1砲台の西方約3キロの崖鼻・弾薬庫は曾津高崎灯台の地続き	西古見第2砲台	15cmカノン砲4門・観測所・弾薬庫	大正10年9月着工
西古見		砲台監守衛舎	鉄筋コンクリート2棟ほか付属建物	大正10年度
西古見	池堂の旧陸軍兵舎跡から曾津高崎灯台のほうへ約2kmほどのぼった途中、舗装工事された道路の海側・マンガン山の上	掩蓋式観測所	典拠: ①⑤⑧では「監視所」、正式名称「掩蓋式観測所」(篠崎達男氏より徳永茂二氏宛書簡による)	大正12年度
西古見		軍用棧橋	鷹丸駆船・物資揚陸用	①
西古見	山麓3ヶ所現存	弾薬庫	兵器廠・地雷	大正12年度
西古見		探照灯		昭和16年度
西古見	車崎地区	38式野砲2門		昭和19年
西古見	西古見砲台近く	複郭陣地		昭和19年
西古見		92式水中聴音遠探機雷		昭和20年度
西古見		防潜網		昭和20年度
西古見	曾津高崎山頂	海軍電波探知機	灯台近くに兵舎があった。貯水タンク現存	①⑥⑧
西古見		官舎		②
西古見	陸軍要塞北側の山中・地元で「キュラヤマ」と呼んでいる山の中腹あたり	大尉塙・准尉塙	現存するが大尉塙の入口が埋まっている	⑥⑧
西古見	池堂の旧陸軍兵舎跡を戸倉山のほうへ約80mの左側、山手のほう	弾薬庫		⑥⑩
西古見		兵器廠		②
西古見		兵舎		②
西古見		砲台陣地		②
西古見	池堂	陸軍兵舎跡		⑥
西古見 曾津高崎		特設見張所	大島護衛部隊(海軍)所属・下士官3名・兵2名	昭和18年度
西古見 曾津高崎		特設防備衛所	海軍所属・将兵約20名・92式水中聴音遠探機雷・防潜網	昭和18年度
西古見 曾津高崎		海軍電波探知機		②

実久地区

所在集落	所在地詳細	部隊	施設	備考	文献初出年	典拠
阿多地	海岸・一帯・岬・山腹	海軍防備隊派遣隊		中村隊・得兵約50名	昭和19年度	①②
阿多地			迎撃陣地		昭和19年度	①
乙崎		宮本隊		下士官5名・兵45名	昭和18年度	①
乙崎		出口隊			昭和18年度	①
乙崎			機銃砲台	海軍所属	昭和18年度	①②④
乙崎			高射砲台		昭和18年度	①③
乙崎			見張所	海軍所属	昭和20年	①②④
進入	川村隊・木吉隊			下士官5名・兵49名	昭和19年度	①
進入			仮兵舎	茅葺	昭和19年度	①
進入			探照灯台	海軍所属	昭和19年度	①
進入			平射砲台	海軍所属	昭和19年度	①②④
進入	海岸・山腹一帯		迎撃陣地		昭和19年度	①
木慈		陸軍監視隊				④
木慈			海軍採石場	施設構築用材として珪岩を採石	昭和17年度	①
実久		奄美大島要塞重砲兵連隊第1大隊第2中隊		中隊長黒葛清治陸軍中尉	昭和16年10月ごろ配備	①②⑤
実久		奄美大島要塞重砲兵連隊第1中隊		中隊長黒葛清次陸軍大尉・昭和17年9月25日の奄美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備	昭和17年9月配備	①②⑤
実久		重砲兵第6連隊第1中隊		黒葛清次大尉・重砲兵第6連隊最終配備	昭和19年	②
実久		照空隊		海軍所属	昭和20年	④
実久		第1大隊		大隊長前田一水陸軍少佐		①
実久		第3中隊				①
実久			実久砲台	15cmカノン砲4門・観測所・繫船場・弾薬庫・看守衛舎など	大正10年8月着工	①②⑤
実久	山頂		弾薬庫	2ヶ所	大正10年度	①
実久			砲台監守衛舎	鉄筋コンクリート造り・陸軍下士官常時駐在	大正10年度	①
実久			要塞砲・カノン砲	第2中隊の装備・要塞砲2門・カノン砲2門	大正10年度	①
実久			陸軍軍用桟橋	司令部所属船丸丸他軍用艦艇用	大正10年度	①
実久			探照灯台	2台・海軍防備隊派遣隊・加治曹長他26名	昭和18年度	①
実久	実久砲台の固定砲の近く		複郭陣地		昭和19年構築	②
実久			軍用道路	軍用桟橋から山頂砲台まで		①
実久 (江仁屋離)		対潜防備隊		実久電波探知機	昭和18年度	①
実久 (江仁屋離)		海軍防備隊派遣隊		大森隊・水中聽音機・92式水中聽音遠探機雷・防潜網	昭和19年度	①②
実久 (江仁屋離)			江仁屋離砲台	7cmカノン砲2門・観測所・監守衛舎(典拠:8)15cmカノン砲4門・典拠(1)兵舎・弾薬庫・軍用桟橋(典拠:10)昭和19年撤去(典拠:2)	大正10年10月着工・	①②⑤⑧
実久 (江仁屋離)			防備衛所	得兵約20名	大正11年度	①②③
実久 (江仁屋離)			高角砲台	石井大尉他約40名・平射砲台兵員15名	昭和17年度	①
実久 (江仁屋離)			高射砲台	橋本少尉他約30名	昭和17年度	①③④⑧⑨
実久 (江仁屋離)			弾薬庫		昭和17年度	①
薩川		防衛隊(現地召集)			昭和19年度	①
薩川			軍港	南進基地・艦隊泊地指定	明治41年度	①②
薩川	後方山頂		迫撃砲陣地		昭和18年度	①
芝		防衛隊(監視隊)(現地召集)			昭和19年度	①
芝	海岸線一帯		迎撃陣地		昭和19年度	①
芝			高射砲陣地	武田隊構築		④
須子茂		迫撃砲小隊				③
須子茂			平射砲台	海軍防備隊派遣隊・中村兵曹長他約32名駐屯	昭和19年度	①③④⑧
須子茂			迎撃陣地	渡辺曹長他約47名	昭和19年度	①
須子茂			探照灯台		昭和19年度	①
須子茂	海岸・道路		(地雷敷設)		昭和19年度	①

名子茂		兵舎	4棟	特
栗相	大島根撃地隊		大島防備隊・海軍通信隊	昭和16年9月編成、昭和17年1月廃止 ①
栗相	大島防備隊		司令谷口秀志海軍大佐、昭和20年4月15日に「大島方面隊」に改称	昭和16年 ①②⑤⑩⑪
栗相	海軍通信隊		迫撃砲台・高射砲台・平射砲台	昭和16年 ①②③④
栗相	近藤部隊・飯島隊・西原隊・中目隊ほか			昭和16年度 ①
栗相	照空隊			昭和16年度 ①
栗相	第17号大島輸送隊			昭和16年度 ①
栗相	大島附近防備部隊			昭和17年1月 ⑥
栗相	大島方面隊		「大島防備隊」を改称・司令長官加藤唯男海軍少将	昭和20年4月15日 ⑤⑪
栗相	大島護衛部隊	大島護衛部隊本部		昭和20年4月 ⑬
栗相	迫撃砲小隊			③
栗相		海軍病院		昭和16年度 ①
栗相		艦船用給水ダム		昭和16年度 ①
栗相		艦艇	駆逐艦5船・掃海艇・監視艇・敷設艇	昭和16年度 ①
栗相		機銃砲台	7基・照空隊の装備	昭和16年度 ①⑩
栗相		高角砲台	照空隊の装備	昭和16年度 ①
栗相		壕内指揮所・見張所	海軍佐藤參謀	昭和16年度 ①
栗相		防備衛所		昭和16年度 ①
栗相		兵舎		昭和16年度 ①
栗相		見張所		昭和20年 ⑭
栗相		海軍防空見張所		特
栗相		高射砲台	海軍所属	昭和20年 ③⑩⑪⑯
西阿室	海軍機銃砲隊		宮本隊・櫻橋葉・地雷敷設	昭和19年度 ①⑩
西阿室	海軍防備隊派遣隊高射砲隊		米田海軍少尉他約48名	昭和19年度 ①⑩
西阿室	機雷敷設隊		瀬相の海軍防備隊本部より派遣	昭和19年度 ①
西阿室	迫撃砲小隊			③
西阿室	海岸・山腹一帯	迎撃陣地		昭和19年度 ①
西阿室	山頂	高角砲台		昭和19年度 ①
西阿室	ワキン丘の上	対空機関砲台		昭和19年度 ①
西阿室	海岸道路一帯	(地雷敷設)		昭和19年度 ①
西阿室	山頂	機銃砲台		特
西阿室	西阿室港口	(機雷敷設)		特
俵		海軍防備隊(森山隊・石井隊・林隊)	瀬相の海軍防備隊本部より派遣	昭和19年度 ①⑩
俵		機銃砲台	海軍所属	昭和20年 ⑩⑯
俵		兵舎		⑩
俵		糧秣倉庫		⑩
平松山	横川部隊		横川海軍中尉・伊藤海軍兵曹長	昭和19年度 ①
平松山	海軍派遣隊			特
平松山		軍用桟橋	木造	昭和19年度 ①
平松山		高射砲台	海軍所属	昭和19年度 ①③⑩⑯
平松山		機銃陣地		特
平松山		防空見張所		特
三浦	海軍設営隊	海軍設営隊本部	将兵約60名	昭和16年度 ①⑩
三浦		艦船用給水ダム	サキバルの岸壁まで導水管敷設	昭和16年度 ①
三浦		高射砲台		昭和16年度 ①③
三浦		兵舎・微用工宿舎		昭和16年度 ①
三浦	第17震洋隊	震洋艇格納塙	總員185名(士官7名・本部員13名・搭乗員50名・整備隊員43名・基地隊員72名・震洋艇(一型)53隻)(典拵付)	昭和19年11月21日 ①②⑤⑩
三浦		燃料備蓄補給基地		昭和20年度 ①

鎮西地区

所在集落	所在地詳細	部隊	施設	備考	文献初出年	典拠
秋德	海岸・山腹・山頂一帯		迎撃陣地		昭和18年度 ①	
秋德	海岸・山腹・山頂一帯		複郭陣地		昭和18年度 ①	
秋德 (サキニ)	海軍防備隊秋徳派遣隊		將兵約50名駐屯・典拵付で海軍對潜監視隊	昭和18年度 ①⑩		
秋徳 (サキニ)	防備隊(現地召集)		現地部隊に編入	昭和18年度 ①		
秋徳 (サキニ)		平射砲台	海軍所属	昭和20年 ③⑩		
池地	防衛隊(現地召集)		請阿室部隊・道路に地雷敷設	昭和19年度 ①⑩		
池地	道路	(地雷敷設)		昭和19年度 ①		
伊予茂	海軍防備隊派遣隊		約60名			

伊予茂		迎撃陣地	昭和19年度	①
伊予茂	伊予茂港入口	(機雷敷設)	⑩	
詣阿室	海上監視隊		海軍防備隊派遣隊秋度対潜監視隊より、3名派遣・交代勤務	昭和19年度 ①
詣阿室	防衛隊(現地召集)		監視隊に編入、敵潜監視	昭和19年度 ①
詣阿室	道路	(地雷敷設)		昭和19年度 ①
於齊	海軍派遣工作隊		漁船-於齊間トンネル建設・約20名	昭和19年度 ①
於齊	機雷敷設隊		海軍派遣隊約20名	昭和19年度 ①
於齊	迫撃砲小隊			昭和19年度 ①
於齊	海岸線一帯	対戦車壕		昭和19年度 ①
於齊		(地雷敷設)		昭和19年度 ①
勝能		高射砲陣地	海軍所属・将兵約50名	昭和19年度 ①
花富	海軍防備隊派遣隊		約3個分隊・將兵約60名	昭和19年度 ①
花富	伊予茂小学校	防衛隊(現地召集)	伊予茂小学校、民家に宿泊	昭和19年度 ①
花富		迎撃陣地	米軍上陸への備え	昭和19年度 ①
佐知克		迎撃陣地		昭和19年度 ①
佐知克	海岸・岬一帯	敵兵壕		昭和19年度 ①
佐知克		対戦車壕		昭和19年度 ①
諸数 (久居)	海軍通信隊			昭和19年度 ①
諸数 (久居)		機銃陣地	海軍所属	⑩
諸純	軍用道路構築派遣隊		陸軍2719部隊より派遣	昭和17年度 ①
諸純	諸純清機雷敷設隊	(機雷敷設)	海軍将兵約20名	昭和19年度 ①
諸純	防衛隊(現地召集)		現地部隊に編入	昭和19年度 ①
諸純	海軍防備隊派遣隊第4中隊		小口隊	⑩
諸純	迫撃砲小隊			③
諸純	陸軍部隊派遣隊第3中隊		宮原隊・約40名	⑩
諸純		陸軍野砲砲台陣地	陸軍2740部隊より派遣	昭和17年度 ①
諸純	海岸・山腹	迎撃陣地		昭和18年度 ①
諸純		迫撃砲陣地	隊長山下海軍兵曹長他48名	昭和18年度 ①
諸純	海岸・山腹	複郭陣地		昭和18年度 ①
諸純 (徳浜)	奄美大島要塞重砲兵連隊第2大隊第5中隊		中隊長小口敏之陸軍中尉	昭和16年10月ごろ 配備 ①②⑤
諸純 (徳浜)	要塞重砲兵連隊			昭和18年度 ①
諸純 (徳浜)	要塞野砲隊派遣隊	砲台・兵舎		⑩
諸純 (徳浜)	海岸・山腹一帯	迎撃陣地		昭和19年度 ①
諸純 (徳浜)	海岸・山腹一帯	複郭陣地		昭和19年度 ①
勢里	海岸・岬一帯	敵兵壕		昭和19年度 ①
渡連		軍馬撫陸休養地		⑩
渡連 (安那場)	奄美大島要塞重砲兵連隊第2大隊		大隊長岩本儀助陸軍少佐	昭和16年10月ごろ 配備 ①②⑤
渡連 (安那場)	奄美大島要塞重砲兵連隊第2大隊第4中隊		中隊長浜田光保陸軍中尉	昭和16年10月ごろ 配備 ①②⑤
渡連 (安那場)	奄美大島要塞重砲兵連隊第3中隊		中隊長浜田光保陸軍中尉・昭和17年9月25日の奄美大島要塞重砲兵連隊の部隊縮小後の配備	昭和17年9月配備 ②⑤
渡連 (安那場)	海軍防備隊派遣隊			⑩
渡連 (安那場)	要塞重砲兵連隊大隊本部派遣隊		官舎・兵舎・弾薬庫・観測所・探照灯・陸軍特設見張所・カノン砲・機関砲砲台	⑩
渡連 (安那場)		安脚場砲台	15cmカノン砲4門・観測所・艦船場・弾薬庫・看守衛舍など(典擧7)	大正10年7月着工・昭和19年撤去 ①②⑤⑦
渡連 (安那場)		砲台監守衛舍	陸軍下士官が常時駐在	大正10年度 ①
渡連 (安那場)		弾薬庫	要塞重砲兵第4中隊の装備・弾薬庫2箇所	大正9年ごろ設置 (典擧・現地室内 ①)
渡連 (安那場)		貯水池	要塞重砲兵第4中隊の装備・貯水池3箇所	昭和16年度 ①
渡連 (安那場)		掩蓋式観測所	要塞重砲兵第4中隊の装備・典擧①では「監視所」、正式名称「掩蓋式観測所」(森崎達男氏より德永茂二氏宛書簡による)	昭和16年度 ①
渡連 (安那場)		海軍電波探知器		⑩
渡連 (安那場)		探照灯		⑩
渡連 (カネンチ崎)	機雷敷設隊		92式機雷・水中聽音機・監視所	昭和19年度 ①

鹿屋 ガトナ島		海軍特設防備衛所	大島護衛部隊(海軍)所属・海軍有賀少尉他約23名・聽音器3基・92機雷8群	昭和16年構築(典拠・現地案内板)	①③⑩⑭
鹿屋 ガトナ島		平射砲台	海軍所属・海軍後藤少尉他約78名	昭和17年度	①③⑩⑭
鹿屋 ガトナ島		探照灯台		昭和19年度	①
鹿屋 ガトナ島	海軍防備隊派遣隊		隊長斎藤海軍中尉・約70名	昭和18年度	①⑩
鹿屋 ガトナ島		高射砲台	海軍所属	昭和18年度	①③⑩⑯
鹿屋 ガトナ島	渡連山頂	対空高角砲陣地	海軍所属	昭和19年度	①⑩
鹿屋 ガトナ島		探照灯台	海軍高木少尉	昭和19年度	①⑩
鹿屋 ガトナ島		兵舎	2棟・将校2名・下士官16名・兵88名	昭和19年度	①
呑之浦	第18震洋隊		隊長島尾敏雄海軍中尉・隊員183名・震洋艦52隻	昭和19年11月21日 配備	①②⑤⑩
呑之浦		震洋艦格納塁	○四艦52隻・両岸に塁12	昭和19年度	①⑩
呑之浦		兵舎・練兵場		昭和19年度	①⑩
野見山	海軍防備隊野見山派遣隊		約17名・兵舎・車道・待兵駐屯7名	昭和18年度	①⑩
野見山	防衛隊(現地召集)		部隊に編入・陣地構築	昭和18年度	①
野見山		迎撃陣地		昭和18年度	①
野見山		掩郭陣地		昭和18年度	①
与路	海軍奄美大島防備隊		瀬組の海軍防備隊本部より派遣	昭和19年度	①
与路	海軍与路島派遣隊		下士官7名・兵48名	昭和19年度	①
与路	防衛隊(現地召集)			昭和19年度	①⑩
与路	海軍防備隊派遣隊砲隊		上前田隊	⑩	
与路	照空隊		奥隊	⑩	
与路		探照灯台	隊長上前田兵曹長・松崎兵曹長	昭和19年度	①⑩
与路		弾薬庫		昭和19年度	①⑩
与路		発電所		昭和19年度	①⑩
与路		兵舎	3棟	昭和19年度	①
与路		平射砲台	海軍所属	昭和19年度	①②⑤⑩⑯

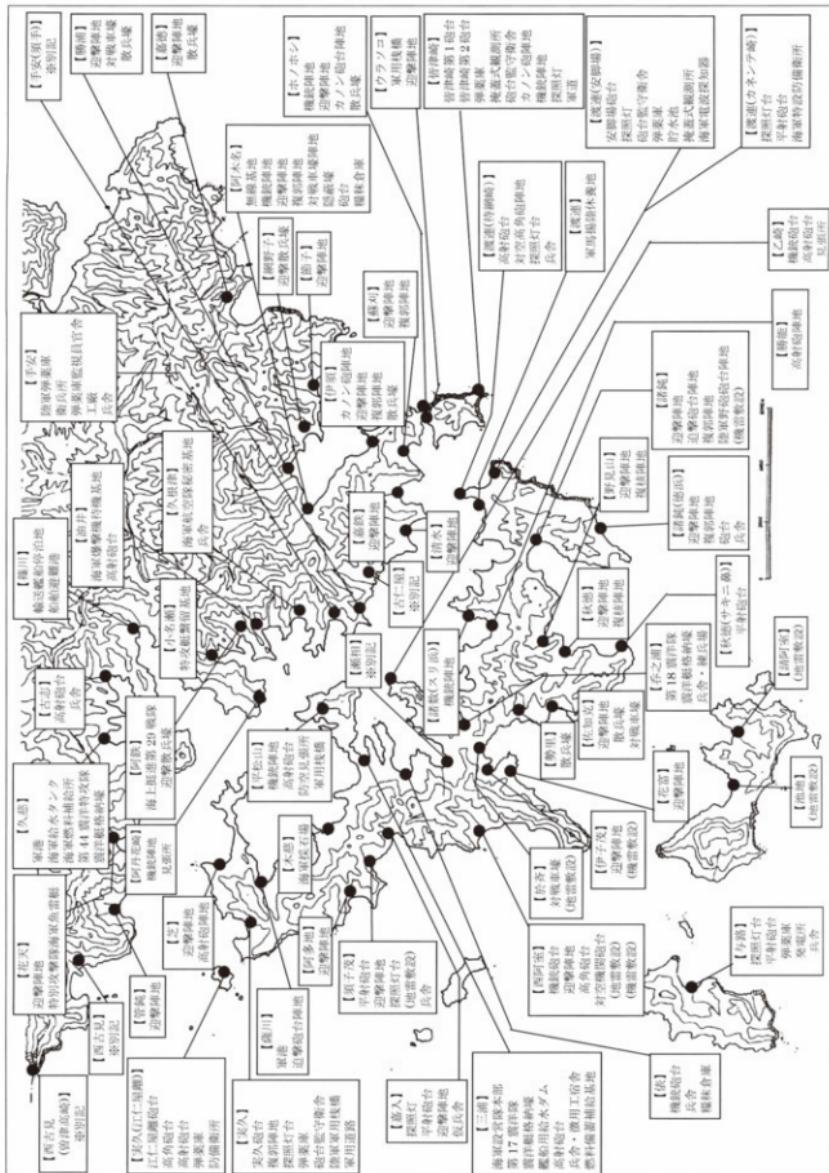
奄美大島の他地域に配備された部隊

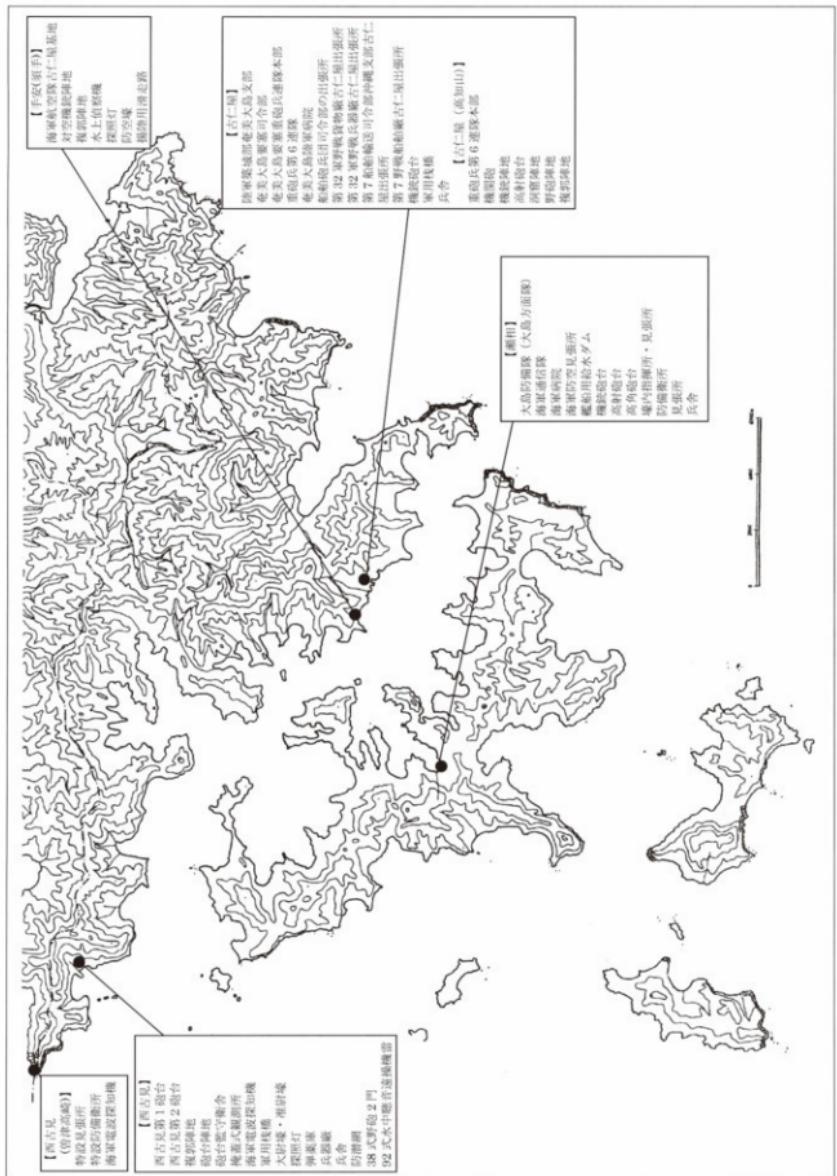
所在集落	所在地詳細	部隊	施設	備考	文献初出年	典拠
宇都村屋純	奄美大島要塞重砲兵連隊第1大隊第3中隊		中隊長栗山陸軍中尉	昭和16年10月ころ 配備	(2)(5)	
宇都村屋純		38式野砲4門		昭和16年・昭和17年5月撤去	(5)	
	第32家航空情報隊第2電波警戒隊		球第19564部隊・隊長江頭干年陸軍少尉・30名	昭和20年8月	(2)(1)	
	電信第36連隊無線小隊の1個分隊			昭和20年8月	(2)	
笠利町	特設警備第220中隊		球第7075部隊・中隊長原田義夫陸軍中尉	昭和20年8月	(2)(1)	
名瀬市	特設警備第221中隊		球第7076部隊・中隊長黒木安見陸軍大尉	昭和20年8月	(2)(1)	

表作成 河津 梨絵

[注]典拠欄の記号は以下の文献を示している。

- ① 堀崎一『大島海峡周辺における軍事施設及び装備概況(戦争記録)』(1995)
- ② 堀崎達男『大東亜戦争中、奄美大島に於ける陸海軍の戦備と戦いの記録』(1998)
- ③ 『大東亜戦争中、奄美大島に於ける陸海軍の戦備と戦いの記録』巻末収録資料
- ④ 堀崎達男『奄美大島要塞について』(『しまがたれ』第9号 しまがたれ同好会 2000)
- ⑤ 堀崎達男『大東亜戦争中における奄美守備隊の回顧』(『しまがたれ』第7号 しまがたれ同好会 1999)
- ⑥ 『平成八年 西方地区現地調査報告書~西古見・管鈍・花天~』瀬戸内町文化財保護審議会(1996)
- ⑦ 淨法寺朝美『日本染城史』原書房(1971)
- ⑧ 西古見慰靈碑建立実行委員会『西古見集落誌』西古見慰靈碑建立実行委員会(1994)
- ⑨ 『平成9年度 文化財会報』瀬戸内町文化財保護審議会(1998)
- ⑩ 『瀬戸内町内における旧陸・海・空の軍事施設及び部隊の駐屯並に空襲被害概要』(星崎一編『わが町の戦中戦後を語る』瀬戸内町中央公民館 1989)
- ⑪ 梶山瑞雲『瑞雲飛翔 第六三四海軍航空隊水爆瑞雲隊・戦闘記録・私記』(2002)
- ⑫ 木俣滋郎『日本特攻艇戦史 震洋・四式肉薄攻撃艇の開発と歴史』光人社(1998)
- ⑬ 特設防衛通信隊記念誌新版下編集委員会『記録のない過去 特設防衛通信隊記念誌』特設防衛通信隊記念誌頒布委員会(2000)
- ⑭ 防衛庁防衛研究所戦史室『沖縄方面海軍作戦』朝雲新聞社(1968)
- ⑮ 防衛庁防衛研究所戦史室『沖縄方面陸軍作戦』朝雲新聞社(1968)





第58図 瀬戸内町戦跡分布図（分記図）

第5章 考 察

第1節 遺物散布地の民俗空間

町 健次郎

一、はじめに

奄美大島南部に位置する瀬戸内町の森林山地面積は全体の約87%を占め、概して、人々が暮らす56集落は砂丘地を含む扇状地状の平野部に立地している。

平成15年度～16年度にかけて実施された瀬戸内町埋蔵文化財の表採調査では、遺物がほぼ全ての集落で採集され、しかも民家が密集する現在の居住域から多く見つかっていることは、通史としてのシマの歩みを空間にとらえようとした場合、ここに重層的で密な居住空間の存在を指摘することができよう。

本稿では、その居住空間の時代的連続性が有機的に説明されていくための、今後の研究進展の一助として、ある法則性をもって遺物が表採された空間について、これまでの民俗研究の見解を元に言及をすすめてみることにしたい。まず、瀬戸内町域に現在も残っている祭祀空間の概観にふれたのち、遺物散布地との関係性について若干の考察を加えてみることにしたい。

二、瀬戸内町域の民俗空間

集落を意味する民俗語彙である「シマ」は、日常、今も生きている言葉である。シマ内部の空間は民家が棟を密集させている中にも、道や川を境界にしていくつかの区画がなされている。

区画名には、請阿室、池地、嘉鉄のように「ハン(班)」と呼んで浜下りなどの民俗行事の単位として機能しているレベルもあるが、その呼称は比較的新しいとみられ、「アガリ(東)」、「イリ(西)」などの方位観をもとにしたものの他、中でも頻度が高いものとして「カネク(金久)」と「サト(里)」がそれ以前の区画呼称を示す語彙として多く認められ、それぞれ「ウイ・ウェ(上)」、「ナカ・ナハ(中)」、「シャー・シタ(下)」といった接頭語をつけて、再分化した区画名として存在している。

「カネク」・「サト」は共に琉球列島全般的に広がる地名語彙でもある。カネクは主に砂地をさし、海岸に接する砂丘地帯側に多く見受けられる。一方のサトは比較的に人家が集中する現在の居住区域に重なり、瀬戸内町域では「ミヤー」という広場を含んでいる場合が多くみられる。その位置は海岸に面している場合もあるが、加計呂麻島の諸鈍や伊子茂のように海から離れた山手内陸側である場合もある。

シマの空間デザインは、信仰生活の根幹を成してきたノロ祭祀の神観念が深くかかわっている。シマを背後で取り囲む山々は、いずれも農耕生産に関わる均一な山ではなく、立ち入りを禁じた聖域としての山が存在し、人々が通行する日常生活の他にも「カミミチ(神道)」が断片的に記憶されている。

ノロに関する定義的説明は筆者の手に余るが、少なくとも奄美諸島が琉球王国に属していた時代、ノロが役人層とともに王府から就任や役地給付を受けて王国の祭祀制度の中に組み込まれていたことは、16世紀初頭から17世紀初頭にかけての年代が確認される辞令書から知ることができる。ノロ祭祀組織は「親ノロ」を頂点として、成員全体は「神人衆(カミニンジュウ)」とよばれ、成員はそれぞれ神役として名を持っている。必ずしも全てのシマに共通しているわけではないが、「イガミ」、「スドウガミ」といった名が連なる。全て女性による成員構成である中に、唯一、男性で参加する役をグジとよぶ。

加計呂麻島では、海の彼方からカミを迎える祭りを「ウムケ(御迎)」、送りの祭りを「オーホリ(御送)

と/or、前者は旧暦2月、後者は旧暦4月に行なわれていた。いずれもトネヤでの祭りであり、浜まで出でてカミを送迎した。また、稻の祭りは「アシャゲ」を祭場として、旧暦6月の「アラホバナ(新穂花)」や旧暦七月の「ミナクチ(水口)」が行われた。祭りの対象となる作物は稻のみではなかった。栗の祭りとして「フーウンメ(栗折目)」が旧7月、「コーシャ(山芋)」や「ハヌス(甘薯)」の芋の祭りとして旧暦11月には「フュンメ」が行われた。

瀬戸内町域におけるノロ祭祀は、目撃談が一切なく早い時期に廃れたとみられるシマが多くある。シマによって衰退していく年代に差はあるが、近年まで継続していたものとしては、加計呂麻島の旧実久村域や与路島では昭和40年～平成の初め頃まで、請島では大正時代初め頃まで続いていた。大島側でも、西古見や管鈍をはじめとして年配者の幼少の記憶に祭祀の様子が残っているシマもある。そこでは本来の祭祀の構成員より縮小された形でほぼ個人単位に近い行わる方であったようである。

ノロ祭祀の残像は、関係した空間や地名などに語彙として今も断片的に残っているが、どのシマにも平均的に残っているわけではない。瀬戸内町内56集落のうち、特に須手・伊目・呑之浦・佐知克・勢里・知之浦・安脚場といったシマはその語彙に乏しい。これらのシマは耕地を求めて作場へ移住するなどして形成されたとみられ、その母体とみられるそれぞれのシマ(手安く須手)・久悲く伊目)・押角く呑之浦)・於斎く佐知克・勢里)・武名く知之浦)・渡連く安脚場)の管轄にあったとみられる。

加計呂麻島をはじめとする瀬戸内町域の民俗空間については、奄美諸島でもこの地域に比較的ノロ祭祀が存続していたこともあって、これまで多くの研究者が報告や論考を行ってきた。中でも祭祀が存続していた昭和30年代に調査した伊藤幹治・クライナー・ヨーゼフの報告と論文は重要な基礎資料となっている(注1)。また、調査に沿って民俗空間図もいくつか提出されてきたが、特に全域的網羅の試みが成されたものとしては高橋一郎と松原武実による報告があげられる(注2)。

紙面の都合上、瀬戸内町立郷土館調査による空間図は別の機会に示すこととして、ここではノロ祭祀にかかわる民俗空間関連語彙のいくつかを列挙し、若干の解説を加えておきたい。

(1) ミヤー

シマ空間の中心的広場をさす。比較的に人家集中地帯の内にあるので、はじめて訪れた集落でも、ある程度容易にみつけることができる。現在は公民館施設や土俵がある広場であることが多く、秋になると豊年祭の場となるほか、道が狭い集落内にあっては臨時の駐車スペースにもなる。また、子どもの遊び場のひとつでもあり、年配者の涼み場所、ゲートボールの練習場にもなる。世代を超えた共同利用広場が現在的ミヤー空間の機能であるとはいっても、シマ内の広場がすべてミヤーの呼称を持っているわけではない。あくまでも聖地性が伴った広場であることが条件である。



177 武名のミヤー

ミヤーは祭祀空間の中心地点であり、聖地性を持っている。加計呂麻島西部域のミヤーにはアシャゲが現存しているように、かつては大島南部域のミヤーにもアシャゲが建っていた。油井や花天などでは昭和30年代までそれが建っていたことが記憶されており、大島南部西端の西古見で、今もミヤーに該当する広場をアシャゲと呼んでいることはその名残りである。シマタケガナシ・トネヤはミヤーと隣接している。また、ミヤーには「カミミチ(神道)」が続いていることが多く、「カミヤマ(神山)」と総称される山の聖地と海とを結ぶ線上にある。今も与路島のように、葬儀で墓地に向かう際にミヤーを通ることを堅く禁じていることも聖地として意識されていることのあらわれである。

シマによっては、ミヤーの聖地性よりも共有広場としての性格が重視され、埋め立て工事など近年の諸事情で作られた広場をミヤーとした他、容易に移転されているケースもある。請阿室や久慈では、明治期以降から数えて三度の移転がなされている。

(2)シマタテガナシ・イビガナシ

ミヤーの一角に、主に自然石をひとつ祀っている場合が多い。加計呂麻島の須子茂・武名・瀬相などに残されている。於齊のシマタテガナシは山川石の墓石のうしろに小さな自然石を三つ並べている。油井のシマタテガナシは自然石がひとつではなく複数である。与路ではミヤーと隣接した小高い丘一帯をさしている。

シマタテガナシ・イビガナシとよばれていなくとも、ミヤーの一角に自然石を祀っている場所として、小名瀬・手安・蘇刈・伊須・請阿室・西阿室・安脚場・実久があげられる。そのうち、古志・俵で「グジ墓」、手安・伊須で「ウジガミ」と呼ばれている。これらの祀られ方との関連性の説明は今後の課題である。

徳浜・西古見では墓地にシマタテガナシが位置している。阿多地はシマ内のデイゴの木の下から墓地に移転された。勝浦ではトネヤ敷地内に、瀬武ではアシャゲ内の棚に祭られている。久慈では墓地にシマタテガナシとよばれる古墓が中央にあるが、シマ全体では管理されていない。久慈でいうところのシマタテガナシとは、各家筋の遠い先祖をさす言葉であるという。

このように断片的に記す各シマの事例の中にも、シマタテガナシを神とはいっても、そこに墓的な性格が同時にみえており、遠い先祖、シマの開祖を祀っているとみられる。一方、イビガナシの呼称の「イビ」は聖域や自然石の神体をさして琉球列島全城に広がる語彙であるが、その確かな語源は未だ明らかにされていない。

(3)トネヤ

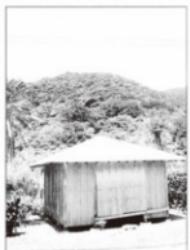
シマの宗家とみられる。屋号を各戸につける慣習がないこの地域にあって、トネヤという屋号的呼称は、ほぼ各シマに存在していたとみられる。トネヤはミヤーと隣接して立地している。普段は人が住む民家であるが、ノロ祭祀との関わりにおいては、神の送迎祭の場ともなる。藩政時代の専人など役人を輩出した家については別に「トノチ(殿地)」と称されることが多い。

トネヤの戸主は、代々世襲でグジとよばれる役を継ぐ。グジは唯一男性として参加していた。服装は特別に神衣(カミギン)や祭祀具を身につけることはなく、日常の衣服で参加していたようである。俵には、特別にグジに与えられた耕地である「グジ田」と「グジ畠」の場所が伝承されている。

近年までノロ祭祀が続いていた加計呂麻島の須子茂・嘉入のトネヤは、グジの住居と祭場の機能が分離した非居住型であった。グジの転居など諸事情で、シマの伝統的信仰が廃れつつある中での変容形とみられる。



178 武名のシマゴスガナシ



179 嘉入のトネヤ



180 三浦のアシャゲ

(4)アシャゲ

「アシャゲ」語彙は奄美諸島全島的に認められるが、施設として現

存しているのは宇検村の一部と加計呂麻島西部域のみである。ミヤーの一角に、比較的にトネヤの近くに建てられている。アラホバナ・ミナクチといった稻作に関わる祭りが行われていた。

アシャゲの形態は大きく二つに分けられる。武名・瀬武のように地面に数本の掘っ立て柱を立てたものは、かつては瀬相・諸数にあった。地面にコンクリートをはっている実久・俵のものも同じ形態とみてよいだろう。また、須子茂・阿多地・三浦・木慈のように、床が作られ、柱には桁が入っているタイプは、かつては嘉入・於斎にも見られた。

(5)カミミチ(神道)

本町全般的に残っている。かつては直線的につながっていたとみられるが、現在は断片的に記憶されている。その断片をたどっていくとミヤーを基点として海・山方向へ続く場合と、背後の神山から神山へ、海とほぼ平行して続く道が認められる。神道の道幅は、通常の人々の生活で利用されている道とは違い、極端に狭いものがほとんどである。神道と接する家によっては、そのヶ所のみロック扉を開けていたりする。与路島の神道によっては、石垣の上部のみを取りさり、そこを神道としている。



181 須子茂の神道

(6)カミヤマ(神山)

神山とは、聖地である山の総称である。実際のシマ空間にあっては、様々な呼称が存在する。薪を取ることや石さえもそこから持ち運ぶことが忌まれている。神山の中でも、比較的に高い山を「オ(ウ)ボツヤマ」と呼んでいる。油井岳は上、中、下の三段階に分かれてオボツという聖域が山中にあったという。網野子のオボツも高い山である。オボツという呼称でなくとも、シマから見える一番高い山を第一級の聖地とみる例は、篠川や久慈などにみられる。その一方で、於斎のようにアカテツの樹々が茂る平地の森をさしている場合もある。



182 須子茂の神山
(中央の小高い山)

モリヤマ・ウガミヤマは比較的にシマに近い小高い山である。ノロが祭りの際に鉢を叩いて降りてきたといわれる山の多くがこれらである。その山に入ってみると、その頂上付近に平地が確認される場合が多い。グンギンは「権現」の訛りである。加計呂麻のみならず、大島側にも多く、蘇刈・嘉鉄・手安・久根津・油井・小名瀬などにある。シマによっては4~5つ存在する場合もある。山頂に屹立した形の自然石を数本立てられており、そこで旧暦9月9日に拝む。基本的に一族単位で拝むものであったようで、それが後にシマ全体の信仰対象として発展していったとみられる。その点からすると、グンギンがシマ住民意識として神山の範疇に含まれているかどうかはまだ検討の余地がある。

(7)ネリヤ

ノロ祭祀が消失した現在にあっては耳にすることが難しい語彙である。研究史の中では、海の方向にある聖域をさすとして「ネリヤ」の語彙が得られている。筆者は阿多地で「リュウグウ」との語彙を耳にしたが、それが示すところは同じ領域であろう。神の送迎祭の形式は、アダハと呼ぶスキを神役たちが



183 阿多地の浜辺

手を持って浜辺で行われた。海から迎えられた神は、トネヤでの祭祀の後、再び海の彼方へと神役たちによって送りだされた。

三、トネヤとミヤーをめぐる時空

以上に、ノロ祭祀を基調としたシマの空間語彙とその様相にふれてみたが、次にこのような祭祀空間の在り方と遺物散布地として示された領域について若干の比較を試みることにしよう。

まず注目したいのは、シマの居住域内でも高い確率で遺物が表採されているトネヤ・ミヤーの空間である。そこはシマの民俗空間上でも祭祀空間の中心性を持った位置にあるが、青磁片・類須恵器片にみる中世相当期という時代的傾向が示される島外からの外来品がそこから表採されていることは、現在に至るまでの時代的継続性として、その空間をどのように理解すればよいのだろうか。

勿論、このような設定の問題は本格的な発掘調査の後に検討されるべきであろうが、遺物の集中散布度合いから、前提として、中世相当期の青磁・類須恵器をシマ人の手に一样に行き渡った日用雑器としてではなく、シマ共同体内の政治権力の中心性に関わっていた遺物とみたならば一つの予察はできるだろう。それはトネヤとミヤーの周辺が、中世相当期に何らかの中心性を保有していたが、後に続く琉球王府の支配、そして薩摩藩政下の近世期を経て近代に至る過程で失われていき、民俗誌に現れてくるような祭祀的中心性のみが、その空間に継承されてきたとする見方である。

この観点から民俗空間をみつめたとき、これまでの民俗学の研究蓄積にみえるシマ空間の語彙説明はもう一つの読み方が迫られるだろう。

（1）「グジ」呼称の語源について

その焦点はトネヤとグジにある。これまで民俗研究によるトネヤの語彙は、昇曙夢が提出しているように「里の刀櫛」がすなわち里の長を意味することから、宗家としての性格も含め、その長の住居の意味として理解されてきた（注3）。この説についての異説反論の提出は過去に無く、定説的に今に指示されてきたといってよいだろう。

グジの語彙についても、トネヤの語彙理解の場合と同じく異説はない。多くは小野重朗が「男神人はグジ、グジヌシューといい、名称は宮司と関係があると思われる」と述べていることに代表されるように、「宮司」の解釈漢字が当てられて表記されてきた（注4）。また、それは近年の研究者のみならず近世文書の表記にもみえ、1805年から三年の間、大島代官を勤めた本田孫九郎親孚による「大島私考」には「祭日ヲ用ルモノ能呂久米女大神女ナリ其時祭ニ與ル男ハ宮司ナリ島ノ人宮司ト書テグンヂト讀」（傍線部筆者）とある（注5）。

「宮司」とはいうまでもなく神社神道に関わる神職のひとつであって一社の長をさす呼称であるが、実は、それがノロ祭祀の語彙に含まれている理由について説明を試みた論考や語彙由来を説く決定的根拠を示した史料の提示は見当たらない。グジ語彙を神社神道の影響を受けた呼称とするならば、これまで記録・考察してきたノロ祭祀にみる神觀念から祭祀具にいたるまで、研究史上で神社神道の影響が指摘されていそうなものであるが、私見の範囲ではそれも見つけることができない。察するに、その音の相似する響きに加え、男性が務めている点や民衆の最前線で神と接触するという点において神社神道の宮司と通じることから、特に説明されるまでもなく「宮司」の表記が当て字されて用いられてきた感がある。

グジの語彙由来を漢字表記の「宮司」にみると、奄美諸島への神社神道の流入時期と過程を

踏まえた上で検討が必要であり、瀬戸内町一帯で神社の管理者を「宮司」ではなく「シャモリ(社守)」と呼んでいることとの差についても、今後言及していくべきだろう。

これまでの神社史研究では、奄美諸島への流入は時期的にさほど古いものではないと考えられている。奄美諸島の神社の創建年代の類型化と考察を試みた蘆田稔は、〈英雄祀靈〉・〈貴種慰靈〉・〈分靈勧請〉・〈国家祭祀〉の四つの類型をあげ、うち最も古い創建年代(琉球服属時代後期～17世紀)を伝承する英雄祀靈型の神社が、実際には近代に始まっており、為朝・平家が関わる貴種慰靈型の神社については、伝承年代が12、13世紀までに遡るが、確実な歴史年代は薩摩藩政下の時代、多くは19世紀であることを指摘している。また、分靈勧請型についても近世期に広く分布はじめているという(注6)。

このような研究レベルから奄美諸島への神社流入を藩政時代以降とみると、グジ呼称の由来である「宮司」語彙は藩政時代以降の比較的新しい語彙という見方が強い。もちろん、16世紀以前の琉球王国下にあったノロ祭祀主導の時代に、神社の信仰形式の流入とは別の次元で「宮司」語彙のみが奄美に流入していたという想定も即座に一蹴することはできないが、現段階でのその証明は難しいだろう。

グジには「宮司」の他にもうひとつの表記がある。加計呂麻島・俵のミヤーの一角には山川石製のウボツガナシともよばれる石塔碑がそれである。正面には「大神郷司 月真柏子」向かって右面に「元文五庚申天十二月十四日」、左面に「秋目 平清七 表村 喜志智」と刻まれている。裏面に文字はない。この石塔を単純に墓とみるとには、亡くなった人物の名と行年が不明である点から一考を要する。秋目の出身者と俵村の者が連名で碑を建てている理由もまた不明である。秋目とは薩摩半島南端の坊津の村名である。この石が山川石であることからすると、平清七なる人物はその石の調達に関わった者であろうか。喜志智についてもいかなる人物か詳細は不明である。



184 俵のウボツガナシ

筆者はこの正面の「郷司」表記を「グジ」と読むものとみる。大島南部の古志に「グジ墓」と伝える自然石を神山の麓に祀つてあるように、俵でもグジ墓と呼ぶ自然石をこの石塔と向き合うように祀つてある。それは俵に二つのアシャゲと二人のグジがいたことと関係があるかも知れない。

この墓碑の「郷司」表記を「郡司」に同じと考えると、藩政期に七島とよばれた、奄美大島の北に連なるトカラ列島各島に置かれていた「七島郡司(シチトウグンジ)」の呼称が想起させられる。この秋目出身者が交易従事者として関わっていたのであれば、「七島郡司」のことは知識として持っていたとみるべきだろう。

「グジ」と「グンジ」、その音の相似から関連性にも一応ふれておくことにしよう。「七島郡司」とは、トカラ列島の島々に置かれた首長＝郡司の総称である。紙屋敦之の研究によれば、その初見は1718(享保3)年で、琉球国王が「琉球国司」と称することが決定されたことに対応するものとして、七島が琉球の属島であることが否定されて日本の属島として位置づけられていく17世紀～18世紀初の過程に設置された島津藩の支配制度と説明されている。「七島郡司」呼称由来について紙屋敦之は、「旧記録」にある建武元(1334)年には黒島に黒島郡司が置かれたという記事について、それが七島郡司のモデルとなつたことは考えられるが、その頃から七島にも郡司がいて、それが近世に至つたとは考えがたいとの見解を述べている(注7)。

この歴史学の指摘からすると、シマの長としての性格の一致から、たとえ奄美に「郡司」という役人制度がなかったとしても、民間レベルの語彙移入の可能性を見て、グジ語彙由来を「郡司」に求めたとしても、やはり「宮司」同様、それが近世期からのもので比較的新しいという見方となってくる。

(2) 中世相当期の「グジ」像

奄美諸島のノロ祭祀は、琉球王国の祭祀形式の中に取り込まれていたために、沖縄本島周辺地域に通じてノロ・オボツ・イペ・アシャゲ(アサギ)といった祭祀語彙や祭祀具に共通点が多く認められるが、不思議なことにグジという祭祀語彙は沖縄県域に認められていない(注8)。しかも、奄美諸島内においてもグジ語彙は全般的ではなく、奄美大島・加計呂麻島・請島・与路島一帯にのみ色濃い分布をみせている特徴がある。

こうした語彙分布を薩摩藩が琉球王国に侵攻した 1609 年を分岐点に、それ以前と以後の奄美諸島への神社神道の流入など信仰生活をめぐる状況変化の結果とみる大まかな分布解釈の読みをとるのであれば、ここでもグジ呼称が近世期以降の新しい呼び方という見方ができる。

しかし、一考すべき史料は存在する。琉球王府より奄美諸島にもたらされた辞令書である。加計呂麻島・須子茂に伝えられた辞令書を保有してきた池田家は、トネヤの管理者として代々グジを務めてきた。ミヤーと隣接して立地する同家には、辞令書と共に完型の類須恵器(1 点)が伝世され、その敷地跡からは本報告書にあるとおり青磁片が表採されている。

その須子茂辞令書は、重複した部分を整理すると全三通から成っている。うち、高良倉吉が「得分規定型辞令書」と分類する範疇に含まれる「ネタチ宛辞令書」中には、「ネタチ」の出自を記した「すこものくちのうまが」との一文がある。高良によれば、「瀬戸内西間切の須子茂の《くち》と呼ばれる人の《うまが》、すなわち孫」と意訳されているが(注9)、この「くち」が人名ではなく、「グジ」であるかどうかは一考を要する。

須子茂文書には系図が一枚含まれているが、そこに三ヶ所みえる「祢立」を「ねたち」と読むと、辞令書の通りその祖父の代に「宮司」の名がみえる箇所がある。この「宮司」が「くち」のことであろうか。須子茂辞令書は原本ではなく印影から写しであることは前記の高良倉吉が指摘している。その写しが行なわれたのがいつ頃であるかによっても、「宮司」がノロ祭祀に関わる男性神役のグジか、女性であるノロの人名に後に当て字されたものか判別が左右されるところだろう。この点は歴史研究者の見解を待ちたい。

辞令書のうちノロ関係文書の形式では、肩書きを注記する箇所に「元のノロの《妹・子・姪》某」と先代のノロとの血縁関係が相続の具体的実例として出自が明記されているとする山田尚二の指摘からすると(注10)、まず、「くち」をノロとみることが無難であろうが、注意はしておきたいように思う。「くち」がシマで地位が高い人物であることは疑いないであろう。

奄美関係の辞令書は高良倉吉によって 29 点がリスト化されており、それを参照すると(注11)、王府からの辞令が祭祀を主導していたノロと役人層(大屋子・掟・目差・里主)に限定され、辞令発布対象者にグジ呼称が見当たらないことがまずは確認できるので、本稿の段階では、前項で記した状況を含めてグジ呼称は近世期以降の呼称という見方をしておきたい。

そのように考えると、次に、グジ呼称以前のトネヤ居住者と王府任命による役職とがどのような関係にあるかが焦点となってくる。短絡的に直結させる見方は危険だが、トネヤで伝世されていた須子茂辞令書の中に「瀬戸内西間切の西掟職叙任辞令書」が含まれていたことに、トネヤの主が掟役を務めてい

た時期があったとの可能性をみることはできないだろうか。それは、これまで知られている29点の辞令書全てについても、どのような経緯でどの家柄で伝世されてきたかについても整理検討したのちに述べるべきことであろう。

琉球王国下の奄美の掟職の像を、山田尚二は「村に一人いる下級の役人とされるが、当時は、掟大八目や掟佐武良金兄弟の武勇伝説で語られるように、土豪の性格をもっていたとも思われる」と述べ(注12)、藩政時代にも存在した掟と比べるとまだ権力レベルが高かつただろうとみている。

ここでいう「土豪」の範疇にトネヤに居住していた者も含めて考えることはできないだろうか。奄美諸島が琉球王府に統治されていく過程で、各シマの「土豪」に掟職等の役職を与えることによって、王府勢力下に組み込んでいったのではないだろうか。このような考え方とは、『名瀬市誌』の「第一尚氏の奄美への支配浸透に、部落への掟配置という末端支配網の強化を必要としたことは同然であろう。(中略)里主と掟のどちらが先に登場したかを語る史料はない。おそらく、有力なアジが、有力な根人や、首長、または弱小アジを服従させたとき、これを里主に封じ、自己直轄地の部落には掟を配置する、という形で、政治社会は出発したのであろう」との見方に、骨格として相違するものではない(注13)。

これまで民俗学によって抽出されてきたトネヤの要素は《宗家》と《祭祀》の中心性に関わる部分であり、また、グジは神役の一員として近年の報告書に記してきた。しかし、小野重朗が実際の祭りの調査観察から、グジが「ノロと相対する場所に座をしめる」と記している点をあえて重視するならば(注14)、祭場でのグジの座に、本来、トネヤの主がシマ人を代表して神をもてなし、神からの祝福や幸、豊年の約束を受けていたことの残像をみることもできよう。そのように考えると、加計呂麻島のウムケー・オーホリにみる、神を海の彼方から迎え、また送りだす祭が、アシャゲではなく、トネヤで行なわれていたことも、その辺に起因てくるだろう。

トネヤが共同体を代表する長の住居であったとみると、同時にそこには《政治権力》の中心性の存在も示唆されてくる。中世相当期、琉球王国支配以前のトネヤとグジの様態は、シマ内において《政治権力》・《宗家》・《祭祀》の三つの中心性を有していたものが、その後の琉球王国と薩摩藩の二度にわたる支配層の交替と役人制度の変革によって《政治権力》の中心性を失っていったが、トネヤの《宗家》としての中心性は、不動の聖性として保持継承されたために、《祭祀》の中心性は近代に至るまでそこに固定され続けたのではないだろうか。それが、祭祀空間が遺物散布地であることへの本稿の予察である。

(3) 「ミヤー」の時空

本報告書にみるとおり、トネヤと並んでミヤーも中世相当期の青磁片・類須恵器片が表採される確率が高い空間であるが、その空間の履歴はどのように考えればよいのだろうか。

ミヤーという語彙の由来については、宮良当社「ミヤ(宮)の原義に関する研究」をその嚆矢の論考としてあげられる(注15)。宮良は日本語としての「ミヤ(宮)」の語彙生成をめぐり、昇曙夢が記した加計呂麻島のミヤーの記述をふまえて琉球列島全体の広場を示す語彙を提示したのち、「庭」がミヤの原義であるとして、「ミヤ」と云う言葉に広場の意味の存することは明らかである。而してこのミヤ(広場)に神祭を行なう神殿を設けた為に、その建物を「ミヤ」と称したのであろうと考へる」との結論に至っている。

一方、加計呂麻島・諸鈍出身の金久正のように、「ミヤーはもちろん「みや」(宮)のなまりで、フニヤはウフミヤ(おほみや=大宮)のなまりで、「おほ」は美称であり、マーはミヤーの再転音である。

(…中略…）ミヤが本来この空地を意味したのではなく、この空地に立てられたほこら（祠）を指したものである」と、ミヤーの語源を「宮」に求める見方もある（注16）。金久正がここでいう「祠」とはアシャゲを比定したものとみられ、後段に引用する『南島雑話』中の記述を意識した見方ともいえよう。

これらミヤーの語彙由来が「庭」と「宮」の二つの間で揺れる中で、中世相当期の原像はどちらに求められるだろうか。前項のグジをめぐる仮説を元に、琉球王府支配下以前の中世相当期にトネヤがシマの『政治権力』・『宗家』・『祭祀』の中心性を備えていたとみるならば、そこに隣接しているミヤーは、本来はトネヤの「庭」であったとみるのが妥当ではないだろうか。ミヤーには祭祀施設であるアシャゲが立ち、聖地性をともなっていることからすると、実質は「宮」の機能も有した「庭」であつただろう。

祭祀空間としてのトネヤの「庭」については、すでに伊藤好英が注目している。伊藤は、現存する琉球列島のアシャゲ（神アサギ）の立地位置を総検討したうえで下記①～③に類型化し、「結局、庭あるいは広場を伴っていることが、〈アシャゲ〉の一つの共通の性格であると言えよう。そしてこれらの〈庭〉は〈アシャゲ〉と共に祭りに使用されているのである」と述べている（注17）。

- | | |
|---------------------------|--|
| ①御嶽の中にある場合 | 大宜味村謝名城（根謝銘グシク）、国頭村比地（小玉森）、同村
辻土名（イチフク森 城嶽）、同村真喜屋（真喜屋の嶽）など。 |
| ②村の中の広場にある場合 | 加計呂麻島のほとんどのアシャゲ、沖縄本島の多くのアシ
ャゲ、久高島のアシャゲなど。 |
| ③根屋（村の宗家）やノロ家などの旧家の庭にある場合 | 伊是名島の各村落のアシャゲ、加計
麻島嘉入のグジモトのアシャゲなど。 |

伊藤は、トネヤとアシャゲの二つの祭場でそれぞれ祭りが行なわれていたことは、本土にみられる「本殿の儀」と「庭の儀」のようにもとは一連の祭りで、同日に家の中と庭で行なわれていた祭祀ではなかつたかと考えている。そして、本来は宗家であるトネヤの家と庭で祭りは行なわれていたのではないかとして、上記類型の③に古い姿をみているのは興味深い。ミヤーが本来はトネヤの庭であったとの見方に通ずるといえよう。

また、かつての土豪を示す語彙としては、トネヤの主よりも類例は少ないが「按司」が知られている。名瀬市小湊の「按司屋敷」には隣接して「マー」とよばれる広場があり、十五夜行事の儀礼で重要な空間となつていることは、トネヤとミヤーの空間関係に近い。「マー」は「ミヤー」の音転で同じ意味であろう。「按司」の住居跡と伝わる場所もこのような観点から再考していく必要があるだろう。

ミヤーの古い姿を「トネヤの庭」とみるならば、そこに中世相当期の類須恵器片・青磁片が散布している意味は、トネヤにそれらが散布している理由と同じに考えられる。

祭祀空間の履歴を通史的に理解していくためには、池浩三のアシャゲ研究にみると、かつてのアシャゲが祭りの後に崩されて再び祭りの際に築かれるという、祭場の仮屋性を示唆する民俗例があることにも注意をはらっておくべきだろう（注18）。アシャゲを奄美と沖縄に同時発生的に誕生した祭場ではなく、琉球王国から奄美に持ち込まれた公儀の祭祀形式のひとつとしてみるならば、考古学の発掘調査の進展によっては、アシ



185 伊是名島 宗家の庭の
神アサギ(仲田)



186 伊是名島 宗家の庭の
神アサギ(勢理客)



187 名瀬市小湊「マー」の広場
(隣接する中央宅地が「按司屋敷」)

ヤゲの建て替え頻度、位置変遷、仮屋性の真偽について何らかの見方が示されてくるのではないだろうか。柱穴の状況等を元に検討が加えられていくことを期待したい。

(4) 「オドン」の時空

聖地的広場をさしてミヤーとは呼称されずに「オドン」、あるいは「ウドン」とよんでいる例が、瀬戸内町では手安と勝浦にある。双方とも海岸近くに位置する広場である点は、名瀬市港町の「ウドンバマ(御殿浜)」、与論島茶花の「ウドノス(御殿の後、御殿の洲)」の地名のあり方と共通する。また、笠利町辺留城の「オドン地」も同系呼称である(注 19)。これらは『南島雑話』中にみえる「於頓」と無関係ではないだろう(注 20)。



188 手安のオドン

美弥(ミヤは宮也)

於頓 能呂久米の神を祭る場所。一間切に一ヶ所、間々茅を以て作り、広さ十枚敷の木屋有。多く如図。卒(塔)婆に似たる物、一、両本立つ。卒(塔)婆にあらず、ヒョウフンと云う。白木作り、文字なし。東間切伊須にて見処如是。於頓に屋を造り、美弥は祭すんで直にとりくづすなり。

名越左源太によるこの記述は、当時、各シマに存在したミヤーの在り方を典型的な事例として記したものではなく、特異な例として出会った「オドン」を記したものとして読むべきであろう。池浩三は、この記述をめぐって、「於殿」とは「御殿」のことで、やはり同書の「神小屋は八疊敷位」という記事の「神小屋」と同一のものであろう(注 21)とみているが、筆者はむしろこの「於頓」を広場呼称の記述ととらえることが妥当と考える。

「オドン」語彙が、琉球王国域で「王子、按司の家、またはその人をさす敬称」とされる「御殿(ウドゥン)」に通じる語彙であることからすると(注 22)、これらの広場が、かつて琉球王府による奄美諸島支配に閣与していた場所とも考えられ、支配に関わる何らかの施設があった可能性もあるだろう。

名越左源太が「一間切に一ヶ所」と説明している点を、仮に、池浩三の読み通りに「神小屋」であつたとするならば数が少なすぎるといわざるをえない。「神小屋」、すなわちアシャゲであるならば、もっと全域の分布を示していたはずである。「間切」語彙が本来は琉球王国下の区画呼称であったことからすると、「オドン」が琉球王国の奄美支配に伴って要所に設置された点的な分布であつてもよいだろう。

瀬戸内町域において「オドン」が伝承されているのは、筆者の知るところでは勝浦と手安のみである。伊須の「オドン」については、すでに現在の聞取調査では耳にすることができなかった。伊須と勝浦は距離が近いが、伊須湾の良港としての重要性から、いずれかの場所に琉球王府の奄美支配にかかる要所が設置されていた可能性はないだろうか。また「一間切に一ヶ所」とは概括的な表現であって、本来は海上交通上の優位地形に沿う配置であった可能性にも今後注意をはらっていくべきだろう。

中世相当期の土豪が居住していたトネヤの庭(ミヤー)が、琉球王国下に入ってのち、そこに支配に伴う家屋施設が設置されたことで「オドン」と呼ばれるようになったと仮説的に考えると、加計呂麻島・諸鈴の金久のトネヤ敷地隣りを、ナングモリの横暴を鎮圧するためにグリヤバルが助けを求めた琉球軍が駐屯した地と伝えられていることも、勝浦の「オドン」がトネヤの庭的な位置にあることを考えれば、あながち荒唐無稽な伝説でもないよう思えてくる。

四、おわりに

本稿でふれた問題は、本格的な発掘調査の後に言及されていくべき性格のものであろうが、筆者のような民俗研究の立場からみて、祭祀空間の〈地下〉が明らかにされていくことは、これまで〈地上〉の慣行と伝承をめぐって議論してきた民俗学の研究蓄積が、絶対年代的な物証を元にした考古学による見解の元ではどのように符号し、また否定されるかというある種の期待感を隠せないことから、あえて予察していくつか述べてみた。〈地下〉と〈地上〉の時間的連続性を説明するには歴史研究の見解が不可欠である。これまでの市町村誌にみる通史的奄美諸島の記述は、特に琉球王国下時代の記述において、その依拠しようとする史料の所在がいまひとつ不明瞭に感じる。今後の歴史学によるシマの内と外からみた実証的史料論による整理作業の後に遺物散布地の民俗空間は再考されるべきだろう。

【注】

1. 伊藤幹治「沖縄の宗教人類学」(弘文堂 1980)
　　クライナー・ヨーゼフ「南西諸島の神観念」(未来社 1977)
2. 高橋一郎・松原武実「加計呂麻島ノロ祭祀調査報告(旧東久村編)」(鹿児島短期大学付属南日本文化研究所 1998)、松原武実「加計呂麻島ノロ祭祀調査報告書(旧鎮西村編)」(鹿児島短期大学付属南日本文化研究所 1999)
3. 昇曙夢「大奄美史」(原書房 1975) 132 頁
4. 小野重朗『奄美民俗文化の研究』(法政大学出版局 1982) 35 頁
5. 本田孫九郎親字「大島私考」 奄美史料 2 (鹿児島県立図書館奄美分館 1972) 10 頁
6. 菊田稔「神社成立の奄美的類型」『人類科学』第 30 号(九学会連合 1978) 118 頁
7. 紙屋敦之「幕藩政国家の琉球支配」(校倉書房 1990) 230~241 頁
8. 酒井卯作『琉球列島民俗語彙』(第一書房 2002) 420 頁
9. 高良倉吉「古琉球期の奄美における給田の移動—須子茂文書が内包する情報のスケッチ」「日文研叢書 12 日本文化の深層と沖縄」(国際日本文化研究センター 1996) 92 頁
10. 山田尚二「奄美における古琉球の辞令書について」『研究紀要』(鹿児島県立錦江湾高等学校 1988) 19 頁 24 頁
11. 高良倉吉「奄美喜界島の古琉球辞令書について」『日本東洋文化論集 琉球大学法文学部紀要第 10 号』(琉球大学法文学部 2004) 48 頁
12. 注 7 に同じ。4 頁、10 頁
13. 『名瀬市誌』(改訂名瀬市誌編纂委員会 1996) 253 頁
14. 小野重朗『奄美民俗文化の研究』(法政大学出版局 1982) 35 頁
15. 宮良当社「ミヤ(宮)の原義に関する研究」『南島論叢』(伊波普猷記念論文集編纂委員会 1937) 138 頁
16. 金久正「増補・奄美に生きる日本古代文化」(ペリカン社 1978) 18 頁
17. 伊藤好英「神と祭りの庭—アシャゲの考察を中心に—」『南島研究と折口学』(桜楓社 1990) 12~18 頁
18. 池浩三「祭儀の空間—その民俗現象の諸相と原型—」(相模書房 1979) 95~100 頁
19. 『笠利町誌』(1973 笠利町誌執筆委員会) 118 頁
20. 名越左源太・国分直一・恵良宏校注『南島雑話』2 (東洋文庫 平凡社 1984) 100 頁
21. 注 13 に同じ。89 頁
22. 『沖縄大百科事典』上巻 (沖縄タイムス社 1983) 303 頁

第2節 濑戸内町における遺跡の立地について

鼎 丈太郎

瀬戸内町教育委員会では、平成15（2003）年度から町内の埋蔵文化財詳細分布調査を実施継続してきている。第1章調査に至る経緯でも述べたが、平成16（2004）年度までの埋蔵文化財分布調査の進行状況は、調査対象地区的約七割である。

現段階での調査結果から、瀬戸内町における遺跡の立地条件について、ある程度の傾向が存在すると考えられる。平成2（1990）年に鹿児島県教育委員会が『奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書II』で立地条件の類型化を試みているが、今回の調査で、遺跡数が増加したこともあり、遺跡の立地について再考し、本節でまとめてみたい。

1 各時代の遺跡の立地

今回の調査で確認・再確認された遺跡は、全部で49遺跡にのぼる。瀬戸内町全体の遺跡の分布は、第3図瀬戸内町の遺跡分布図の記載どおりである。分布図を概観してみると、遺跡が瀬戸内町全城に広がっている事が理解できる。しかし、ほとんどの遺跡は中世以降の遺跡で、それ以前の遺跡数は少ない。そこで、時代により遺跡の分布がどのように変化するのか、縄文から近世までの期間をいくつかの時代に分け、各時代による遺跡の分布を確認してみたい。

先ず、時代をどのように区切るかが重要であるが、奄美諸島では、共通認識されている時代区分が存在していない。そのため、沖縄及び日本列島の時代区分を援用しているのが現状である。しかし、沖縄や日本列島の時代区分を直接使用すると、土器様相など様々な面で無理が生じてしまう。そこで、奄美諸島の土器様相及び对外交流において、特に相違が確認できると考えられる部分で時代を大別し、比較検討を行ってみたい。その際の時代名称は、時代を認識しやすい日本列島の時代名称を参考にして表記を行いたい。

＜縄文時代相当期＞

狩獵・採集の生活を行っていたと考えられる時代で、沖縄諸島と共に特徴をもつ地域色の強い土器を使用している。瀬戸内町では、標識土器である嘉徳式土器が出土した、嘉徳アサト遺跡（嘉徳遺跡）、条痕文土器が採集された渡連アンキヤバ遺跡（安脚場遺跡）など、数遺跡がこの時代に相当する。

＜弥生時代～古墳時代相当期＞

日本列島では、稻作が本格的に開始され、国家の体制が整い始めた時代である。沖縄諸島では、前段階における特徴を継承している土器を使用しているが、奄美諸島では、在地土器が九州地方の土器の特徴を持つようになり、外来土器が認められるようになる。また、西日本を中心とした南海産大型貝製品（腕輪など）の盛行により、原材となる大型巻貝（ゴホウラ・イモガイなど）を介した交流が開始されたと考えられる。

＜飛鳥時代～平安時代前期相当期＞

文献史学の成果によると、奄美諸島にまで国家統治の影響が及び始めると考えられる時代である。この時代になると、南九州の土器の特徴よりも地域色が強くなり、奄美諸島と

沖縄諸島の土器様相が再び類似するようになる。奄美諸島では、この時代で土器の使用が終焉を迎えると考えられる。また、この時代、奄美諸島を中心として、螺鈿の原材であるヤコウガイの大量出土遺跡が見られるようになる。

<平安時代後期～江戸時代相当期>

日本列島では、国家領域が現在と変わらないほど広大になる。沖縄諸島では、琉球国が成立し国家の体制が整う時期である。そのため両国の中間に位置する奄美諸島は、常に国家領域の境界に位置することになる。

奄美諸島において、類須恵器の盛行する時期（平安時代後期～鎌倉時代）は、琉球国にも薩摩藩にも支配されておらず、むしろ、南西諸島の中心であったと考えられる。また、類須恵器と兼久式土器の製作技術の差は大きく、地元で発展した技術ではないと考えられる。以上のことから、対外交流や国家の成立・国家領域などの点で考えると、類須恵器の盛行する時期を別分類にするべきであるが、今節では南西諸島における国家成立の土台の時期であると捉え、類須恵器の盛行する時期もこの時代に組み込むこととする。

以上、土器様相や対外交流・国家領域などにおいて、時代を4つに大別してみた。それでは、実際に瀬戸内町の遺跡が各時代でどのように分布しているのか確認してみたい。

<縄文時代相当期>（第59図）

縄文時代相当期にあたる確認遺跡は、5遺跡である。遺跡の分布を概観してみると、5遺跡とも瀬戸内町の東側に存在することが確認できる。また、すべての遺跡が外洋側に存在し、海峡内では確認できない。

<弥生時代～古墳時代相当期>（第60図）

弥生時代～古墳時代相当期にあたる確認遺跡は、7遺跡である。其の内3遺跡は加工途中のゴホウラ貝殻のみの採集地であり、土器など年代が確認できる資料による時代設定ではない。徳之島町文化財保護審議会委員で工房海彩代表である池村茂氏のご教授によると奄美諸島でゴホウラが最も捕獲される地域のひとつが瀬戸内町であるとのことであった。また、ゴホウラは現在でも獲ることが可能であるが、殻が重く身が少ないので、現在の漁においてゴホウラを対象とする漁を行うことは考えにくいとのことあった。

沖縄諸島においてゴホウラの集積を行う時代は、弥生時代～古墳時代相当期である。以上のことを考慮すると、ゴホウラを対象として漁を行い、荒加工を行う時代は、弥生時代～古墳時代相当期であると考えられるため、ゴホウラのみの採集地もこの時代の遺跡として扱う事にする。遺跡の分布を概観してみると、請島・与路島の両島にも遺跡が確認され、縄文時代相当期の遺跡とは違い、瀬戸内町の東側のみに偏るといった傾向はみられない。また、縄文時代相当期の遺跡が存在する地点では、弥生時代～古墳時代相当期の遺跡は存在しない事も確認できる。しかし、外洋側に遺跡が形成され海峡内に遺跡が形成されないという点では縄文時代相当期と同一である。

<飛鳥時代～平安時代前期相当期>（第61図）

飛鳥時代～平安時代前期相当期にあたる確認遺跡は、11遺跡である。兼久式土器やヤコウガイを採集できる遺跡である。弥生時代～古墳時代相当期にあたる遺跡と重複する遺跡は4遺跡である。遺跡を形成する条件が近いと考えられるが、この時代、遺跡を形成する一番の条件は、ヤコウガイが獲れるかどうかである可能性が高い。確認された遺跡の前面



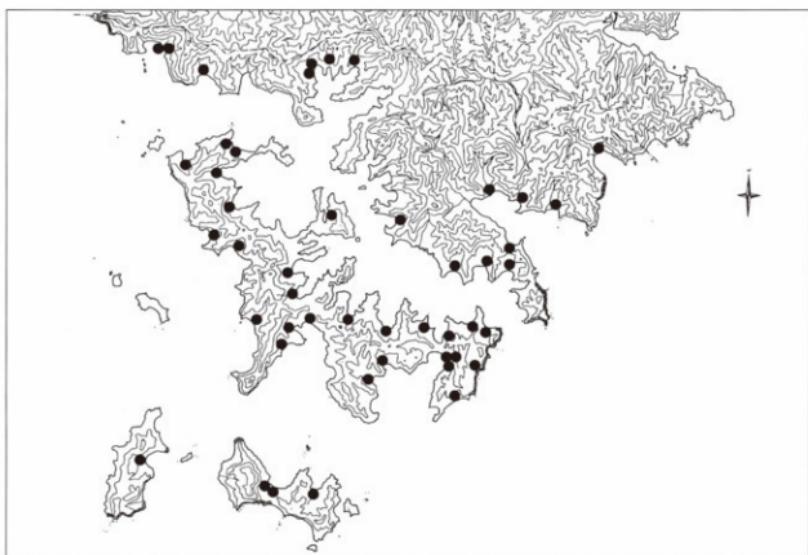
第59図 濑戸内町遺跡分布図(縄文時代相当期)



第60図 濑戸内町遺跡分布図(弥生時代～古墳時代相当期)



第61図 濑戸内町遺跡分布図(飛鳥時代～平安時代前期相当期)



第62図 濑戸内町遺跡分布図(平安時代後期～江戸時代相当期)

の海または、近くの海は現在でもヤコウガイが獲れる地域である。そのため、皆津崎のような狭い土地にも遺跡が存在すると考えられる。また、この時代も外洋側に遺跡が形成される傾向がみられる。

＜平安時代後期～江戸時代＞（第 62 図）

平安時代後期～江戸時代相当期にあたる確認遺跡は、47 遺跡である。奄美諸島では、在地の土器が使用されなくなり、類須恵器や陶磁器など、大量生産された焼き物が流通し始める時代である。この時代になると、外洋側、海峡内にかかわらず遺跡が形成され、現在集落が形成されている地域とほぼ重なると考えられる。また、この時代には集落の裏山や海に突き出た山に遺跡を形成する事例もある。

以上、駆け足で各時代の遺跡分布を概観してみたが、各時代により遺跡を形成する条件があり、その条件に合う地域を選択していることが解る。また、現在の集落とほぼ変わらない地域に住み着くのは、平安時代後期～江戸時代相当期であると考えられる。

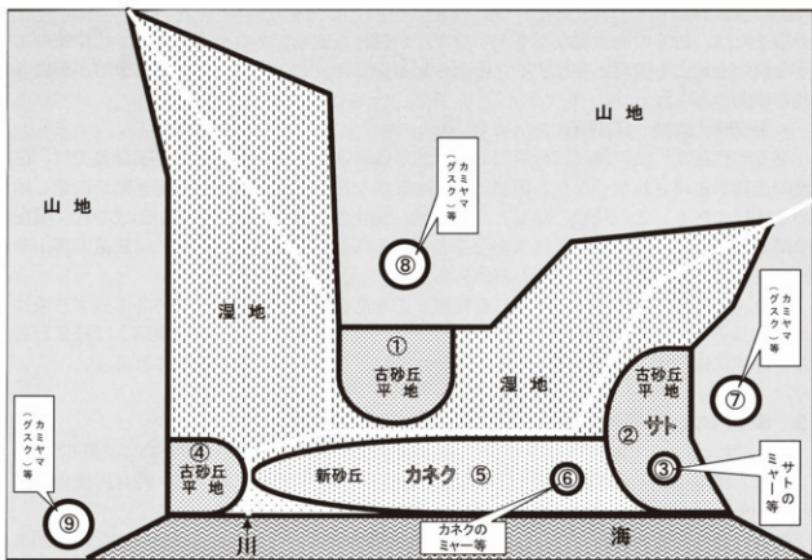
2 集落内の遺跡の立地

それでは、もっと狭い範囲での遺跡の分布・変化をみてみたい。そのために、第 63 図のような、集落の模式図を作成した。各時代により、どこに遺跡が立地し、時代の変化に伴いどのように遺跡の立地が変化するのか確認してみたい。

第 63 図 濑戸内町遺跡立地模式図は、瀬戸内町の集落の特徴である、三方向を山に囲まれ、もう一方は海に面するという地形を模式的に表している。また、河川と河川が形成する沖積低地及び砂丘を入れ込み、瀬戸内町の集落で見られる地形の図とした。ただし、海峡内の集落では、カネクと呼ばれる砂丘が形成されることが多い。その場合は、カネク（新砂丘）は存在せず、平地（沖積低地）が海に面していると考えていただきたい。

模式図の地形の違う地点の 9 箇所に番号をふって、各時代の遺跡がどの地点に立地するかを見てみたい。まず、各地点の地形の説明を行いたい。

- ① 集落の中央の山裾に広がる沖積低地及び古砂丘にあたる。周辺は湿地や川で囲まれている場合が多い。海には面していない。
- ② 集落の海に面している山裾に広がる沖積低地及び古砂丘にあたる。この沖積低地（古砂丘）の先に新砂丘が形成されることが多く、現在のサトと呼ばれる集落が形成されることが多い地形である。海峡内の集落はほとんどがこの地点に形成される。
- ③ サトと呼ばれる集落の中心にある広場（ミヤー）や有力者の屋敷周辺の地点にあたる。カミ屋敷（トネヤ）・グジ屋敷・ミヤー・カミミチなど、ノロ祭祀に関係の深い地点で、集落の有力者が住んでいることが多い。海からは離れていることが多い。
- ④ 地形的には②番に近いが河川で分断されているため、規模は②番より小さい。沖積低地及び古砂丘にあたり、集落が形成されないことが多い。
- ⑤ カネクと呼ばれる集落が形成されている新砂丘にあたる。外洋側の集落のほとんどがこの地点に形成されている。後背に河川や湿地を控えていることが多い。
- ⑥ カネク集落に形成されているミヤー及び有力者の屋敷周辺にあたる。③番と同じくノロ祭祀や有力者に関係する事が多いが、集落に必ず存在するわけではなく、③番ほど存在は確認できない。よって、③番が存在しないで、⑥番のみが存在するという事例は瀬戸内町では確認できない。



第63図 瀬戸内町遺跡立地模式図

遺跡名	縄文	弥生～古墳	鳥島～平安前期	平安前期～江戸	遺跡名	縄文	弥生～古墳	鳥島～平安前期	平安前期～江戸
1嘉徳アサト	(1)				26武名チノウラ				(7)
2嘉徳集落			(5)	(5)・(6)	27儀サト				(2)・(3)
3節子集落	(2)		(5)	(5)・(6)	28瀬相ムラウチ				(2)・(3)
4網野子サト				(6)	29西阿室集落				(5)・(6)
5勝浦集落				(5)・(6)	30花富ヒラタ	(2)			(5)・(6)
6伊須集落	(5)			(5)・(6)	31伊字渡ナカサト	(2)			(2)・(3)
7嘉鉄カイツ		(5)			32齊舟集落				(5)・(6)
8蘇刈集落				(5)	33押舟ムラウチ				(3)
9嘉鉄サト				(2)	34能勝サト				(2)
10清水集落				(5)・(6)	35諸数集落				(2)・(3)
11手安集落				(2)・(3)	36生間ミタ				(2)
12古志サト				(3)	37渡連ムラウチ		(5)		(5)・(6)
13久慈イメ				(2)	38渡連ア・キヤイ	(4)		(5)	(5)・(6)
14久慈マエダ				(2)	39諸鶴ムラウチ				(5)・(6)
15久慈集落				(2)・(3)	40諸鶴グスク				(9)
16管純集落				(5)	41諸鶴クリ				(5)
17西古見城跡					42諸鶴カネク				(5)・(6)
18西古見集落	(5)	(5)	(5)・(6)		43諸純サト				(2)
19実久集落				(5)・(6)	44野見山オサト				(2)・(3)
20芝タンマ				(1)	45秋德集落				(2)
21芝集落				(5)・(6)	46講阿室集落		(5)	(5)	(5)・(6)
22薩川集落				(5)・(6)	47池地アガシマ		(5)		(5)・(6)
23瀬武サト				(2)・(3)	48池地オコロリ				(5)
24多地イバタ				(5)	49与路集落		(5)	(5)	(5)・(6)
25須子茂集落			(5)	(5)・(6)					

表3 瀬戸内町遺跡立地一覧表

- ⑦ 集落の後背に存在する山にあたる。カミヤマ・コーベン・グスクなどの呼称をもつ場合が多い。今調査では、集落と集落周辺の平地を対象としているので、この地点での遺跡の確認は、現段階では十分ではない。
- ⑧ 集落の奥に存在する山にあたる。前面に集落を抱えることはほとんど無い。⑦番と同じくカミヤマ・コーベン・グスクなどの呼称をもつ場合が多い。今調査では、集落と集落周辺の平地を対象としているので、この地点での遺跡の確認はない。現段階での調査は十分ではない。
- ⑨ 海に突き出した山・岬にあたる。ウムグスクと呼称されていることが多いが、今調査では、集落と集落周辺の平地を対象としているので、この地点での遺跡の確認は、十分ではない。

以上の9箇所に地点を分類した。平地で考えると、湿地の地点も番号を落とさなくてはならないが、現段階では遺跡が確認されていないので、今回は除外した。今後の調査で水田跡や、木簡や船などの木製品が出土する可能性はある。

では、実際に各時代により遺跡の分布に変化があるか検証してみたい。今回、確認した49遺跡の各時代の遺跡の立地を示した、表3瀬戸内町遺跡立地一覧表を外観してみると、ここでも各時代により遺跡の分布に変化があることが解る。それでは、それぞれの時代ごとに検証してみたい。

<縄文時代相当期>

縄文時代相当期にあたる遺跡は、5遺跡存在する。この時代では、新砂丘は形成されていないか、形成途中であったと考えられる。そのため、新砂丘での遺跡は確認できない。この時代の遺跡の大半が②番の地点に存在することが確認できる。その他の遺跡も①番・④番の沖積平地及び古砂丘に存在することが確認できる。すべての遺跡が山裾に立地している事実は興味深い。

<弥生時代～古墳時代相当期>

弥生時代～古墳時代相当期にあたる遺跡は、7遺跡存在するが、この時代の遺跡はすべて⑤番に存在していることがわかる。

<飛鳥時代～平安時代前期相当期>

飛鳥時代～平安時代前期相当期の遺跡は、11遺跡存在する。この時代の遺跡もすべて⑤番に存在する。しかし、この時代の遺跡は、弥生時代～古墳時代相当期の遺跡よりも遺物の散布範囲が広大になる傾向がある。また、砂丘のトップより山側（湿地側）に遺跡が形成される傾向がみられる。

<平安時代後期～江戸時代相当期>

平安時代後期～江戸時代相当期にあたる遺跡は、47遺跡存在する。この時代の遺跡は、集落全面に存在する。しかし、ほとんどの遺跡が②番・⑤番（現在の集落が位置している地点）の位置に存在し、遺物が特に集中して散布している地点は③番・⑥番にあたる。

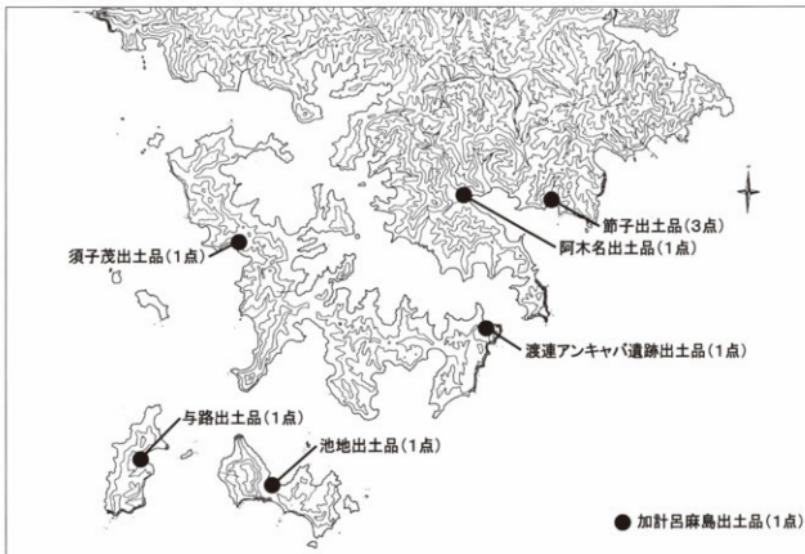
この時代の遺物に、類須恵器の完形品（準完形品）がある。類須恵器の破片に関しては、他の遺物と共に上記の位置で確認できるが、類須恵器の完形品に関しては、出土地点が様々で、集落内の出土地点について傾向を捉えることが難しい。おそらく、類須恵器の完形品は、他の遺物とは用途が異なると考えられる。そこで、類須恵器の完形品に関しては、別

に考察を行いたい。

以上のように、集落内の遺跡の立地も時代により変化があることがわかる。また、集落内の遺跡の立地からみても、現在の集落の位置とほぼ変わらない地域に住み着くのは、平安時代後期～江戸時代相当期にあたると考えられる。

3 完形品の類須恵器出土地点について（第64図）

徳之島で生産され、南西諸島全域に分布していた類須恵器（カムィヤキ）は、平安時代後期～鎌倉時代まで使用されていたと考えられる。類須恵器は、南西諸島全域に分布した最初の遺物であり、製作方法など色々な点で注目が高い遺物である。しかし、完形品（準完形品）は現在の所、ほとんど存在していない。完形品の類須恵器が数多く存在するのは、生産地である徳之島ではなく、奄美大島である。また、完形品として存在する類須恵器は、器高が15cm程度の小型の壺のみであり、瀬戸内町で確認できる完形品及び準完形品の類須恵器は、6点である。その他に、笠利町立歴史民俗資料館所蔵の加計呂麻島出土品が1点、名瀬市立奄美博物館所蔵の阿木名出土品が1点、残念ながら現在行方不明である与路出土品が1点あり、瀬戸内町出土の類須恵器は、9点存在している。瀬戸内町で発見された類須恵器完形品の数は少なくないことが解る。



第64図 瀬戸内町における類須恵器完形品出土分布図

最近、喜界島の山田中西遺跡発掘調査で類須恵器小壺と白磁碗を埋納した遺構が発見された。このような事例は、笠利町や名瀬市でも確認されている。亀井明徳氏の「南西諸島における貿易陶磁器の流通経路」によると、小湊集落から藏骨器として使用された類須恵器小壺が指摘されている。また、池田榮史氏の「類須恵器と貝塚時代後期」でも、埋葬や

埋納の習俗について指摘されている。池田氏は、調査指導の際、瀬戸内町発見の類須恵器完形品の出土状況や資料の状態（底部や頸部への穿孔）から、類須恵器完形品の埋葬・埋納についての可能性を指摘された。また、高梨修氏も調査指導の際に、同様の指摘をされ、類須恵器の分布が奄美大島の東部・喜界島に集中する事実をご教授くださいされた。

興味深いことに平家伝承が色濃く残る地域と、類須恵器完形品が発見された地域が重なる傾向が見られる。よって、平家伝承と類須恵器完形品、葬送の方法に何らかの関係がある可能性が高い。

以上の点から、瀬戸内町の完形品の類須恵器について分布を確認すると、高梨氏の指摘のとおり、瀬戸内町においても東部に出土地が集中することが確認できる。また、聞き取りにおいて出土地点が確認できる節子集落の類須恵器と与路集落の類須恵器について出土地点を確認してみると、節子集落の類須恵器は、節子集落遺跡からの出土ではなく、節子川の下流の地点と上流の谷間の地点で出土しており、他の遺物や包含層らしき層も確認できず、類須恵器のみの出土であることが確認できた。節子集落で出土している類須恵器は、1点は底部に穿孔があり、残りの2点は頸部に穿孔をもつ資料である。与路集落の類須恵器の出土地点は、集落内のカミミチと呼ばれる道で、人骨とともに出土したことである。人骨は壺の中に納められていたのではなく、人骨のそばから類須恵器が出土したとのことである。

以上のことから、瀬戸内町で完形品として出土する類須恵器は、遺跡との関係性よりも池田氏の指摘する埋葬及び埋納に関係がある可能性が高いと考えられる。

4まとめ

瀬戸内町で確認できる遺跡の立地傾向について、瀬戸内町全域と集落内の視点から確認してみたが、瀬戸内町で確認できる遺跡の立地は、各時代によって変化することが確認できた。それでは、瀬戸内町で確認できる遺跡を、各時代でまとめ立地傾向をみてみたい。

<縄文時代相当期>

遺跡の立地は、瀬戸内町の東部に集中する傾向がみられる。外洋側の沖積低地及び古砂丘で、山裾に形成される傾向がある。縄文時代相当期では、狩猟・採集を中心に行っていたと考えられ、遺跡の立地条件として、山や海に近い平地であることが条件であったと考えられる。新砂丘は形成されていないか形成途中であったため、山裾の平地を居住空間に選択したのではないかと考えられる。

<弥生時代～古墳時代相当期>

遺跡の立地は、外洋側の新砂丘に形成される傾向がみられる。また、遺跡が立地する集落の海では、現在でもゴホウラが獲れる地域が多い。弥生時代～古墳時代相当期では、縄文時代相当期と同様、狩猟・採集の生活を行っていたと考えられるが、西日本で盛行した腕輪の原材である南海産大型巻貝（ゴホウラ・イモガイ）の需要が増え、対外交流が盛んになったため、ゴホウラやイモガイの生息域の近くに居住したと考えられる。沖縄諸島でゴホウラやイモガイの集積が確認されているが、瀬戸内町でも今後の調査により確認される可能性が高い。

<飛鳥時代～平安時代前期相当期>

遺跡の立地は、外洋側の新砂丘に形成される傾向がみられる。弥生時代～古墳時代相当期の遺跡よりも遺物の散布は広いことが多い。また、新砂丘の中でも、遺跡が形成されるのは、砂丘のトップより山側（湿地側）である傾向がみられる。奄美諸島では、飛鳥時代～平安時代前期相当期でも、狩獵・採集の生活を行っていたと考えられる。日本列島では、仏教が伝来し、螺鈿などの工芸品の製作が開始された。そのことにより、ゴホウラやイモガイの需要が減り、ヤコウガイの需要が増えたと考えられる。高梨氏が命名したヤコウガイ大量出土遺跡が、奄美諸島を中心に出現するのはこの時代である。瀬戸内町でも、この時代の遺跡は、ヤコウガイの生息域の近くに居住している傾向がみられる。瀬戸内町の遺跡では嘉鉄カツ遺跡（皆津遺跡）がこの時代に相当するが、ヤコウガイの出土量は確認できない。しかし、今後の調査で、瀬戸内町でもヤコウガイ大量出土遺跡が発見される可能性は高いと考えられる。

＜平安時代後期～江戸時代相当期＞

遺跡の立地は、瀬戸内町全域に広がり、現在の集落と重なることが多い。また、遺物の散布は広範囲に広がるが、集中して散布しているのは、ミヤ一周辺及び有力者の屋敷周辺である。そのことから、現在の集落が形成され始めたのはこの時代からであると考えられる。平安時代後期～江戸時代相当期になると、奄美諸島は、日本列島と琉球国の境界地域となる。稲作の生活も始まり、外洋側だけでなく、海峡内にも居住空間が形成される。遺物の散布は広範囲におよぶが、特に遺物が集中するのは、ミヤーや有力者の屋敷周辺である。陶磁器などの交易品の多くは、有力者が所有していた可能性も考えられる。また、類須恵器の散布地と青磁など中国貿易陶磁器の散布地、そして薩摩焼の散布地がミヤーや有力者の屋敷に重なる傾向がみられる。このことから国家領域の変化により、有力者が居住していた地点が変化することはなかった可能性も高い。

＜完形品の類須恵器出土地＞

完形品の類須恵器の出土地点は傾向を捉えることが困難である。瀬戸内町では、類須恵器が使用されていた時代の遺跡と重なることがなく、出土地点も集落内や河口近く・谷と様々である。ただし、完形品の類須恵器は大きさがほぼ統一された小壺であり、埋葬や埋納の可能性が高いことが瀬戸内町の事例からも確認できた。

瀬戸内町で確認・再確認された遺跡について、遺跡立地の傾向をまとめてみたが、各時代により遺跡を形成する地点が変化することが確認できた。それは、各時代により生活様式や対外交流が変化し、それに伴い遺跡が立地する条件にも変化が起きたからであると考えられる。

今回、確認できた傾向は、奄美大島の南部地域で同様の傾向が見られるのではないかと考えられる。今後の調査の参考になれば幸いである。しかし、今回の調査は、瀬戸内町の集落及び集落周辺の約七割のみの情報である。瀬戸内町には、調査が完了しなかった残り約三割の調査地域と、集落は形成されていないが、小さな湾を形成し、僅少な平地を有する地点が無数に存在する。この未調査地域の調査を怠がなければならない。また、山地における調査や、近代化遺産の調査など、まだまだ調査を行わなければならぬことが山積みである。瀬戸内町の埋蔵文化財は、遺跡の確認が始まったばかりで、遺跡の情報収集など今後の課題は山積みである。

第6章 総 括

瀬戸内町教育委員会が平成15年度から実施継続している、瀬戸内町の埋蔵文化財詳細分布調査の平成16年度までの調査成果を報告してきた。確認・再確認の遺跡は、49遺跡と数多くの遺跡が確認できた。今まで、奄美大島では、北部地域に遺跡が集中することが知られてきたが、今回の調査で南部地域にも多くの遺跡が存在することが確認でき、重要な成果があがったと考えられる。しかし、依然として調査対象地域の約三割が未調査であり、山地や小さな入り江など調査が必要であると考えられる地域も未調査のままであることを考えると、瀬戸内町の遺跡数はまだまだ増大すると考えられ、今後の調査が重要であることが理解できる。

今回、49遺跡が確認・再確認されたわけだが、これらの遺跡は、地表面に散布している遺物を採集する調査で確認している。踏査においては地下の遺跡を完全に把握することは不可能であるため、今後は、新たな遺跡の確認と同時に確認できた49遺跡の確認発掘調査が必要である。

今回の報告書が、開発事業と文化財保護の調整が円滑に行えるための基礎資料になると期待しているが、それ以上に埋蔵文化財の保護には、開発事業の早期把握が重要である。教育委員会では、今まで以上に、開発関係者と連絡を取り合える体制を確立していかなければならない。また、新たに確認された遺跡が多く存在するため、地域住民にも知られていない遺跡が多数存在する。地域住民への啓発普及も急務であり、体験発掘や学校の授業への出前講座などの取り組みも必要であると考えられる。

以上のことより、今回の調査によって重要な成果があったことが解るが、それ以上に課題も多く残されていることが解る。今回の調査は未調査地区を多く残しており、調査終了地域も表面に散布している遺物の採集のみの調査で、発掘調査は行っていない。今回の調査で、瀬戸内町の埋蔵文化財の調査が終了したのではなく、出発点であること理解しなければならない。

本格的な調査はこれからである。開発事業との調整を行なながら、確認された遺跡の啓発普及を行い、多くの遺跡の性格・範囲を確認していかなければならぬ。

謝 辞

近年、瀬戸内町では、開発事業と埋蔵文化財保護の調整が増加し、埋蔵文化財保護や調査が年々重要となってきました。しかし、瀬戸内町では、埋蔵文化財に対する対応が確立されていませんでした。瀬戸内町では、埋蔵文化財保護の体制作成が急務になりました。その際、多くの方々に御協力いただきました。特に、鹿児島県教育庁文化財課の皆様には懇切丁寧な御指導と御助言をいただきました。おかげさまで行政資料整備や体制作成が格段に充実いたしました。厚く御礼申し上げます。

そして、ご多忙中にも関わらず、調査指導してくださいました琉球大学の池田栄史先生、調査指導だけでなく、埋蔵文化財の保護行政についても御教授くださいました名瀬市教育委員会の高梨修先生、遺物の製作実験から、貝などの生息域まで幅広い貴重な御教授をくださいました徳之島町の文化財保護審議会委員の池村茂先生、先生方の御指導いただくことができたからこそ、瀬戸内町の文化財保護は貴重な一步をしたせたと思います。また、調査協力してくださいました瀬戸内町文化財保護審議会会长の前田芳之先生、諸鈍シバヤ芸能保存会会长の上田伊津夫先生、遺物の整理に協力してくださいました名瀬市教育委員会嘱託員の清さつき先生、先生がたの御協力のおかげで調査・遺物整理を円滑に進めることができました。心より御礼申し上げます。

最後になりましたが、今回の遺跡詳細分布調査を行う上で、瀬戸内町役場各課から御高配・御指導を賜りました。特に、瀬戸内町役場建設課の皆様には、埋蔵文化財の保護に御協力いただき、開発事業と文化財保護を円滑に進めていくよう御協力いただいております。厚く御礼申し上げるとともに、今後とも御指導・御協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

以上、瀬戸内町遺跡詳細分布調査は、多数の皆様方の御理解と御協力により成し遂げられたものであります。衷心より厚く御礼申し上げます。これからも調査を継続してまいりますが、今後とも御指導、御助言、御協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

瀬戸内町文化財調査報告書第1集

瀬戸内町遺跡詳細分布調査報告書

2005年3月31日発行

編集・発行 瀬戸内町教育委員会

〒894-1592 瀬戸内町古仁屋船津23

印 刷 (有)奄美共同印刷

〒894-0021 名瀬市伊津部町21-14